

荒屋遺跡

A R A Y A S I T E

—第5次調査 宅地造成に伴う発掘調査報告書—

2021.10

有限会社タイキ・盛岡市教育委員会

荒屋遺跡 発掘調査報告書

—第5次調査 宅地造成に伴う発掘調査報告書—

2021.10

有限会社タイキ・盛岡市教育委員会

例 言

- 1 本書は、岩手県盛岡市永井第25地割地内に所在する、文化財保護法に基づく周知の埋蔵文化財包蔵地「荒屋遺跡」における、有限会社タイキによる宅地造成工事に伴い盛岡市教育委員会が協定に基づき実施した発掘調査の報告書である。
- 2 試掘調査として令和元年(2019)年10月30・31日に届出面積4,117㎡を対象に第4次調査を実施した。その結果遺構遺物を確認した約2,700㎡の本発掘調査を、有限会社タイキと盛岡市教育委員会が締結した協定書に基づき、第5次調査として令和2年(2020)4月23日から同年8月26日に実施した。第4・5次調査の野外調査、整理作業、報告書刊行等にかかる費用は、有限会社タイキが支出した。
- 3 第4次調査(試掘調査)は、盛岡市教育委員会歴史文化課埋蔵文化財担当遺跡の学び館の文化財主査 津嶋知弘・同 今野公顕が担当した。第5次調査(本調査)は、同今野公顕・文化財調査員 佐々木あゆみが担当した。また、本書の執筆編集は、同今野公顕・佐々木あゆみが、遺跡の学び館埋蔵文化財担当職員と協議の上、担当した。
- 4 遺構平面位置は、平面直角座標X系を用いた調査座標で表示した。遺構等の高さは、標高値をそのまま使用した。調査座標原点 X=38,800m, Y=27,300m(世界測地系第X系) = $RX \pm 0$, $RY \pm 0$ (調査座標値)
- 5 土層断面図は、堆積の仕方を重視し、線の太さを使い分けた。層相観察には「新版標準土色帖」(農林水産省農林水産技術会議事務局監修)を使用した。
- 6 本書で用いる遺構種別ごとの略号は、次のとおりとした。
・竪穴建物跡(カマドあり): RA ・竪穴建物跡(カマド無し): RE ・土坑: RD ・溝跡: RG
- 7 本書で用いる遺構平面図の線種は、次のとおりとした。

区別	線種
検出	実線
推定・オーバーハング	破線
時期差	一点鎖線

- 8 竪穴建物跡の遺物取上時の平面位置は、遺構長軸短軸方向に設定した埋土断面観察ベルトによって、北東部はNE、南西部はSWというように、四分割の位置で表した。床面直上出土のものは番号を付して平面位置を記録した。
- 9 カマド方向は、カマド本体焚き口の中心と煙道先端煙出し部の中心を結んだ線の方向の傾きとした。
- 10 古代の土器は、土師器・須恵器・あかやき土器に分類した。あかやき土器の名称は、回転台使用成形の酸化炎焼成土器に使用した。回転台使用成形で内面黒色処理がある酸化炎焼成の坏類は、土師器に分類した。
- 11 出土遺物の写真撮影は今野公顕が行った。
- 12 空中写真撮影及びオルソデータ作成と遺物実測の一部を株式会社タックエンジニアリングに委託した。出土鉄製品の保存処理と炭化材の科学分析は、株式会社パレオラボに委託し、その結果を第4章に掲載した。
- 13 第1図は国土地理院長の承認を得て同院発行の五万分の一の地形図を複製した盛岡市管内図(承認番号 平17.東復第215号)を利用した。第3図、第4図は、岩手県の承認を得て岩手県所有の盛岡広域都市計画図(1/2500, 1/10000)を複製したものを使用した(承認番号 平成29年8月21日岩手県指令第8-5号)。
- 14 発掘調査に伴う出土遺物及び諸記録は、盛岡市遺跡の学び館にて保管している。
- 15 次の諸氏に発掘調査実施及び本書作成にあたり多大なる御協力を頂いた。記して感謝申し上げる。(敬称略)
藤川 稔、藤川 則夫、上通町内会、西見前第2ニュータウン自治会、
西野 修、八戸市立図書館、菅田 慶信、高橋 正、大沼 信忠、盛岡市都南歴史民俗資料館・藤川 理恵
- 16 調査成果報告は、現地説明会資料やその他既報告より、本書の内容が優先する。

目次

第1章 経過	1	第4章 科学分析・保存処理	73
1 調査に至る経過	1	1 放射性炭素年代測定	73
2 第5次調査の発掘作業・整理作業の経過	1	2 荒屋遺跡出土炭化材の樹種同定	77
3 体制	2	3 荒屋遺跡出土鉄製品の保存処理	80
第2章 位置と環境	4	第5章 第3次調査概要	88
1 地理的環境	4	1 経過	88
2 歴史的環境	8	2 成果	88
3 これまでの調査	10	3 まとめ	89
第3章 調査成果	11	第6章 総括	93
1 調査の方法	11	1 調査のまとめ	93
2 基本層序	11	2 荒屋遺跡の古代集落について	99
3 遺構・遺物	12	2 “ちょうえんぼう”について	101
		写真図版	104
		報告書抄録	

表目次

第1表 荒屋遺跡4・5次発掘調査の主な経過	3	第11表 放射性炭素年代測定および暦年校正の結果	74
第2表 荒屋遺跡調査実績	10	第12表 樹種同定結果	77
第3表 荒屋遺跡第5次調査 基本層序	11	第13表 第3次調査出土遺物観察表	90
第4表 第5次調査堅穴建物跡観察表	24	第14表 荒屋遺跡・高槽A遺跡堅穴建物跡規模 散布図	94
第5表 第5次調査堅穴建物内ピット観察表	24	第15表 荒屋遺跡・高槽A遺跡堅穴建物跡 カマド方位の割合	95
第6表 第5次調査土坑観察表	24	第16表 荒屋遺跡・高槽A遺跡堅穴建物跡 カマド方位の分布	95
第7表 第5次調査ピット観察表	24	第17表 出土土器の分類	96
第8表 第5次調査土層観察表	25	第18表 荒屋遺跡・高槽A遺跡堅穴建物跡分類	97
第9表 第5次調査出土遺物観察表	31		
第10表 測定試料および処理	73		

図目次

第1図 荒屋遺跡位置図(1:100,000)	4	第10図 RA08 堅穴建物跡(1)	38
第2図 地形分類と主な遺跡の分布	6	第11図 RA08 堅穴建物跡(2)	39
第3図 荒屋遺跡と周辺の遺跡分布図	7	第12図 RA08 堅穴建物跡(3)	40
第4図 荒屋遺跡・菖蒲田遺跡・高槽A遺跡全体図	10	第13図 RA08 堅穴建物跡(4)	41
第5図 荒屋遺跡第4次・第5次調査全体図	13	第14図 RA09 堅穴建物跡(1)	42
第6図 RA04 堅穴建物跡	34	第15図 RA09 堅穴建物跡(2)	43
第7図 RA05 堅穴建物跡	35	第16図 RA10 堅穴建物跡	44
第8図 RA06 堅穴建物跡	36	第17図 RA11 堅穴建物跡	45
第9図 RA07 堅穴建物跡	37	第18図 RA12 堅穴建物跡	46

第 19 図	RA13 竪穴建物跡	47
第 20 図	RE01 竪穴建物跡	48
第 21 図	RE02 竪穴建物跡	49
第 22 図	RD06～09 土坑	50
第 23 図	RD10～13 土坑	51
第 24 図	RD14～16 土坑	52
第 25 図	RC03-04 溝跡(1)	53
第 26 図	RC03-04 溝跡(2)	54
第 27 図	RC03-04 溝跡(3)	55
第 28 図	ビット1～4	56
第 29 図	旧低地トレンチ	56
第 30 図	RA04 竪穴建物跡出土遺物	57
第 31 図	RA05 竪穴建物跡出土遺物	58
第 32 図	RA06 竪穴建物跡出土遺物	59
第 33 図	RA07 竪穴建物跡出土遺物	60
第 34 図	RA08 竪穴建物跡出土遺物(1)	61
第 35 図	RA08 竪穴建物跡出土遺物(2)	62

第 36 図	RA08 竪穴建物跡出土遺物(3)	63
第 37 図	RA08 竪穴建物跡出土遺物(4)	64
第 38 図	RA08 竪穴建物跡出土遺物(5)	65
第 39 図	RA09 竪穴建物跡出土遺物(1)	66
第 40 図	RA09 竪穴建物跡出土遺物(2)	67
第 41 図	RA09 竪穴建物跡出土遺物(3)	68
第 42 図	RA09 竪穴建物跡出土遺物(4)	69
第 43 図	RA10 竪穴建物跡出土遺物	70
第 44 図	RA11 竪穴建物跡出土遺物	71
第 45 図	RA12・RE01 竪穴建物跡, RD10 土坑, 検出面出土遺物	72
第 46 図	暦年校正結果	76
第 47 図	荒屋遺跡第3次調査全体図	89
第 48 図	RA01 竪穴建物跡出土遺物	90
第 49 図	RA02 竪穴建物跡出土遺物(1)	91
第 50 図	RA02 竪穴建物跡出土遺物(2)	92
第 51 図	RA09 竪穴建物跡出土土器垂直位置	96

写真図版目次

第 1 図版	遺跡周辺の航空写真	9
第 2 図版	炭化材の走査型電子顕微鏡写真	79
第 3 図版	鉄製品保存処理作業工程写真	84
第 4 図版	処理 No.1 鉄製品 保存処理前・後写真 (RA08 竪穴建物跡出土 刀子)	85
第 5 図版	処理 No.2 鉄製品 保存処理前・後写真 (RA07 竪穴建物跡出土 刀子)	86
第 6 図版	鉄製品 X線写真	87
第 7 図版	RA11 竪穴建物跡カマド構築土内出土 土師器甕の口縁部	95
第 8 図版	第5次調査区 全景写真(1)	104
第 9 図版	第5次調査区 全景写真(2)	105
第 10 図版	第5次調査区 全景写真(3)	106
第 11 図版	第5次調査 遺構(1) RA04～07	107
第 12 図版	第5次調査 遺構(2) RA08	108

第 13 図版	第5次調査 遺構(3) RA08～09	109
第 14 図版	第5次調査 遺構(4) RA09～10	110
第 15 図版	第5次調査 遺構(5) RA10～11	111
第 16 図版	第5次調査 遺構(6) RA12-13, RE01-02	112
第 17 図版	第5次調査 遺構(7) RE02, RD06～08	113
第 18 図版	第5次調査 遺構(8) RD09～15, RC03-04	114
第 19 図版	第5次調査 遺構(9) トレンチ, 作業風景, 現地説明会	115
第 20 図版	第5次調査 出土遺物(1) RA04～07	116
第 21 図版	第5次調査 出土遺物(2) RA07～08	117
第 22 図版	第5次調査 出土遺物(3) RA09	118
第 23 図版	第5次調査 出土遺物(4) RA09～11	119
第 24 図版	第5次調査 出土遺物(5) RA11-12, RE01, RD10, 鉄製品, ほか	120
第 25 図版	第3次調査 遺構, 遺物 RA01-02	121

第1章 経過

1 調査に至る経過（第1表）

（1）第4次調査（試掘調査）

令和元年8月23日、有限会社タイキから盛岡市教育委員会歴史文化課埋蔵文化財担当である盛岡市遺跡の学び館に、周知の埋蔵文化財包蔵地宅地「荒屋遺跡」内の畑地における宅地造成計画に係る埋蔵文化財の取扱いについて協議があった。市遺跡の学び館は、隣接地で堅穴建物跡が検出された事例（第3次調査）があること、土器片が表面採集されること、対象面積が約4,000㎡超と広大であることから、確認の試掘調査が必要の旨を回答した。これを受け、同年9月26日付で、有限会社タイキから盛岡市教育委員会に、4,111㎡を対象に発掘届が提出された。

市遺跡の学び館は、同年10月30～31日にバックホーにてトレンチ（試掘溝）を掘る遺構確認の試掘調査を実施した。その結果、古代の堅穴建物跡、土坑、溝跡を検出し、奈良時代の土器（土師器）片42点が出土した。遺構遺物を地下保存し宅地造成をすることは不可能なため、事業実施には試掘調査で遺構遺物を確認した約2,700㎡を対象とした本調査が必要と報告した。

（2）第5次調査（本調査）

第4次調査の結果を受け、有限会社タイキから盛岡市教育委員会に、令和元年12月4日付で発掘届が提出された。同年12月6日付で、岩手県教育委員会から有限会社タイキに対し、工事着手前に発掘調査実施が必要である旨が通知された。

協議の結果、有限会社タイキから盛岡市教育委員会に対し令和2年4月17日付で埋蔵文化財包蔵地本発掘調査実施にかかる協力依頼があり、同年4月22日付で「埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」を締結した。この協定に基づき、開発面積4,088㎡、調査面積2,700㎡を対象とし、有限会社タイキが作業員の雇用や現場調査、整理作業、報告書刊行等の諸費用を負担し、市教育委員会が遺跡の学び館埋蔵文化財担当職員を派遣し、本調査を実施することになった。

2 第5次調査の発掘作業・整理作業の経過（第1表）

（1）発掘作業の経過

有限会社タイキと盛岡市教育委員会が締結した協定に基づき、令和2年4月23日から発掘調査準備に着手した。同年4月24日から、有限会社タイキが極下建設株式会社に依頼し、駐車場砂利敷き、コンテナハウスと仮設トイレの設置、バックホー0.45㎡、キャリアダンプ8tにて表土除去作業に着手した。また同年5月7日に、有限会社タイキと発掘作業員が雇用契約を結び、本格的な発掘調査作業に着手した。

発掘調査区内から砂埃が周辺の住宅へ飛散するため、同年6月18日に調査範囲ほぼ全面にブルーシートを敷き詰めた。野外作業ができない雨天時には、市遺跡の学び館にて出土土器の洗浄作業などを行った。

発掘調査中、周辺住民等が立ち寄った際は、調査状況を案内する等の対応をした。また、現場入口に発掘調査の作業内容を掲示し、市民が埋蔵文化財調査や地域の歴史への理解を深められるように努めた。

同年8月1日に現地説明会を開催した。新型コロナウイルス感染拡大防止対策をとりながら開催だったが、周辺住民や市民など約100人が来場した。隣接する上通町内会と西見前第2ニュータウン自治会の協力

を得て、事前に周辺住民に回覧板にて説明会開催の周知をした。また、岩手日報では同年7月29日付で説明会開催について、同年8月3日付の盛岡タイムスでは開催の様子が掲載された。説明会中には、堅穴建物跡の実測作業を継続したり、発掘調査で使う道具を展示したり、調査作業の一端も紹介した。夏休み期間中でもあり、小学生の親子が自由研究の宿題にすとしてメモや写真を取っていた様子が印象的だった。

同年8月7日に、株式会社タックエンジニアリングに委託し、UAVマルチコプターによる空中写真撮影を行った。

同年8月25日に遺構精査や記録作業の完了、同26日に現場機材撤収し、野外発掘調査作業を終了した。

(2) 整理作業の経過

令和2年8月27日から、出土遺物の洗浄、現場図面及び出土資料の整理など調査のまとめ作業に着手した。現場図面(第1原因)を整理し、第2原因を作成、それをもとに本書掲載図の作成をした。

出土遺物は、野外作業期間中の雨天時や野外発掘作業終了後に洗浄した。その後、接合や修復の作業、出土地点及び器種等ごとの分別、台帳登録を行い、図化できるものは実測図化、写真撮影等を行った。土器実測の一部は、株式会社タックエンジニアリングに委託した。

また、出土鉄製品の保存処理、出土炭化材の樹種同定とAMS年代測定を、令和2年9月2日から令和3年1月29日まで、株式会社パレオ・ラボに業務委託し実施した。本書第4章にその結果を掲載した。

3 体制 (令和2・3年度)

事業主体 有限会社タイキ 代表取締役 藤井義弘(岩手県盛岡市中ノ橋通一丁目5-24)

調査主体 盛岡市教育委員会 教育長 千葉仁一
教育部長 豊岡勝敏(2年度)・岡市和敏(3年度)
教育次長 大澤 浩(2年度)・川原善弘(3年度)

事務局 盛岡市教育委員会事務局 歴史文化課
歴史文化課長 兼 遺跡の学び館長 福田 淳(2年度)・割船活彦(3年度)

調査担当 盛岡市教育委員会 歴史文化課 埋蔵文化財担当・遺跡の学び館
課長補佐 兼 館長補佐 三浦志麻(2年度)・大森 勲(3年度)
文化財副主幹 室野秀文(2年度)、菊地幸裕
文化財主査 津嶋知弘、神原雄一郎(3年度)、今野公顕、花井正香
文化財主任 似内啓邦(2年度)、主任 杉浦雄治
文化財主事 鈴木俊輝、今松佑太(3年度)、杉山一樹(3年度)
文化財調査員 今松佑太(2年度)、佐々木あゆみ、鈴木郁美(2年度)、
伊藤聡子、浜谷 佑(3年度)、室野秀文(3年度)
学芸調査員 千葉貴子、樋下理沙

担当者 ・第4次調査(令和元年度・試掘調査) 津嶋知弘、今野公顕
・第5次調査(令和2年度・本発掘調査) 今野公顕、佐々木あゆみ
・報告書執筆編集 今野公顕、佐々木あゆみ

発掘調査・整理作業 作業員

秋元理恵, 及川亜矢子, 菊地泰乃, 高橋弘子, 千葉智子, 袴田英治, 袴田(西田)千佳, 樋口泰子,
細田幸美, 村上幸子, 村上美香, 山田聖子

委託業務等

- ・表土除去等業務委託：樋下建設株式会社
- ・空中写真撮影及びオルソデータ作成業務委託：株式会社タックエンジニアリング
- ・出土遺物実測図化業務委託：株式会社タックエンジニアリング
- ・科学分析及び保存処理等業務委託：株式会社パレオ・ラボ
- ・報告書印刷製本：株式会社阿部印刷

第1表 荒屋遺跡第4・5次発掘調査の主な経過

令和元年	8月23日	(有) タイキから盛岡市教育委員会へ埋蔵文化財包蔵地における開発計画の事前協議。
	9月26日	(有) タイキから宅地造成に伴う発掘届の提出。 協議の結果、重機委託料は事業主負担で、畑の作物収穫後に、試掘調査実施とする。
	10月30・31日	届出面積4,117㎡を対象に、試掘トレンチによる試掘調査(第4次調査)実施。 竪穴建物跡等検出, 土師器出土。
	11月11日	盛岡市教育委員会から有限会社タイキに、試掘調査結果報告。 約2700㎡を対象に事業主負担による本調査が必要とする。
	11月28日	(有) タイキと盛岡市教育委員会歴史文化課埋蔵文化財担当(遺跡の学び館)とで、本調査にかかるとスケジュールや費用について協議。
	12月4日	(有) タイキから、宅地造成に伴う発掘届が提出される。
令和2年	12月6日	岩手県教育委員会から(有) タイキへ、工事着手前に発掘調査実施が必要の旨通知。
	3月12日	有限会社タイキと市教育委員会歴史文化課埋蔵文化財担当(遺跡の学び館)とで、調査スケジュール等について協議。
	4月17日	有限会社タイキから市教育委員会へ、発掘調査実施の協力依頼提出。
	4月22日	有限会社タイキと市教育委員会とで、埋蔵文化財発掘調査に関する協定書締結。
	4月23日	第5次調査, 発掘調査準備。
	4月24日	コンテナハウス, 仮設トイレ設置, 駐車場砂利敷き実施, 表土除去作業(～4月28日)。
	5月7日	現場器財搬入, 作業員稼働開始, 遺構検出, 精査等野外発掘調査作業を開始。
	5月12日	基準点測量, 杭設置, 標高基準点測量, 全体図作成等(～5月15日)。
	6月18日	現場周辺への砂埃対策シート敷設。
	8月1日	発掘調査現地説明会開催, 約100名来場。
	8月7日	空中写真撮影及びオルソデータ作成業務委託による空中写真撮影。
	8月26日	野外調査終了, 現場器財撤収。
	8月27日	出土遺物洗浄作業, 整理作業開始。
8月28日	コンテナハウス, 仮設トイレ撤去。	
9月2日	科学分析及び保存処理等業務委託契約締結。	
9月18日	空中写真撮影業務委託, 成果品納品。	
10月9日	遺物実測業務委託契約締結。	
令和3年	1月29日	科学分析及び保存処理等業務委託, 成果品納品。
	2月28日	遺物実測業務委託の成果品納品。
	9月2日	発掘調査報告書の印刷製本契約締結。
	10月15日	発掘調査報告書納品。 発掘調査報告書, 関係機関等へ送付。
		埋蔵文化財発掘調査に関する協定締結内容の完了。

第2章 位置と環境

1 地理的環境

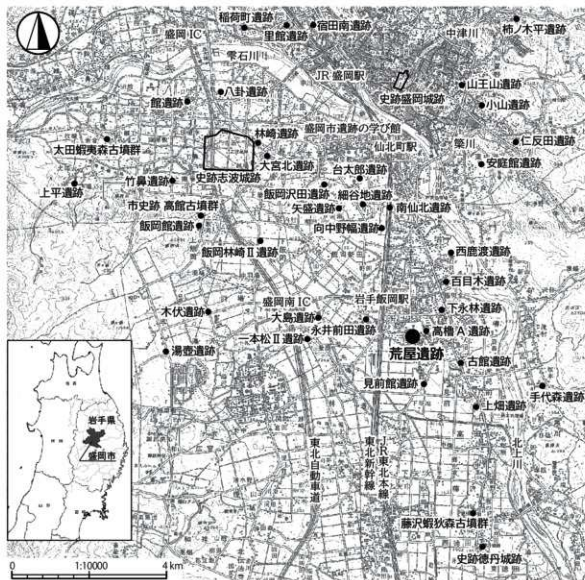
(1) 位置 (第1図)

荒屋遺跡は、岩手県盛岡市永井第25地割地内、西見前第19地割地内に所在する。

盛岡市は、岩手県の内陸部中央北寄りに位置する県庁所在地である。人口は289,353人(令和3年8月1日現在・平成27年国勢調査人口確報値に基づく推計人口)、面積は886.47㎢である。

盛岡市は、東の北上山地と西の奥羽山脈の間を南へ流れる北上川が作り出す北上盆地の北端に位置する。本遺跡は、市域の南部の旧都南村域に位置する。北上川の西岸に広がる平野部に位置し、北上川は遺跡の東約1.8kmを南流している。JR岩手飯岡駅から南東約900m、盛岡市都南文化会館の南約400mに位置する。

遺跡範囲は、東西約190m、南北約120m、総面積は約14,900㎡と想定され、標高は約115.1~115.8mほどである。



第1図 荒屋遺跡位置図(1:100,000)

(2) 地形・地質 (第2図)

盛岡市は、東北地方太平洋側の北上山地と奥羽山脈の間を南に貫流する北上川によって形成された北上盆地の北端に位置する。北上川は岩手県北部の岩手町を水源地とし、宮城県石巻市で太平洋に注ぐまで、多くの河川と合流し水量を増していく。北上川に合流する最初の大きな河川である碓氷川と北上山地から西流する中津川等が盛岡市域で合流し、それ以南には幅広い平野部を形成する。碓氷川は奥羽山脈から東進し碓氷盆地を形成するが、烏泊山と箆ヶ森に挟まれた繫北の浦付近で急激に流路をせばめられ、その狭窄部を抜けて北上盆地に入り北上川と合流する。狭窄部以西では多くの急流小河川をあわせ碓氷川水系を形成し、水量を豊かにして狭窄部につきあたる。その勢いで狭窄部付近に土砂の沈下堆積が生じ、狭窄部以東の平坦な地形と合わせ、流路転換の原因となっている。この流路転換は現碓氷川の南岸で行われ、北岸はほとんど碓氷川の河道になっていない。これは北岸に、岩手山を供給源とする火山砕砕堆積物と火山灰層をのせる台地が発達していることによる。

狭窄部以東の南岸には碓氷川の旧河道が幾筋も認められ、沖積段丘(砂礫段丘)が発達する。沖積段丘は水成砂礫層を基底に、その上に水成シルト、表土が覆う。基本層は概ねこの3層に分けられ、各地点に大略この3層が観察されるもの、砂礫層の上面高は一定せず、層厚や層相も地点によって異なり、近接地点で大きく相違することもある。シルト層内に腐植土(あるいは火山灰か)を介する地点もあり、長期にわたる堆積とみられる。このシルトは旧河道ばかりでなく、微高地などにも堆積している。

碓氷川の旧河道は連続する大きなものが4条あり、そのほか細かな網状のものも多くみられる。大きな旧河道の南岸には比高差の小さい河岸段丘が形成される。南から現河道に向かって低くなることから、河道が北進したことを示し、網状の細かな旧河道は複雑な河道の変遷を示す。沖積段丘は碓氷川に周辺山地から供給される砂礫やシルトによって堆積され、さらに河道の定まらない碓氷川による下刻や堆積がくり返されたと言え、常に河川の影響を受けた不安定な地形であったと言える。

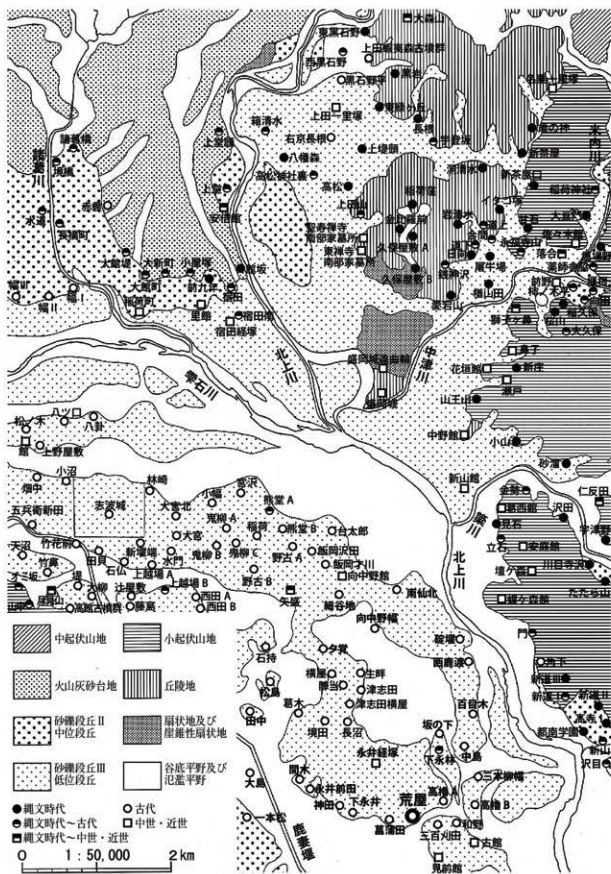
この段丘面上には、本遺跡をはじめとした多くの奈良・平安時代以降の遺跡が分布し、水成シルトが平安時代前半の堅穴住居を埋没させている例もある。また、水成シルト層は地点によって薄い遺物包含層を形成していることもあり、縄文時代の遺物がまれに出土する。網目状に確認される旧河道には、水成砂礫層上面に水成堆積の黒色土が堆積し、その下層にグライ層が形成されることもある。碓氷川と北上川の氾濫の影響を受け、水成シルト層の一部に砂層が形成されている場合もある。

(3) 景観

本遺跡周辺からは、北の左側に岩手山、右側に姫神山、北遠方に七時雨山しちときあめやま、西に秋田駒ヶ岳、南東に早池峰山はやいけねを望む。その手前には、東に北上山地、西に飯岡山から南昌山に続く山地が南北に連なる。南方は北上川西岸にそって延びる平野が続き、紫波町の城山(高水寺城跡)などを望む。

昭和23年の米軍撮影の航空写真(第1図版)では、田畑が広がり、住宅や寺社が散在する様相がうかがえ、江戸時代以来の農村地帯であったことがうかがえる。東に江戸時代以降の奥州街道である国道4号線、西にJR東北本線と東北新幹線が南北に延び、幹線沿いの農村地帯と言える。

現在では、本遺跡周辺より南方には園場整備がなされた水田が広がるが、北・東・西方には宅地が広がる。その宅地の間に畑地が点在するが、それらが年々宅地等へと開発が著しく進んできている地域である。



第2図 地形分類と主な遺跡の分布

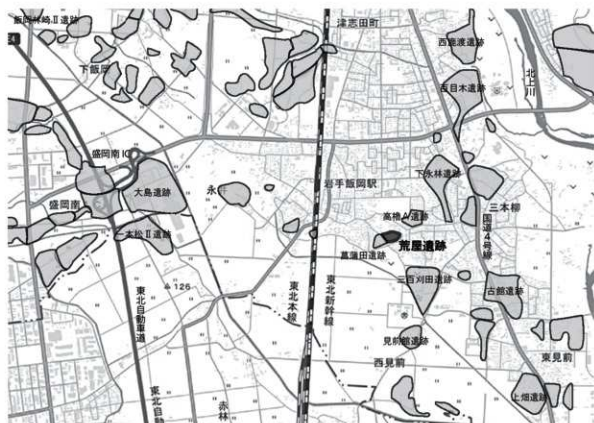
(4) 周辺の遺跡 (第1・2・3図)

本遺跡周辺には、古代以降の遺跡が多く分布する。

代表として、本遺跡から約 5.5km 北西には延暦 22 (803) 年に古代律令政府によって造営された古代陸奥国最北端の城柵跡の国史跡「志波城跡」(中太田方八丁地内)、南東約 5.0km には志波城跡が廃絶され移転した「徳丹城跡」(矢巾町西徳田地内)がある。志波城跡より南東の平野には、大宮北遺跡、小幡遺跡、野古A遺跡、飯岡沢田遺跡、飯岡才川遺跡、台太郎遺跡、向中野館遺跡、細谷地遺跡、矢盛遺跡など、盛南地区遺跡群と呼んでいる古代以降の集落遺跡が立地する。これらは主に、7世紀後葉から10世紀代の古代の集落跡や墳墓群(飯岡沢田遺跡)、2間2間の総柱建物跡からなる倉庫群(飯岡才川遺跡)、掘立柱建物跡や竪穴建物跡からなる拠点的な集落(林崎遺跡、大宮北遺跡、小幡遺跡)、そして中世以降の豪族居館(台太郎遺跡、向中野館遺跡、矢盛遺跡)、近世から現代に続く農村集落跡である。

本遺跡は、北上川西岸に位置する古代以降の集落遺跡である。本遺跡のほか、西鹿渡遺跡、百目木遺跡、下永林遺跡、高橋A遺跡、高蒲田遺跡、上畑遺跡などが、北上川に沿って南北に連なる。これらは主に8～9世紀を中心とした集落遺跡である。8世紀代の様相は、一辺5m超の大型竪穴建物跡と4m以下の中型、3m程度の小型の竪穴建物跡数棟からなり、当該期の典型的な集落跡といえる。下永林遺跡は8～9世紀の円形溝溝(墳墓)25基以上からなる周辺集落の墓域と考えられる。高橋A遺跡は本遺跡の北東に位置し、8世紀後半から9世紀初頭を中心とした竪穴建物跡34棟などを調査し、土製紡錘車14点などが出土している。高蒲田遺跡は本遺跡の西に隣接し、平安時代のもつとされる掘立柱建物跡4棟が確認されている。

西方には、9世紀前葉の飯岡林崎II遺跡、9世紀～10世紀半ばの地域拠点集落のひとつと考えられる大島遺跡、その西側台地上に立地する8世紀後半～10世紀前半の一本松II遺跡が立地する。



第3図 荒屋遺跡と周辺の遺跡分布図

2 歴史的環境

本遺跡群の立地する沖積段丘上には、縄文時代～古墳時代の遺構遺物の発見は少ない。遺跡の多くは7世紀中葉以降の古代の集落遺跡を中心に、中世の居館跡、近世の集落跡などである。

縄文時代の遺跡は、盛南地区遺跡群の本宮熊堂A遺跡や台太郎遺跡において、晩期の堅穴建物跡や遺物包含層が確認されている。詳細な時期は不明だが、同地区の飯岡才川遺跡、細谷地遺跡などでは、陥し穴が旧河道沿いにまとまって確認されている。弥生時代の遺構遺物は、弥生時代前期頃の土器埋設遺構が台太郎遺跡で確認されているほか、弥生時代後期の土器片や北海道系の縄文土器片が台太郎遺跡や細谷地遺跡からわずかに出土している。古墳時代の遺構遺物はほとんど出土例がなく、不明である。

7世紀中葉以降の遺構遺物は、台太郎遺跡において確認されており、これ以降現代に至るまで集落が継続して立地し、平野部における農耕を主体とした暮らしが営まれてきた土地といえる。

奈良時代の8世紀以降、堅穴建物を主体とした集落遺跡が増加する。この時期の集落は、大型堅穴建物跡を中心に、中～小型の堅穴建物跡が数棟ずつまとまって分布することが多く、血縁関係を持った一族が集落を構成したと考えられる。

この時期、律令政府は東北地方に住んだ人々を「蝦夷(エミシ)」と呼んだ。政府は東北地方へ勢力を拡大する政策をとっており、「城柵」と呼ばれる官衙を拠点とし、関東地方などから移民(墾戸)を送り込む同化政策をとっていた。この過程で、政府は蝦夷と激しく争ったり、饗給などをとおして懐柔し、政府組織へ取り込んだりしていったことが、文献史料に記録されている。

文献史料によれば、8世紀後半の盛岡周辺は「志波村」と呼ばれていたと考えられ、出羽国の政府軍と戦っていたが、後に志波村の蝦夷は律令政府側についたことが記録されている。この頃、政府軍を破った胆沢(岩手県奥州市付近)の蝦夷アテルイは、胆沢城を造営した征夷大将軍坂上田村麻呂に降伏した(延暦21(802)年)。その翌年、延暦22(803)年、桓武天皇の命を受けた坂上田村麻呂によって、本遺跡の約5km北西に、志波城(盛岡市下太田方八丁ほか)が造営された。

志波城は、政府によって東北地方に造営された「城柵」のひとつである。発掘調査成果などから、古代陸奥国最北に位置し最大規模の城柵であった。城柵とは、古代の政府が東北地方に造営した軍事と行政を司る官衙(行政府)の一種である。古代日本の律令制度に基づく国家形成は、天皇を中心とした政府が、全国の土地や人民を直接統治した中央集権体制であったが、当初東北地方北部にはその勢力が及ばない政府統治範囲の外に当たり、人々は「蝦夷(エミシ)」と呼ばれた。城柵では、蝦夷を酒宴が伴う儀式でもてなし懐柔する「饗給」、蝦夷の動向を探る「斥候」、反抗する蝦夷を武力で制圧する「征討」などの機能を担い、蝦夷に対し天皇の威厳を示す政府の対蝦夷政策と地域支配の軍事と行政の拠点だった。

志波城は、その北を流れる雫石川の度重なる氾濫被害と、桓武天皇の徳政相論の結果を受けた行財政改革により、造営後約10年で文室綿麻呂によって志波城の南約10kmに規模や機能を縮小した徳丹城(岩手県矢巾町)が造営され機能を移転した。徳丹城は9世紀半ばまでには廃絶され、岩手県城は胆沢城一城による統治体制へと、地域社会が再編されたと考えられている。

徳丹城が廃絶され胆沢城一城体制となる9世紀半ばから、律令政府は直接統治から在地蝦夷勢力を生かした間接統治へ移行したと考えられ、その時期以降は堅穴建物を中心とした集落が、平野部を中心に拡大する。堅穴建物の規模は均質化し、重複するものやカマドの作り替えが多くみられるようになる。向中野館遺跡で発見された水辺祭祀跡や、下永林遺跡の円形溝溝群、9世紀以降の盛南地区遺跡群の飯岡沢田遺跡、飯岡才

川遺跡の円形周溝(墳丘墓)群と火葬骨を埋納した骨蔵器など、集落だけではなく機能も継続して見られる。また、9世紀後葉から10世紀中葉にかけて、カマドを何度も作り変える大型の竪穴建物を擁する拠点的な集落が発生する。飯岡才川遺跡では微高地の斜面に沿って総柱の掘立柱建物群が東西に並立し、倉庫群が存在したと考えられる。大宮北遺跡や林崎遺跡、細谷地遺跡、大島遺跡などでは、官衙的な掘立柱建物や倉庫が計画的に配置されたり、石帯具など律令制関連遺物や仏教祭祀的な遺物等が出土したりするなど、在地有力者拠点が形成された。

10世紀後半には、岩手県域において古代城柵の統治範囲を受け継いだ在地有力者の中から、胆沢城の統治を基盤とした安倍氏が衣川以北の奥六郡を制した。やがて源氏や清原氏との前九年合戦や後三年合戦を経て、11～12世紀にかけては、北東北は平泉藤原氏に統治された。11～12世紀の本地域の様相ははっきりしないが、大宮遺跡の大溝跡からは12世紀末～13世紀初頭頃のかかわりが大量に廃棄された状況で出土し、在地勢力拠点が営まれていた可能性がある。

中世の13世紀後半には、台太郎遺跡において不整五角形の堀を巡らす居館が営まれ、周辺には土壌墓群や宗教施設と考えられる遺構が確認されており、出土遺物から15世紀頃まで在地領主が存在したと考えられる。また、向中野館遺跡や矢盛遺跡でも、16世紀を中心とする掘立柱建物跡や堀跡が確認され、在地領主の居館跡が存在したと考えられる。室町時代から戦国時代は、斯波氏と南下してくる南部氏の衝突が激しく、各地に城館が営まれた。

その戦いを制した南部氏は盛岡城を築城し、現在の盛岡の町並みの礎を整備したとされる。本遺跡の東には奥州道中(街道)が整備され、本地域は農地に集落が点在する農村地帯となる。各遺跡からは曲屋などの掘立柱建物跡や井戸跡、盛南地区遺跡群の南仙北遺跡からは道路側溝跡が確認されている。幕末から近世初頭の古絵図には、その様子が記されている。

その景観は、昭和初期まで大きく変わることはなかったことが第2次大戦後の米軍による空中写真からもうかがえる。この地域の様相が現在の姿に変容するのは、昭和30年代以降に実施された圃場整備や、周辺の宅地開発、道路整備、東北新幹線の開通などが進められたことによる(第1図版)。

【参考文献】

- 盛岡市・盛岡市教育委員会 各年度 『盛南地区遺跡群発掘調査報告書Ⅰ～ⅩⅢ』 盛岡市遺跡の学び館
- 盛岡市遺跡の学び館 2004 『陸奥国最前線-志波城と北の蝦夷たち-』 第1回企画展展示図録
- 盛岡市遺跡の学び館 2006 『黄泉への入口-古代蝦夷首長の墓-』 第5回企画展展示図録
- 盛岡市遺跡の学び館 2007 『まちづくりと考古学-盛南開発と遺跡発掘調査-』 第6回企画展展示図録
- 盛岡市遺跡の学び館 2017 『志波城前夜の蝦夷社会-9世紀初頭以前の盛南地区-』 第15回企画展展示図録
- 盛岡市教育委員会編 2016 『志波城跡と蝦夷(エミシ)』 盛岡市文化財シリーズ第43集
- 盛岡市教育委員会 2021 『大島遺跡発掘調査報告書』 盛岡市遺跡の学び館



1948(昭和23)年米軍撮影



2008(平成20)年国土地理院撮影

国土地理院
空中写真データ
より作成

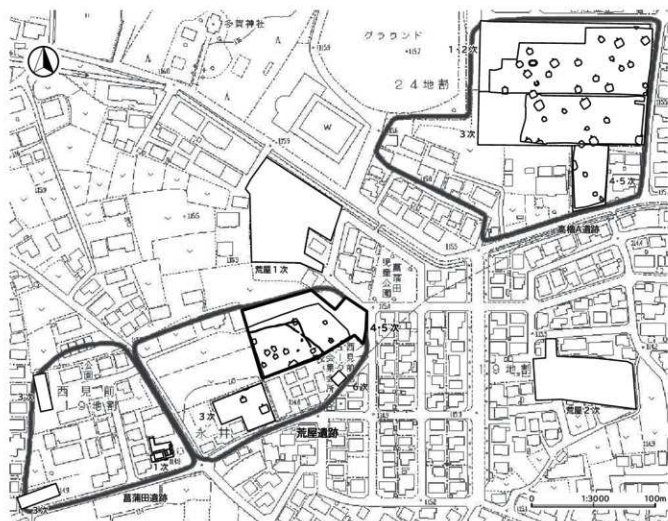
第1図版 遺跡周辺の航空写真

3 これまでの調査（第2表、第4図）

荒屋遺跡では、本報告を含めこれまで6回の発掘調査を実施しており、遺構や遺物を確認したのは、第3・4・5次の調査である。第3次調査は、遺跡の南西部における共同住宅建築に伴う事前調査である。8世紀後半の竪穴建物跡3棟、溝跡1条、土坑5基、遺物包含層を検出した。第4次調査は試掘調査で、対象地内の約2,700㎡に古代の集落跡が存在していることを確認し、第5次調査として本調査を実施したものである。

第2表 荒屋遺跡調査実績（年度 H：平成，R：令和）

遺跡略号	次数	年度	調査方法	所在地	面積(㎡) (調査対象)	調査期間	遺構・遺物	調査原因	調査	報告書	
荒屋	I A R	1	H8	試掘	永井25地割 48-4,47-15,49-1	316	1997.2.27	旧河道跡、なし	共同住宅	盛岡市教育委員会	-
		2	H9		西見前19地割 52-2他	266 (2,990)	1997.11.25	なし(遺跡隣接地の確認調査)	宅地造成		-
		3	H	試掘・ 本調査	永井25地割 45-2, 45-8	1,268 (1,297.85)	1998.9.2 1998.10.5～ 1998.10.20	奈良時代:竪穴建物跡3, 土坑5,溝跡1,遺物包含層 時期不明:溝跡1	共同住宅		概要 本書
		4	R1			636 (4,117)	2019.10.30～ 2019.10.31	奈良時代:竪穴建物跡,土坑 時期不明:溝跡	宅地造成		本書
		5	R2	本調査	2,690 (4,088)	2020.4.23～ 2020.8.26	奈良時代:竪穴建物跡12, 土坑10,時期不明:溝跡2				
		6	R2		11.5 (36.58)	2020.12.4	なし	個人住宅	館報掲載 予定		



第4図 荒屋遺跡・葛蒲田遺跡・高樺A遺跡 全体図

第3章 調査成果

1 調査の方法 (第5図)

(1) 第4次調査

遺跡中央から北東部に位置する届出範囲全面4,117㎡に対し、遺構密度や遺構検出面までの表土の厚さなどを確認するため、22ヶ所の試掘溝(トレンチ)を設定し、法面バケツ付バックホーで表土を除去し遺構検出をする試掘調査を実施した。

(2) 第5次調査

第4次調査の試掘調査結果を受け、遺構の存しない範囲を除外した2,690㎡を要調査範囲とした本発掘調査を実施した。現況は畑地であった。

法面バケツ付バックホーにて表土を除去し、ジョレンで遺構検出作業を行った。遺構検出面の標高は114.4~114.8mほどで、緩やかに南西に向かって傾斜し、東部は表土直下にV層砂礫層が露出している地点もあり、遺構密度が薄くなり、遺跡の東端部と考えられる。

平面位置は、世界測地系第X系に即した調査座標原点を設定し表示した。調査座標原点は、世界測地系第X系 X-38,800m, Y+27,300mを、調査座標原点 RX±0, RY±0とした。標高は近隣の測量成果からレベルワークし、標高値を使用した。

遺構内は、土層観察用ベルトを境に、方位をあらわしたエリア(例・南東側=SE区)及び層位ごとに遺物を取り上げた。特徴的な遺物や床面出土遺物は、番号を振り、出土状況の図化と写真撮影の記録をした上で取り上げた。遺構は堆積層ごとに底面まで掘り下げ、土層観察用ベルトの図化及び写真撮影の後、完掘し平面図化、写真撮影した。

各遺構等の調査終了後に、空中写真撮影、調査区全体図を実測し、本調査を終了した。

2 基本層序 (第3表)

本遺跡は平石川と北上川の影響を強く受けた不安定な低位沖積段丘上にあり、水成砂礫層(V層)が基底をなす。その上に水成シルト層(IV層)が乗り、一部にシルト漸移層(III層)が残存し、表土(I・II層)がそれらを覆っている。

今次調査区は、河川堆積による褐色シルト層(IV層)が厚く堆積しており、遺構検出作業は表土(I・II層)直下のIV層上面、一部III層が残存している地点はIII層上面にて行った。調査区内の東寄りには、所によりIII・IV層がなく、表土直下にV層が浮き上がっている地点もあった。

第3表 荒屋遺跡第5次調査 基本層序

I・II層(表土)	腐植土や黒色土からなる表土。黒~黒褐色を呈する耕作土や攪乱等。
III層(シルト漸移層)	I・II層の表土とIV層シルト層の中間の層で、黒褐色~暗褐色を呈する。調査区内の一部に残存。
IV層(シルト層)	水成シルト層で、褐~黄褐色を呈する。層中に黒褐色土層が介在することもある。地点により層相や層厚は一定していない。
V層(砂礫層)	基底をなす水成砂礫層。砂の精粗、礫の量や大きさで、数層に細分される。

3 遺構・遺物

(1) 第4次調査 (第4・5図)

隣接の第3次調査で竪穴建物跡等が確認されていたため、同様の様相が予想された。試掘調査の結果、届出範囲の北～東寄りには遺構が存しなかった。一部は現地表面から約80cmの深さまで天地返し(深耕)がされていた。それ以外からは、竪穴建物跡、土坑、溝跡などを検出し、奈良時代の土師器が出土した。届出範囲のうち遺構遺物が確認された2,700㎡を、要本調査範囲とした。

(2) 第5次調査 (第5～45図・第4～9表・第8～24図版)

第5次調査区は遺跡の中央から北東部に位置し、4次調査結果を受け、宅地開発に伴う本調査として実施した。想定される遺跡総面積の約27%を占める。調査の結果、奈良～平安時代の竪穴建物跡12棟(RA04～13, RE01・02)、奈良時代以降の土坑11基(RD06～16)、古代以降の溝跡2条(RG03・04)を検出し、当該期の土師器を中心にコンテナ20箱分の遺物が出土した。

① 竪穴建物跡 (RA・RE)

RA04 竪穴建物跡 (第6・30図, 第4～9表, 第11・20図版)

位置 RX-160, RY+330 重複関係 なし 平面形 隅丸方形

規模等 東西3.2m, 南北3.0m, 検出面からの深さ0.15～0.18m カマド方向 N32°W

カマド 北西壁中央。煙道と煙出部、袖の一部に攪乱。両袖残存。袖は土で構築。袖端部と火床面が被熱。焼土浸透層は3～5cm。火床面と煙道境界部がやや高くなり、煙出部へ緩く傾斜する。

ピット 2口。Pit 1はカマド北東側壁直下、Pit 2は北東壁直下。両者とも貯蔵穴等か。

床面 炭化材を検出。焼失屋根材か。構築土あり。

埋土 耕作による削平を受ける。暗褐色土を中心とする。粉～粒状の焼土や炭粒を含む。

遺物 (第30図) 1～3は、土師器甕である。体部ヘラナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ調整。4は、手づくねのミニチュア坏である。炭化材No.1は樹種同定の結果コナラ材であり、放射性炭素年代測定結果は7世紀後半～8世紀後半である(第4章1・2参照)。

時期 奈良時代 8世紀半ば～末

RA05 竪穴建物跡 (第7・31図, 第4～9表, 第11・20図版)

位置 RX-150, RY+332 重複関係 なし 平面形 隅丸方形

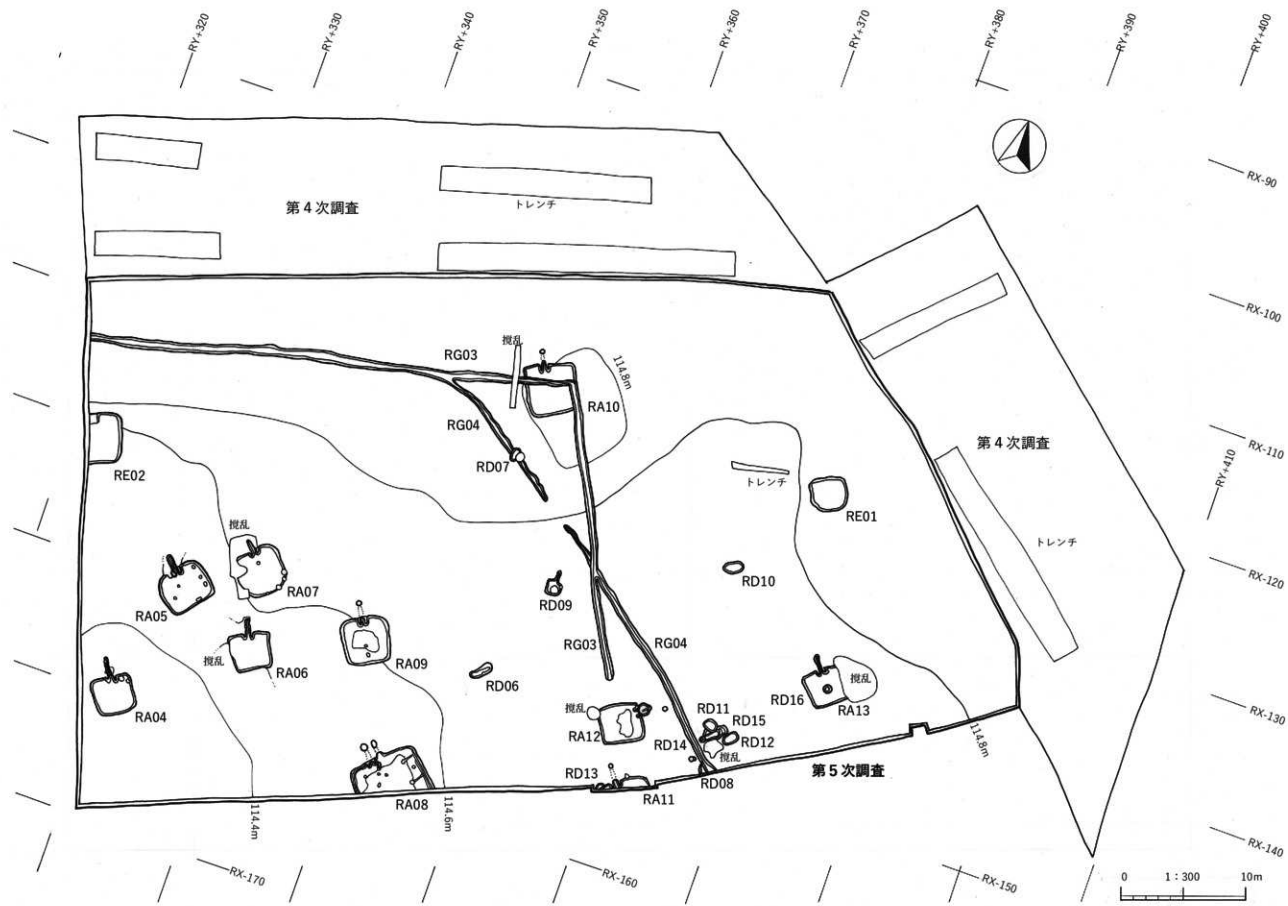
規模等 東西4.0m, 南北3.3m, 検出面からの深さ0.02～0.15m カマド方向 N42°W

カマド 北西壁中央部。袖、煙道、煙出部に攪乱を受けるが、両袖残存。袖は土で構築。西袖付近が強く被熱。焼土浸透層は5cm前後。底面は火床面から煙道中程にかけて低くなり、煙出部がやや高い。

ピット 6口。Pit 1は床面中央西寄りで20cmの深さを測る。Pit 2～6は、深さ3～7cmを測る。

床面 中央やや南東寄りに地床炉。これに接して土師器坏(土器No.3, 第31図8・10)が出土。

埋土 耕作による攪乱、削平を受ける。暗褐色から黒褐色土に地山シルト層や焼土を含む。A層に粉状の灰白色火山灰(十和田a火山灰To-a)を含む。



第5図 荒屋遺跡 第4次・第5次調査 全体図

遺物 (第31図) 5～10は土師器坏である。5, 6は丸底, 7～9は平底に近い。10は底部外面をヘラケズリ。いずれも内面はヘラミガキ, 黒色処理。11～14は土師器の甕である。11, 12は底部外面に木葉痕。12～14は口縁が直立気味に立ち上がる。15は砥石。16は粘土塊を焼成した土製品。

時期 奈良～平安時代 8世紀後半～9世紀初頭

RA06 竈穴建物跡 (第8・32図, 第4～9表, 第11・20図版)

位置 RX-152, RY+338 **重複関係** なし **平面形** 隅丸方形

規模等 東西3.2m, 南北2.9m, 検出面からの深さ0.05～0.20m **カマド方向** N25°W

カマド 北西壁中央部。煙道, 煙出部に攪乱を受けるが, 両袖残存。袖は土で構築。煙道底面は, 火床面から煙出部に向かって低くなる。

埋土 東半分を耕作の攪乱, 削平を受ける。暗褐色土を中心に地山シルト層や焼土粒を含む。

遺物 (第32図) 17は土師器坏。丸底を呈し内面はヘラミガキ, 黒色処理。18, 19は土師器の甕。18は口縁が外に開き, 頸部に沈線と段。20は土師器の坏。平底。内外面ともヘラミガキ, 黒色処理。21は土製品の玉。穴はない。22は土製品の勾玉。穿孔部で破損。

時期 奈良時代 8世紀半ば～末

RA07 竈穴建物跡 (第9・33図, 第4～9表, 第11・20・21・24図版)

位置 RX-144, RY+336 **重複関係** なし **平面形** 隅丸方形

規模等 東西3.8m, 南北3.7m, 検出面からの深さ0.18～0.32m **カマド方向** W39°N

カマド 北西壁中央部。袖, 煙道, 煙出部に攪乱を受けるが, 両袖が残存。袖は土で構築。煙道底面は中央付近がやや高い。煙出部は底面が外側へ袋状を呈する。

ピット 5口。Pit 4と5は柱穴か。Pit 1～3は, 壁から外側へ向かって袋状を呈する。

床面 中央付近から白色粘土塊が出土。

埋土 耕作による攪乱, 削平を受ける。暗褐色から黒褐色土に地山シルト層や焼土を含む。A層上面に粉状の灰白色火山灰(十和田a火山灰To-a)を含む。

遺物 (第33図) 23・24は土師器坏である。いずれも内面はヘラミガキ, 黒色処理。23は外面に有段沈線。25～27は土師器の甕である。25・26は外面ヘラミガキ。26は頸部に有段沈線。27は内外面ともハケメ調整。口縁が直立。28は土師器球胴甕である。体部下半に最大径を有し口縁は短く外反する。29はカマド煙道出土の鉄製品刀子。刃部のみ残存。保存処理を実施(第4章3参照)。

時期 奈良～平安時代 8世紀後半～9世紀初頭

RA08 竈穴建物跡 (第10～13・34～38図, 第4～9表, 第12・13・21・24図版)

位置 RX-156, RY+350 **重複関係** なし **平面形** 隅丸方形

規模等 東西5.8m, 南北4.0m以上, 検出面からの深さ0.45～0.55m **カマド方向** 新旧ともN45°W

新カマド 北西壁中央やや西寄り。底面は煙道入口が高く煙出し部へ向かって低くなる。煙道は地山くり抜き。両袖とも芯材に土師器甕を2個ずつ伏せて土で構築。甕の内部には土が充填されていた(第34図32・33, 第35図35・36, 第12・21図版)。煙道入口付近埋土中から片口状ミニチュア土器(第37図46, 第12・21図版)が出土。

旧カマド 北西壁中央。底面はほぼ平坦。袖は残存しない。新カマドとほぼ同規模で、煙道は地山くり抜き。袖を撤去及び火床面を整地し（L3～5層）、新カマドが構築されている。

ピット 13口。Pit 1～3, 5, 6は柱穴か。Pit 2・3から壁に向かう小溝が連結。床板等の根太痕跡か。

床面 床面直上に焼土や炭化材。Pit 1～3の内側が硬化。外側壁付近は板等の床があったか。

周溝 東壁及び西～南壁に周溝。東壁周溝は杭状小ピットが連結し、腰板壁を押さえた可能性がある。

埋土 暗褐色から黒褐色土に地山シルト層や焼土、炭化材粒を含む。B層に塊状の灰白色火山灰（十和田a火山灰 To-a）を含む。

遺物（第34～38図）坏の出土量が少ない。30は土師器坏、31は土師器甕である。いずれも内面はヘラミガキ。32～41, 43は土師器の甕である。いずれも最大径は口縁部にある。小型の34, 37, 41は口縁部が直立、中～大型の32, 33, 35, 36, 39, 40は頸部に段を有し、短く外反もしくは直立する。内底面は平底。底部外面は34, 43を除き突出しない。おおむね内外面ともハケメ調整が施される。32は西袖前、33は西袖壁側、35は東袖壁側、36は東袖前に、カマド構築土の芯材として土が充填され、据えられていた。41は口縁部の一部が打ち欠かされている。42, 44, 45は土師器の球胴甕である。45は体部中程に最大径を持ち、頸部に段を有し、口縁は直立気味に外反する。底部は木葉痕をヘラナデで調整されている。46はカマド煙道入口付近埋土中から出土した土師器のミニチュア片口状土器である。内面にスガが付着している。油状の物が入っていたか。47, 48は土製品の小型の土玉である。焼成前に穿孔されている。49は土製品の勾玉である。穿孔部分で破損している。50は床面出土の鉄製品刀子である。切先と茎が破損か。保存処理を実施（第4章3参照）。51, 52は軽石の砥石である。それぞれ使用痕が認められる。

床面出土炭化材 No.1 と旧カマド整地層内（L3層）出土炭化材は樹種同定の結果、コナラ材であった。放射性炭素年代測定結果は、床面出土炭化材 No.1 は7世紀後半～8世紀後半、L3層出土炭化材は7世紀後半～8世紀後半であった（第4章1・2参照）。

時期 奈良～平安時代 8世紀後半～9世紀初頭

RA09 竪穴建物跡（第14～15・39～42図、第4～9表、第13・14・22・23図版）

位置 RX-146, RY+346 重複関係 なし 平面形 隅丸方形

規模等 東西3.8m, 南北3.9m, 検出面からの深さ0.40～0.46m カマド方向 N34°W

カマド 北壁中央。底面はほぼ平坦で、煙道前でやや高くなり煙出口が低くなる。煙道は地山くり抜き。袖は土で構築。土師器甕や川原石が周囲に散乱。

ピット 2口。柱穴か。

床面 中央付近に硬化面。硬化面上に白色粘土塊2個。中央付近の床面直上、外側はC層上面に炭化材。

埋土 暗褐色から黒褐色土に地山シルト層や焼土、炭化材粒を含む。B層に塊状の灰白色火山灰（十和田a火山灰 To-a）を含む。

遺物（第39～42図）53～62は土師器坏である。53は床面から、それ以外はC層以上から出土。53は内外面ともヘラミガキ、黒色処理。体部外面に明瞭な段を有する。内底面中央部が凹み、体部内面にも段が見える。54は内面ヘラミガキ、黒色処理、外面はヘラナデ、ヘラケズリ調整で輪轆痕が残る。55の内面はヘラミガキ、黒色処理。外面はハケメのあとヘラミガキ調整。外底面にはハケメ調整により、糸切り痕のような調整が見える。ロクロ成形糸切り痕を模したか。56～59は内外

面ともヘラミガキ、内面黒色処理。体部外面に不明瞭な段を有し、58, 59は沈線状。60は手づくね風の坏で、外面は輪積痕跡が残るヘラナデ、内面は黒色処理とハケメ調整が施される。底面は平底風に作られる。須恵器坏を模したか。63は床面出土、64はC層出土の土師器鉢である。いずれも内面はヘラミガキ。63は平底。64は平底に近い丸底を呈し、体部外面にヘラミガキ器面調整で一部潰れる弱い沈線を有す。65, 66はカマド構築土K層、67, 68はC層出土の土師器甕である。65, 66は体部外面にヘラケズリとヘラミガキ調整が施され、65は頸部に明瞭な段を有する。66の外底面はヘラケズリ。67は頸部に段を有し、68の頸部には沈線、口唇に段が回り、外底面はヘラミガキ調整。69はC層出土の土師器の無底式の甎である。焼成前から底部は作られずに成形調整されている。頸部に段を有し、体部外面はヘラミガキ、内面はハケメ調整。70~77はC層上面以上から出土の土師器甕である。いずれも頸部の段や沈線は不明瞭である。73と76は口縁が大きく外反するが、それ以外は緩く開く。73は体部下半が窄むが、それ以外は緩やかに窄むみ、74は直線的に底部へ至る。外面調整は、71はヘラミガキ、73と76はハケメ、74はヘラケズリ、それ以外はヘラナデ。73の底部内面は平底、外面は突出する。78はC層上面出土の土師器球胴甕である。頸部に段が巡り、体部外面はヘラミガキ、内面はハケメ調整。79はC層上面出土の土師器の多孔式の甎である。内外面ともヘラミガキ調整。表面に被熱による剥離破損がある。体部下端側面と底面に、焼成前に外面から内面へ向かって12口の穴が穿孔されている。80は棒状の土製品である。一方の端部が水平に面取りされ、何かの脚部のように見えるが詳細は不明。

C層出土炭化材No.2は、樹種同定の結果コナラ材であった。放射性炭素年代測定結果は7世紀後半~8世紀後半であった(第15図, 第4章1・2参照)。

時期 奈良時代 8世紀半ば~末

RA10 竪穴建物跡 (第16・43図, 第4~9表, 第14・15・23図版)

位置 RX-122, RY+354 **重複関係** なし **平面形** 方形

規模等 東西4.15m, 南北4.0m, 検出面からの深さ0.12~0.22m **カマド方向** N29°W

カマド 北壁中央やや西寄り。底面はほぼ平坦で、煙道と煙出部接続部がやや高くなる。煙道は地山くり抜き。袖は土で構築され、先端に土師器甕が貼り付く。

床面 平坦で、地山砂礫層(V層)に薄く褐色土を貼る。

埋土 暗~黒褐色土に地山シルト層を含む。A層に塊状の灰白色火山灰(十和田A火山灰To-a)を含む。

遺物 (第43図) 81, 82は土師器坏。81は小形でいびつな手づくね風で、内外面とも黒色処理がない。82は内外面とも黒色処理されヘラミガキ調整。83は土師器高坏。内外面とも黒色処理、ヘラミガキ調整。外面に沈線が複数条巡る。84, 85は土師器甕。調整はハケメ中心。86は土師器壺または坏。体部が丸みを帯び、口縁が外反する。ヘラミガキ調整、黒色処理。87は土製紡錘車。断面は台形。上面は水平で凹みがない。下部から上面に向かって穿孔。ヘラナデ、ヘラミガキ調整。

時期 奈良時代 8世紀半ば~末

RA11 竪穴建物跡 (第17・44図, 第4~9表, 第15・23・24図版)

位置 RX-150, RY+370 **重複関係** RD13土坑と重複し、古い。 **平面形** 隅丸方形

規模等 東西3.8m, 南北0.9m以上, 検出面からの深さ0.4~0.46m **カマド方向** N34°W

カマド 北壁中央やや西寄り。煙道は火床面から煙道中ほどに向かって低くなり、煙出部がやや凹む。煙道は地山くり抜き。袖は土で構築。袖の芯材に、西袖は川原石と倒立した土師器甕を縦列に設置し、川原石の上部に土師器甕を伏せ置く。東袖は、倒立させた土師器甕を縦列に設置。うち先端側は2個体の甕が重ねられていた（第44図90・91、第15図版、第24図版90・91）。

床面 北西隅に土師器甕や川原石が寄せ置かれていた。

埋土 黒褐色土を主体に地山シルト粒を含む。B層に焼土塊を含む。

遺物（第44図）88～92は土師器杯。内外面ヘラナデ調整主体。91はヘラミガキが施される。最大径は口縁部にあり、頸部に弱い段を有する。底面端部の張り出しが全くないか極めて弱く、底部内面は平底が優勢。カマド構築芯材のものは被熱痕跡が顕著。

時期 奈良時代 8世紀半ば～末

RA12 竪穴建物跡（第18・45図、第4～9表、第16・24図版）

位置 RX-146, RY+370 **重複関係** なし **平面形** 隅丸方形

規模等 東西3.4m, 南北3.0m, 検出面からの深さ0.06～0.12m **カマド方向** E44°N

カマド 東壁北寄り。煙道は攪乱されていたが、底面がわずかに残存。ほぼ平坦か。袖は土で構築。北袖端部に土師器甕が貼り付く。

床面 中央東寄りに硬化面。

埋土 黒褐色土、暗褐色土を主体に地山シルト粒を含む。壁際B2・B3層に地山褐色土を塊状を含む。

遺物（第45図）93は外面ハケメ、内面ヘラミガキ、黒色処理の土師器杯。94は土師器甕。頸部に段は見えない。

時期 奈良～平安時代 8世紀末～9世紀前葉

RA13 竪穴建物跡（第19図、第4～9表、第16図版）

位置 RX-138, RY+382 **重複関係** RD16と重複し古い **平面形** 方形

規模等 東西2.9m以上, 南北2.7m, 検出面からの深さ0.02～0.08m **カマド方向** N39°W

カマド 北壁中央。削平を受け溝状に残存。煙道は火床面境界付近で高くなり、煙出部に向かって緩やかに低くなる。袖は土で構築。

床面 平坦。東壁は大きく攪乱されている。中央に地床炉。RD16土坑に切られる。

埋土 暗褐色土を主体に地山褐色土を粒状を含む。

遺物 図化できない土師器甕の破片が3点出土。

時期 奈良～平安時代 8世紀後半～9世紀初頭

RE01 竪穴建物跡（第20図、第4～9表、第16・24図版）

位置 RX-124, RY+378 **重複関係** なし **平面形** 不整形

規模等 東西2.8m, 南北2.6m, 検出面からの深さ0.26～0.28m **床面** 平坦

埋土 黒褐色土を主体に暗褐色土、地山シルトの粒を含む。A1層中ほどに、灰白色火山灰（十和田a火山灰To-a）が層～塊状に多く混入。その上面は黒味が強い。A3層には15～30cm程度の角礫が含まれる。床面直上のB2層から土器が出土。

遺物 (第45図) 95は土師器の坏。歪みが大きい、外面にわずかに段を有し、平底に近い丸底。須恵器坏の模倣か。96は土師器甕。内外面ハケメ調整。RD11土坑出土の小破片が接合。97は土師器の甕。無底式。口縁は直立し、体部との境界が不明瞭。外面はヘラナデの後ヘラケズリ、内面はヘラナデ調整。

時期 奈良時代 8世紀半ば～末

RE02 竪穴建物跡 (第21図, 第4～9表, 第16・17図版)

位置 RX-138, RY+320 重複関係 なし 平面形 不整形

規模等 東西2.7m以上, 南北3.9m, 検出面からの深さ0.08～0.4m。西壁は調査区外。

床面 平坦。北半は地山シルト層(IV層)上に薄く構築土, 南半は地山シルト層(IV層)を床面にする。

スロープ 北壁中央調査区壁際に, 地山褐色土シルト層(IV層)を掘り残したスロープを検出。出入口か, カマド構築途中で放棄されたものか, 不明。これに伴う他の遺構は検出できなかった。

埋土 南半が大きく耕作による擾乱削平を受ける。黒色土, 黒褐色土を主体に暗褐色土, 地山褐色土の粒を含む。最上層A層に, 灰白色火山灰(十和田A火山灰To-a)を粉状に含む。

遺物 C層から土師器甕体部の破片が1点出土。ハケメ調整。

時期 奈良～平安時代 8世紀後半～9世紀初頭

② 土坑(RD)

RD06 土坑 (第6・8表, 第22図, 第17図版)

位置 RX-148, RY+358 重複関係 なし 平面形 長楕円形

規模等 長軸1.84m, 短軸0.52m, 検出面からの深さ0.28m

埋土 黒褐色土を主体に褐色土粒～粉状に含む。 出土遺物 なし 時期 古代以降

RD07 土坑 (第6・8表, 第22図, 第17図版)

位置 RX-132, RY+354 重複関係 RG04溝跡と重複し, 新しい。 平面形 楕円形

規模等 長軸1.08m, 短軸0.55m以上, 検出面からの深さ0.1m。

埋土 底面に焼土。焼土浸透層は極めて薄い。 出土遺物 なし 時期 古代以降

RD08 土坑 (第6・8表, 第22図, 第17図版)

位置 RX-150, RY+378 重複関係 RG04溝跡と重複し, 古い。 平面形 楕円形

規模等 長軸1.05m, 短軸0.73m以上, 検出面からの深さ0.25m。

埋土 黒褐色土を主体に褐色土を粉～塊状に含む。

出土遺物 土師器球胴甕の体部破片。内外面ハケメ調整。外面に帯状にススが付着。

時期 奈良時代 8世紀後半

RD09 土坑 (第6・8表, 第22図, 第18図版)

位置 RX-140, RY+362 重複関係 なし 平面形 方形で, 北辺に溝状の突出。

規模等 長軸1.18m, 短軸0.94m, 北辺中央から幅0.18～0.22の溝が1.18m北方へ延びる。

検出面からの深さ0.14～0.18m。

埋土 黒褐色土を主体に褐色土を粉～塊状に含む。焼土粒，炭粒を含む。南東隅底面が方形に深い。

出土遺物 なし **時期** 古代以降

RD10 (第6・8表, 第23・45図, 第18・24図版)

位置 RX-134, RY+374 **重複関係** なし **平面形** 楕円形

規模等 長軸1.65m, 短軸0.97m以上, 検出面からの深さ0.17m。

埋土 黒褐色土を主体に褐色土を粉～塊状に含む。焼土, 炭粒含む。底面はV層上面。

出土遺物 (第45図) 98は土師器坏。内外面ヘラミガキ調整。外面に段。内面は黒色処理。平底風丸底。

時期 奈良時代 8世紀半ば

RD11 (第6・8表, 第23図, 第18図版)

位置 RX-146, RY+378 **重複関係** RD15土坑と重複し, 新しい **平面形** 方形

規模等 長軸1.13m, 短軸0.96m以上, 検出面からの深さ0.28m

埋土 黒褐色土を主体に褐色土を粉～塊状に含む。全面に焼土粒, 炭粒を含む。

出土遺物 A・B層から土師器壺の小破片が出土。ハケメ調整。

時期 奈良時代 8世紀半ば～末

RD12 (第6・8表, 第23図, 第18図版)

位置 RX-146, RY+370 **重複関係** なし **平面形** 方形

規模等 長軸1.3m, 短軸0.84m以上, 検出面からの深さ0.3m

埋土 黒褐色土を主体に褐色土を粉～塊状に含む。焼土粒, 炭粒を僅かに含む。

出土遺物 A層から土師器球胴壺の破片が出土。ハケメ調整。

時期 奈良時代 8世紀半ば～末

RD13 (第6・8表, 第17・23図, 第18図版)

位置 RX-146, RY+370 **重複関係** RA11堅穴建物跡と重複し, 新しい。 **平面形** 楕円形

規模等 長軸0.72m, 短軸0.4m以上, 検出面からの深さ0.18m

埋土 黒褐色土を主体に褐色土を粉～塊状に含む。焼土粒を含む。

出土遺物 A2層から土師器坏の破片が出土。外面ハケメ, 内面ヘラミガキ, 黒色処理。

時期 古代以降

RD14 (第6・8表, 第24図, 第18図版)

位置 RX-146, RY+378 **重複関係** RD15土坑と重複し, 新しい。 **平面形** 円形

規模等 長軸0.49m, 短軸0.47m以上, 検出面からの深さ0.16m

埋土 黒褐色土を主体に褐色土を粉～塊状に含む。

出土遺物 なし **時期** 古代以降

RD15 (第6・8表, 第24図, 第18図版)

位置 RX-146, RY+370 **重複関係** RD11, RD14 土坑と重複し, 古い。 **平面形** 不整形長方形

規模等 長軸 1.9m以上, 短軸 0.9m, 検出面からの深さ 0.55m

埋土 A層は黒色土を主体に褐色土を粉～塊状に含み, 炭と焼土の粒や塊を含む。B層は黒色土と焼土層が互層で, 層下方に浸透層が認められる。炭化材粒も含む。C層は黒褐色土に褐色土を含む。D層は黒色土に地山褐色土を3～5cm程度のブロック状に多く含み, 人為堆積とみられる。底面は中央部が深い概ね平坦で, 北側に段がある。

出土遺物 A層から土師器甕の破片が1点出土。外面ヘラミガキ, 内面ハケメ調整。B層出土炭化材の樹種はコナラ材, 放射性炭素年代測定結果は6世紀半ば～7世紀前半である(第4章1・2参照)。

時期 奈良時代 8世紀半ば

RD16 土坑 (第6・8表, 第24図, 第16図版)

位置 RX-140, RY+384 **重複関係** RA13 堅穴建物跡と重複し, 新しい。 **平面形** 楕円形

規模等 長軸 0.6m, 短軸 0.52m, 検出面からの深さ 0.08m

埋土 黒褐色土を主体に褐色土を粉～塊状に含む。 **出土遺物** 摩滅した土師器甕の小破片

時期 奈良～平安時代 8世紀後半～9世紀初頭

③ **溝跡 (RG)**

RG03・04 溝跡 (第8表, 第25～27図, 第8・18図版)

位置 調査区北西から北北東に延び, 屈曲し南東に延びる。

重複関係 RA10 堅穴建物跡, RD07・08 土坑と重複し新しい。RG03とRG04には時期差が見られない。

規模等 幅 0.3～1.0m, 検出した長さ RG03は62.5m, RG04は63.5m。検出面からの深さ 0.08～0.2m

断面 皿状 **埋土** 黒褐色土を主体に褐色土を粉～塊状に含む。

出土遺物 摩滅した土師器坏, 甕の破片が出土 **時期** 古代以降

④ **ピット** (第7・8表, 第28図)

重複関係 ピット4はRA08 堅穴建物跡と重複し, 新しい。 **平面形** 円形, 不整形円形

規模等 径 0.22～0.4m, 検出面からの深さ 0.04～0.3m

埋土 黒褐色土, 暗褐色土を主体とする。 **出土遺物** ピット4から土師器甕の破片2点

時期 古代以降

⑤ **旧低地 トレンチ** (第8表, 第29図, 第19図版)

筋状に延びる黒色土と褐色土(IV・V層)にトレンチを設定した。旧低地に堆積した黒色土と判断された。

位置 RX-124, RY+372 **埋土** 黒褐色土を主体に褐色土を粉状に, 小礫を含む。 **時期** 不明

第4表 第5次調査竪穴建物跡観察表

遺構名	辺長(cm) 長軸×短軸	検出面から 床面の深さ(cm)	カマド方向		煙道	貯蔵穴	小ピット	周溝	灰白色火山灰 (To-a)
RA04	3.2×3.0	15~18	N32°W	北西	長・溝状(削平)	1	1	—	—
RA05	4.0×3.3	2~15	N42°W	北西	長・溝状(削平)	—	8	—	A層・粉状
RA06	3.2×2.9	5~20	N25°W	北	長・溝状(削平)	—	0	—	—
RA07	3.8×3.7	18~32	W39°N	西北	長・溝状(削平)	—	5	—	A層上面・粉状
RA08(新)	5.8×4.0以上	45~55	N45°W	北西	長・くり抜き	—	13	有	B層・塊状
RA08(旧)	—	—	N45°W	北西	長・くり抜き	—	—	—	—
RA09	3.9×3.8	40~46	N34°W	北西	長・くり抜き	—	2	—	A1層・塊~粉状
RA10	4.1×4.0	12~22	N29°W	北	長・くり抜き	—	—	—	A層・塊状
RA11	3.8×0.9以上	20~38	N37°W	北西	長・くり抜き	—	—	—	—
RA12	3.4×3.0	6~12	E44°N	東北	長・溝状(削平)	—	—	—	—
RA13	2.9以上×2.7	2~8	N39°W	北西	長・溝状(削平)	—	—	—	—
RE01	2.8×2.6	26~28	—	—	—	—	—	—	A層・塊状
RE02	3.9×2.7以上	8~40	—	—	—	—	—	—	A層・粉状

第5表 第5次調査竪穴建物跡内ピット観察表

遺構名	番号	規模(cm)	深さ(cm)
RA04	1	52×48	5
	2	36×30	9
RA05	1	20×18	20
	2	26×24	7
	3	24×23	4
	4	47×33	3
	5	45×23	7
	6	23×20	4
RA07	1	47×36	16
	2	36×26	13
	3	43×32	17
	4	26×24	9
	5	22×18	13
RA08	1	25×23	20
	2	28×28	9
	3	30×25	25
	4	31×22	9
	5	22×18	12
	6	24×21	19
	7	18×16	9
	8	18×15	11
	9	18×16	6
	10	28×20	20
	11	16×16	11
	12	15×5以上	15
RA09	1	28×23	14
	2	20×15	4

第6表 第5次調査土坑観察表

遺構名	位置	規模(cm)	深さ(cm)
RD06	RX-148 RY+358	184×52	28
	RX-132 RY+354	108×55以上	10
RD08	RX-150 RY+378	105×73以上	25
	RX-140 RY+362	108+94×118	14~18
RD10	RX-134 RY+374	165×97	17
	RX-146 RY+378	113×96	28
RD12	RX-146 RY+370	130×84	30
	RX-154 RY+370	72×40以上	18
RD14	RX-146 RY+378	49×47	16
	RX-146 RY+378	190以上×90	55
RD16	RX-140 RY+384	60×52	8

第7表 第5次調査ピット観察表

遺構名	位置	規模(cm)	深さ(cm)
Pit1	RX-146 RY+372	32	4
	RX-150 RY+376	40×35	26
Pit3	RX-150 RY+376	32×22以上	26
	RX-158 RY+352	24×25	30

第8表 第5次調査遺構土層観察表

遺構名	層名	主要土		含有土				密度	数値	その他	
		土性	土色(JIS)	土性	土色(JIS)	状態	%				
RA04	A1	SiCl	10YR2/2	SiCl	10YR4/4	粉～粒	20	中	中		
	A2	SiCl	10YR2/2	SiCl	10YR4/4	粒	10	中	中	焼土粒含	
	B1	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR2/1	粉	5	中	中		
					SiCl	10YR4/4	粉	10			
	B2	SiCl	10YR2/2	SiCl	10YR3/3	粉	10	中	中		
					SiCl	10YR4/4	粒	20			
	B3	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR2/2	粒～粉	30	中	中		
					SiCl	10YR4/4	粉	10			
	J1	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉～粒	10	中	中	焼土含	
					SiCl	5YR3/6	粉～粒	3			
	J2	SiCl	10YR3/4	SiCl	5YR2/4	粉～粒	10	中	中	焼土含	
					SiCl	10R2/1	粉	3			
	J3	SiCl	10YR3/4	SiCl	10R2/1	粉～粒	10	中	中	炭粒 10%, 焼土含	
					SiCl	5YR3/6	粉～粒	5			
	J4	SiCl	10YR4/4	SiCl	10YR2/1	粉	5	中	中	焼土含	
					SiCl	7.5YR2/3	粉	20			
					SiCl	5YR3/6	粉	3			
	J5	SiC	7.5YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉～粒	10	中	中	焼土含	
					SiCl	10YR2/1	粉～粒	10			
					SiCl	5YR3/6	粉～粒	10			
	J6	SiCl	10YR4/4～4/6	SiCl	10YR3/3	粉	40	中	中	焼土含	
					SiCl	10YR2/1	粉～粒	5			
					SiCl	5YR4/6	粒	5			
J7	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粒～塊	20	中	中	焼土含		
				SiCl	10YR2/1	粒	5				
				SiCl	5YR4/6	粒	1				
J8	SiCl	10YR2/2	SiCl	10YR4/4	粉～粒	5	中	中			
J9	SiCl	10YR4/4	SiCl	10YR2/1	粒～塊～層状	30	中	中	焼土含		
				SiCl	5YR4/6	粒	5				
J10	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉～粒	20	中	中	焼土含		
				SiCl	10YR2/1	粒	5				
				SiCl	5YR4/6	粒	5				
K1	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR4/6	粒	10	中	中	炭粒, 焼土含, カマド構築土		
				SiCl	5YR3/2	塊	20				
K2	SiCl	10YR4/4	SiCl	10YR4/6	粒	10	中	中	炭粒, 焼土含, カマド構築土		
				SiCl	5YR3/2	塊	3				
L1	SiCl	10YR4/6	SiCl	10YR2/31	粉～粒	20	中～密	中～硬	床構築土		
				SiCl	10YR2/1	塊	20				
pit1	L2	SiCl	5YR3/2	SiCl	10YR2/1	粒～粉	20	中	中	炭粒僅かに含, 火床面浸透層	
	E1	SiCl	10YR3/4	SiCl	5YR3/6	粒	10	中	中	焼土含	
pit2	E2	SiCl	10YR2/1	SiCl	10YR4/4	粉～粒	5	中	中		
	E3	Si	10YR4/4	SiCl	10YR3/3	粒	30	中	中	焼土含	
				SiCl	5YR4/6	粒	1				
RA05	A	SiCl	10YR2/1	SiCl	10YR4/4	粉	10	中	中	To-a 粉状火山灰塊 1% 含	
	B	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR4/4	粉～粒	20	中	中		
	J1	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粒	10	中	中	焼土含	
					SiCl	5YR3/6	粒	30			
	J2	SiCl	10YR2/2	SiCl	10YR4/4	粉～粒～塊	30	中	中	焼土含	
					SiCl	5YR4/6	粒	5			
	J3	SiCl	2.5YR4/6	SiCl	10YR4/6	粉	5	中～密	中～硬	火床面	
	K1	SiCl	10YR4/4	SiCl	10YR2/2	粉	20	中～密	中～硬	カマド構築土 焼土含	
					SiCl	5YR4/6	粉	20			
	K2	SiCl	10YR4/4	SiCl	10YR2/2	粉	5	中～密	中～硬	カマド構築土	
	L1	SiCl	10YR4/4	SiCl	10YR2/3	粉～塊	30	中～密	硬	床構築土	
	L2	SiCl	2.5YR4/6	SiCl	2.5YR2/4	粉	20	密	硬	地床部 焼土	
	pit1	E1	SiCl	10YR2/2	SiCl	10YR4/4	粒	2	中	中	
	pit2	E2	SiCl	10YR2/2	SiCl	10YR4/4	塊	20	中	中	
	pit3	E3	SiCl	10YR2/2	SiCl	10YR4/4	塊	20	中	中	
	pit4	E4	SiCl	10YR2/2	SiCl	10YR3/3	塊	20	中	中	
				SiCl	10YR4/4	塊	10				
pit5	E5	SiCl	10YR2/2	SiCl	10YR4/4	粒	3	中	中	焼土粒僅かに含	
pit6	E6	SiCl	10YR2/2	SiCl	10YR4/4	粒	2	中	中		

通称名	層名	主要土		含有土			密度	軟硬	その他		
		主性	土色(JIS)	主性	土色(JIS)	状態				%	
RA06	A	SICI	10YR2/2	SICI	10YR4/6	粉～粒	30	中	中		
	B	SICI	10YR3/2	SICI	10YR4/6	粒～塊	20	中	中		
	C1	SICI	10YR2/1	SICI	10YR4/6	塊	30	中	中		
	C2	SICI	10YR3/2	SICI	10YR4/6	粉	20	中	中		
				SICI	5YR4/6	粒	20	中	中		
	J1	SICI	10YR3/4	SICI	10YR4/4	粉～粒	10	中	中		
				SICI	5YR4/6	粒	20	中	中		
	J2	SICI	5YR4/6	SICI	10YR4/4	粉～粒	30	中	中		
				SICI	10YR2/2	粉	5				
	J3	SICI	10YR3/3	SICI	10YR4/4	粉	10				
				SICI	5YR4/6	粉～粒	30	中	中		
	J4	SICI	10YR3/3～2/3	SICI	10YR4/4	粉～粒	10				
				SICI	5YR4/6	粉～粒	20	中	中		
	J5	SICI	10YR2/3	SICI	10YR4/4	粉～粒	20				
SICI				5YR4/6	粉～粒	10	中	中			
K1	SICI	10YR4/4	SICI	10YR3/3	粉	10	密	硬	カマド構築土		
K2	SICI	10YR4/4～4/6						密	硬	カマド構築土	
L1	SICI	10YR4/4	SICI	10YR2/3	粉～粒～塊	30	中～密	中～硬		床構築土	
L2	SICI	5YR4/6～4/4	SICI	10YR2/3	粉	10	中～密	中～硬		火床面	
RA07	A	SICI	10YR2/3	SICI	10YR4/4	粉～粒	5	中	中	上面に粉伏火山灰 To-a 塊含	
	B1	SICI	10YR2/3～2/2	SICI	10YR4/4	粒～粉	10	中	中		
	B2	SICI	10YR3/3	SICI	10YR4/4	粉～粒	30	中	中		
				SICI	7.5YR4/6	粒	1				
	C1	SICI	10YR2/3	SICI	10YR2/1	粉	10	中	中		
	C2	SICI	10YR2/2	SICI	10YR4/4	粉～粒～塊	40	中	中		
				SICI	10YR4/4	粉	30	中	中		
	C3	SICI	10YR3/3	SICI	10YR4/4	粉	5				
				SICI	10YR2/1	粉	5	中	中		
	C4	SICI	10YR2/2	SICI	10YR4/4	粒	5	中	中	炭粒・焼土粒含	
	J1	SICI	10YR3/2	SICI	10YR3/4	粒	5	中	中	炭粒・焼土粒 5% 含	
	J2	SICI	7.5YR3/4	SICI	10YR5/6	塊	10	中	中	焼土塊含	
	J3	SICI	10YR2/1					中	中	炭粒 70%	
	J4	SICI	7.5YR2/3	SICI	10YR5/6	塊	10	中	中	焼土塊 5%	
	J5	SICI	10YR3/4	SICI	10YR4/6	粒	10	密	中	中	カマド地崩落流入土
	J6	SICI	5YR4/6					中	中	中	火床面
	K1	SICI	10YR4/4	SICI	10YR3/2	塊	5				
				SICI	10YR5/6	粉～粒	3	中	中		
	K2	SICI	10YR4/6	SICI	10YR3/2	塊	3				
				SICI	10YR5/6	粉～粒	5	中	中		
	K3	SICI	10YR5/6					中	中	径 2～5cm 雜含, カマド構築土	
	L	SICI	10YR3/2	SICI	10YR4/4	塊	10				
				SICI	10YR2/1	塊	10	中	中		
	pit1	SICI	10YR4/3	SICI	10YR2/2	粉～粒	5	中	中		
				SICI	7.5YR3/6	SICI	10YR2/2	塊	10	中	中
	N1	SICI	10YR3/4	SICI	10YR2/2	粉～粒	5	中	中		
M3	SICI	10YR2/2	SICI	10YR4/4	粒～塊	5	中	中			
pit3	SICI	10YR2/2	SICI	10YR4/4	粉～粒	2	中	中			
			SICI	10YR4/4	粉～粒	3	中	中	C2 層に似る		
N2	SICI	10YR2/1	SICI	10YR4/4	粉～粒	3	疎～中				
N3	SICI	10YR4/4	SICI	10YR3/3	粒	5	中	中～硬			
			SICI	10YR5/6	粉	5	中	中			
O	SICI	10YR2/3	SICI	10YR4/4	粉	5	中	中			
M5	SICI	10YR3/2	SICI	10YR5/6	粒	3	中	中	径 1～3cm 雜含		
RA08	A1	SICI	10YR2/1	SICI	10YR3/1	粉～粒	30	中	中		
	A2	SICI	10YR2/2	SICI	10YR2/1	粉	10	中	中		
	A3	SICI	10YR2/2	SICI	10YR2/1	粉	10				
				SICI	10YR4/4	粉	5	中	中		
	B1	SICI	10YR2/3	SICI	10YR4/4	粉	5				
				SICI	10YR6/4	粉	1	中	中		
	B2	SICI	10YR2/2	SICI	10YR4/4	粉	10	中	中		
				SICI	10YR2/2	粒～粉	10				
	B3	SICI	10YR2/3	SICI	10YR4/4	粉～粒	30	中	中		
				SICI	5YR5/8	粒	1				
	B4	SICI	10YR2/3	SICI	10YR2/2	粒	5	中	中		
				SICI	10YR4/4	粒～粉	10				
	C1	SICI	10YR3/2	SICI	10YR4/4	粒～粉	5	中	中		
C2	SICI	10YR3/2	SICI	10YR4/4	粉～粒	20	中	中			
			SICI	10YR2/1	粉	5	中	中			
C3	SICI	10YR2/3	SICI	10YR4/4	粉～粒	20	中	中	焼土粒含, 壁面崩壊流入土		

通称名	層名	主要土		含有土			密度	軟係	その他		
		主性	土色 (JIS)	主性	土色 (JIS)	状態				%	
RA08	C4	SIC1	10YR2/3	SIC1	10YR2/1	粉	20	中	中	炭粒僅かに含	
				SIC1	10YR4/4	粉～粒～塊	20				
	C5	SIC1	10YR2/3	SIC1	10YR4/4	粉	40	中	中		
				SIC1	10YR2/1	粉～粒	20				
	C6	SIC1	10YR2/3	SIC1	10YR4/4	粉～塊	10	中	中		
				SIC1	10YR2/1	粉	5				
	C7	SIC1	10YR2/3	SIC1	10YR4/4	粉～粒	20	中	中	焼土粒僅かに含	
				SIC1	10YR4/4	粉	5				
	C8	SIC1	10YR2/3～3/3	SIC1	10YR4/4	粉～粒	30	中	中		
	C9	SIC1	10YR2/3	SIC1	10YR4/4	粉～粒	30	中	中		
	C10	SIC1	10YR4/4	SIC1	10YR2/3	粉	30	中	中	焼土粒僅かに含	
	C11	SIC1	10YR2/3	SIC1	10YR2/1	粉	20	中	中		
				SIC1	10YR4/4	粉～粒	10				
	C12	SIC1	10YR2/2～2/3	SIC1	10YR4/4	粉	10	中	中		
	D1	SIC1	10YR4/4	SIC1	10YR2/3	粉	20	中	中	(壁崩落土)	
	D2	SIC1	10YR2/2	SIC1	10YR4/4	粉～粒	10	中	中	(壁板材痕跡か)	
	E1	SIC1	10YR3/3	SIC1	10YR4/4	粉～粒～塊	30	中～密	中～硬	(壁崩落土)	
	E2	SIC1	10YR4/4	SIC1	10YR3/3	粉～塊	30	中	中	(壁崩落土)	
	新カマド	J1	SIC1	10YR3/3	SIC1	10YR2/1～2/2	粉	5	中	中	
					SIC1	10YR4/4	粉～塊	20			
					SIC1	5YR4/6	粒	5			
		J2	SIC1	10YR3/4	SIC1	5YR4/6	粒	5	中	中	焼土
SIC1					10YR4/4	粉	10				
J3		SIC1	10YR2/3	SIC1	10YR3/3	粉	30	中	中		
				SIC1	10YR4/4	粒	5				
J4		SIC1	10YR2/3	SIC1	10YR4/4	粉～粒	20	中	中		
				SIC1	10YR4/4	粉～粒	40				
J5		SIC1	10YR3/3	SIC1	10YR2/1	粉	20	中	中		
	SIC1			10YR2/1	粒	5					
J6	SIC1	10YR3/4	SIC1	5YR4/6	粉	20	中	中	焼土		
J7	SIC1	10YR2/3～2/2	SIC1	5YR5/8	粒	1	中	中			
J8	SIC1	5YR4/8	SIC1	5YR6/8	粒～粉	30	中～密	中～硬	焼土(火床面崩壊土)		
J9	SIC1	10YR2/3	SIC1	10YR4/4	粉～粒	10	中	中	炭粒、炭化材(小枝)含		
			SIC1	5YR4/6	粒	20					
旧カマド	J'1	SIC1	10YR2/3	SIC1	10YR4/4	粉	3	中	中		
	J'2	SIC1	10YR2/3	SIC1	10YR4/4	粉～粒	10	中	中		
	J'3	SIC1	10YR4/4	SIC1	10YR2/3	塊～粒	30	中	中～硬	炭粒含	
				SIC1	5YR2/3	粉～粒	5				
				SIC1	5YR4/8	粒	1				
	J'4	SIC1	10YR4/4	SIC1	10YR2/3	粉・粒・層状塊	30	中	中	(焼土浸透層)	
				SIC1	5YR4/6	層状	1				
	J'5	SIC1	10YR2/1	SIC1	10YR4/4	粒	1	中	中	焼土粒僅かに含	
	J'6	SIC1	10YR2/3	SIC1	10YR4/4	粉～粒	5	中	中	焼土粒・カーボン粒含	
	J'7	SIC1	10YR3/1～2/1	SIC1	10YR4/4	粒～粉	1	中	中	焼土粒僅かに含	
J'8	SIC1	5YR4/8	SIC1	10YR4/4	粉	3	中	中	(火床面)		
K1	SIL	10YR4/4～4/3	SIL	10YR2/3	粉	10	中	中～硬	(カマド構築土)		
K2	SIL	10YR3/3	SIL	10YR4/4	粒	5	中	中	(カマド構築土)		
			SIL	10YR2/3～2/2	粒	20					
K3	SIL	7.5YR2/3	SIL	10YR4/4	粒	10	中	中	砂質(カマド袖下構築土)		
L1	SIC1	2.5YR4/6	SIC1	5YR4/8	粉	5	中	中～硬	(火床面浸透層)		
			SIC1	5YR4/6	粒	1					
			SIC1	10YR2/3	粒	30					
L2	SIC1	10YR4/4	SIC1	10YR2/3	粒	10	中～密	中～硬	(床構築土・硬い床)		
L3	SIC1	10YR4/4	SIC1	10YR2/3	粒	10	中	中	(床構築土・L2層の周り)		
L4	SIC1	10YR4/4	SIC1	5YR5/8	粒	30	中	中	(床構築土・旧カマド整地層)		
			SIC1	10YR2/3	粒	20					
L5	SIC1	10YR2/3	SIC1	10YR4/4	塊	10	中～密	中～硬	(床構築土・旧カマド整地層)		
			SIC1	10YR2/1	塊	5					
			SIC1	5YR5/8	塊～粒	3					
L6	SIC1	10YR5/8	SIC1	10YR4/4	粉～塊	20	中	中	(旧カマド火床面浸透層)		
			SIC1	10YR2/3	粒～粉	10					
			SIC1	10YR2/3	粒	10					
M1	SIC1	10YR2/2	SIC1	10YR4/4	粉～粒	20	中	中			
			SIC1	5YR4/6	粒～塊	5					
			SIC1	10YR2/3	粉	30					
M2	SIC1	10YR2/3	SIC1	10YR2/2	粉～粒	10	中	中			
M3	SIC1	10YR2/2	SIC1	10YR4/4	粉	30	中	中			
M4	SIC1	10YR4/4	SIC1	10YR2/3	粒	3	中	中			
M5	SIC1	10YR4/4	SIC1	10YR2/3	粉	30	中	中			
M6	SIC1	10YR2/2	SIC1	10YR2/2	粉～粒	10	中	中			
自然層	III	SIC1	10YR2/3	SIC1	10YR4/4	層状	40	中	中	炭粒含	
	II	SIC1	10YR2/3	SIC1	10YR4/4	粉	1	中	中	漸移層	
	IV	SIC1	10YR4/4							地山シルト	

道標名	層名	主原料		含有土				密度	軟硬	その他	
		土性	土色(JIS)	土性	土色(JIS)	状態	%				
RA09	A	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉	3	中	中		
				SiCl	10YR7/3	塊～粉状	3				火山灰 (To-a)
	B1	SiCl	10YR2/2	SiCl	10YR4/4	粉	10	中	中		
				SiCl	5YR5/8	粒	3				焼土
	B2	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉	20	中	中		
	B3	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉～粒	50	中	中		
	B4	SiCl	10YR2/3～3/3	SiCl	10YR4/4	粉～粒	40	中	中		
				SiCl	5YR5/8	粒	1	中	中		焼土
	B5	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉～粒	30	中	中		
	B6	SiCl	10YR2/3～2/2	SiCl	10YR4/4	粉～粒	20	中	中		
	C1	SiCl	10YR3/4	SiCl	10YR4/4	粒～粉	30	中	中		
				SiCl	10YR2/3～2/2	粉～粒	30				炭粒含(崩壊土)
	C2	SiCl	10YR2/2	SiCl	10YR4/4	粉	20	中	中		
	C3	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉	30	中	中		
	C4	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉～粒～塊	30	中	中		
	C5	SiCl	10YR2/3～2/2	SiCl	10YR4/4	粉～粒	10	中	中		
				SiCl	5YR5/8	粉	3				焼土、炭粒1%含
	C6	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉	5	中	中		
				SiCl	5YR3/6	塊	20				焼土
				SiCl	5YR5/8	塊	3				焼土
	C7	SiCl	10YR2/2	SiCl	10YR4/4	粒～粉～塊	40	中	中		
	J1	SiCl	10YR2/2	SiCl	10YR4/4	粉～粒	20	中	中	焼土粒僅かに含	
	J2	SiCl	10YR4/4	SiCl	10YR2/3	粒～粉	30	中	中		
	J3	SiCl	10YR4/4	SiCl	10YR2/3	粉	10	中	中	(天井崩壊)	
	J4	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉～粒～塊	30	中	中		
	J5	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR2/2	粉	40	中	中	焼土粒～粉、炭粒含	
	J6	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉	20	中	中		
				SiCl	5YR5/8	粉～粒	10				焼土
	J7	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR4/4	粉～粒	10	中	中		
				SiCl	5YR4/8～6/8	粉	30	中	中		(天井崩壊)
	J8	SiCl	5YR6/8	SiCl	5YR4/8	粉	30	中	中		
				SiCl	10YR2/2	粉	5				
	J9	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉～塊	10	中	中		
				SiCl	10YR2/3	粉	5	中	中		
	J10	SiL	10YR4/4	SiCl	5YR3/6～4/6	粉	50	中	中		
				SiCl	10YR4/4	塊～粉	30	中	中		(浸透層)
	K1	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR4/4	塊～粉	30	中	中		
	K2	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR4/4	塊	40	中	中		
	K3	SiCl	10YR4/4	SiCl	10YR3/3	粉	1	中	中		
	K4	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR4/4	粉～粒	30	中	中		
	L1	SiCl	10YR4/4	SiCl	10YR3/3	粉～塊	10	中～着	中～硬	(床構基土・硬化面)	
	L2	SiCl	10YR4/4	SiCl	10YR3/3	粉～塊	20	中	中～硬	(床構基土)	
	M1	SiCl	10YR2/3	SiL	10YR4/4	粒	5	中	中	炭粒、灰黄褐色粘土塊含	
	M2	SiCl	10YR2/3					中	中	炭粒含	
	RA10	A	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉～粒	10	中	中	To-a 塊1%含
B1		SiCl	10YR3/3～3/4	SiCl	10YR4/4	粉～粒	30	中	中		
B2		SiCl	10YR3/3～3/4	SiCl	10YR4/4	粉	20	中	中		
				SiCl	10YR2/3	粉	10				
B3		SiCl	10YR2/3～3/4	SiCl	10YR4/4	粉～塊	40	中	中		
B4		SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR4/4	粉	30	中	中		
J1		SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR3/4	粉	30	中	中	焼土浸透層(7.5YR3/2)	
J2		SiCl	7.5YR3/4	SiCl	5YR4/8	粉	30	中	中	焼土30%含	
				SiCl	5YR5/8	粒	1			焼土	
J3		SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉～粒	10	中	中	焼土粒、炭粒1%含	
J4		SiCl	10YR2/3～2/2	SiCl	10YR3/3	粒～粉	20	中	中		
				SiCl	10YR4/4	粉～粒	5				焼土粒3%含
J5		SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR4/4	粉	10	中	中		
				SiCl	10YR2/1	粉	5	中	中		焼土粉～粒1%含
J6		SiCl	5YR5/8					中	中	火床面	
K1		SiCl	10YR2/3～3/3	SiCl	10YR4/4	粉～塊	20	中～着	中～硬		
K2		SiCl	10YR4/4	SiCl	10YR2/3	粉	10	中～着	中～硬		
L1		SiL	10YR4/4	SiL	10YR2/3	粉	30	中～着	中～硬	(床構基土)	
IV		SiCl	10Yr4/3～4/4	SiCl	10YR4/6	粉	10	中～着	中～硬	堆山	
A		SiCl	10YR2/1	SiCl	10YR4/4	粒	2	中	中～軟		
B		SiCl	10YR3/2	SiCl	10YR4/4	粒～塊	10	中	中		
SiCl	10YR2/1			粒	2			焼土塊2%含			
C	SiCl	10YR3/1	SiCl	10YR4/4	粒～塊	5	中	中	10YR4/4シルトは東壁付近偏在		
J1	SiCl	10YR3/1	SiCl	10YR4/6	塊	30	中	中～軟	(カマド崩落土)		
J2	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粒～粉	10	中	中			
J3	SiCl	10YR4/3	SiCl	10YR2/1～2/3	塊	10	中	中～軟			
			SiCl	10YR4/4	塊	10				焼土塊、炭粒含	
J4	SiCl	10YR3/4～4/4	SiCl	10YR2/3	粉	30	中	中	焼土粒僅かに含		
J5	SiCl	10YR3/4～3/6	SiCl	2.5YR4/6	粒	5	中	中	火床面		
K1	SiCl	10YR4/4～3/4	SiCl	10YR3/3	粉	5	中～着	中～硬	(カマド構基土)		

RA11	K2	SiCl	10YR4/4~3/4	SiCl	10YR3/3	粉~粒	30	中~密	中~硬	(カマド袖構築土)	
	L	SiCl	10YR4/6~4/4	SiCl	10YR2/3	粉	10	中	中	(床構築土)	
	I	SiCl	10YR2/2					粒~中	中	表土	
	III	SiCl	10YR4/4~3/4					中	中	地山雑草層	
	IV	SiCl	10YR4/6~4/4					中	中	地山シルト	
遺構名	層名	主要土		含有土		状態	%	密度	軟硬	その他	
		土性	土色 (JIS)	土性	土色 (JIS)						
RA12	A	SiCl	10YR2/2	SiCl	10YR3/3	粉	30	中	中		
				SiCl	10YR4/4	粉~粒	10				
	B1	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR4/4	粒~粉	30	中	中		
				SiCl	10YR2/2	粉	1				
	B2	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR4/4	粉	5	中	中		
	B3	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR4/4	塊~粒	40	中	中		
	J1	SiCl	5YR3/2	SiCl	5YR4/8	粒~塊	20	中	中	塊径約 3cm	
				SiCl	10YR2/2	粉~粒	5				
				SiCl	10YR3/3	粉~粒	5				
	J2	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR2/3	粉~粒	30	中	中		
				SiCl	5YR3/2	粉~粒	10				
	K1	SiCl	10YR4/6	SiCl	10YR2/3	粉	3	中~密	中~硬	(カマド構築土)	
K2	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/6	粉~粒~塊	30	中~密	中~硬	(カマド構築土)		
L1	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/6	粉~粒~塊	40	密	硬	硬い範囲(床構築土)		
L2	SiCl	10YR4/6	SiCl	10YR2/3	粉~塊	20	中~密	中~硬	L1層の周り(床構築土)		
RA13	A	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR4/4	粉	30	中	中		
	J1	SiCl	5YR3/2	SiCl	10YR4/6	粒~塊	5	粒~中	中	焼土粒、炭粒含(カマド崩落土)	
	J2	SiCl	7.5YR3/2	SiCl	10YR4/6	塊	5	粒~中	中	焼土粒含	
	J3	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/6	塊	10	中	中	焼土塊含	
	J4	SiCl	5YR3/2	SiCl	2.5YR5/6	塊	3	中	中	(火床面)	
	K1	SiCl	10YR3/4	SiCl	10YR4/6	粒~塊	10	中~密	中	焼土粒含(カマド構築土)	
	K2	SiCl	10YR4/6	SiCl	10YR2/3	粒	2	中~密	中	(カマド構築土)	
	L	SiCl	10YR3/4	SiCl	10YR2/1	塊	3	中	中	(床構築土)	
	A1	SiCl	10YR2/1	SiCl	10YR7/3	粉~塊	20	中	中	To-a 混入。上位黒味が強い。	
	A2	SiCl	10YR3/1	SiCl	10YR4/6	粒	2	中	中		
RB01	A3	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR3/2	塊	5	中~密	中	径 15~30cm 角礫散含	
	B1	SiCl	10YR3/1	SiCl	10YR3/3	粉	2	中	中		
				SiCl	10YR5/8	粒~塊	2				
	B2	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR4/6	粉~粒	5	粒~中	中	土器が多く出土した層	
	B3	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR4/6	粉~粒	5	粒~中	中		
				SiCl	10YR2/2	粉	10				
	B4	SiCl	10YR3/1	SiCl	10YR4/4	塊	40	中	中	炭粒僅かに含	
	B5	SiCl	10YR3/1	SiCl	10YR4/4	塊	20	中	中		
	L	SiCl	10YR4/2	SiCl	10YR5/6	塊	20	中~密	中	炭粒僅かに含(床構築土)	
	A	SiCl	10YR2/1	SiCl	10YR2/2	塊	10	中	中	に深い黄褐色火山灰 (To-a) 含	
	B	SiCl	10YR2/2					中	中		
	RB02	C1	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/6	粒	2	中	中	
C2		SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/6	粒	2	中	中		
				SiCl	10YR5/8	粒	3				
D		SiCl	10YR2/1	SiCl~SiCl	10YR5/6	塊	30	中	中	壁に現れるIVa層の崩落土	
L		SiCl	10YR4/6	SiCl	10YR2/3	粉	20	中	中		
Ia		SiCl	10YR2/3					中	中	表土。草根多量。	
Ib		SiCl	10YR2/2	SiCl~SiCl	10YR3/1	粒~塊	20	中	中	表土。調査区西~南側一部のみ。	
IIIa		SiCl	10YR2/3					中	中	漸移層	
IIIb		SiCl	10YR3/3~3/4					中	中	漸移層	
IVa		SiCl	10YR5/6~4/6					密	中~硬	地山シルト層	
RD06		A	SiCl	10YR2/2~2/3	SiCl	10YR4/4	粉~粒	10	中	中	
		B	SiCl	10YR4/4	SiCl	10YR2/3	粉~塊	40	中	中	
RD07		SiCl		SiCl						RG04を切る土坑	
RD08	A	SiCl	10YR2/2	SiCl	10YR4/4	粉	10	中~密	中~硬	RG04に切られる	
	B	SiCl	10YR3/1	SiCl	10YR4/4	粉~粒~塊	30	中	中		
RD09	A	SiCl	10YR2/2	SiCl	10YR4/4	粉	10	中	中		
	B1	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉~粒~塊	30	中	中	炭塊含	
	B2	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	塊~粒	40	中	中		
	C1	SiCl	10YR3/3~2/3	SiCl	10YR4/4	塊~粒	30	中	中		
				SiCl	7.5YR4/6	粒	5			焼土粒、炭粒含	
	C2	SiCl	10YR2/2	SiCl	10YR4/4	粉~粒	30	中	中		
	C3	SiCl	10YR4/4	SiCl	10YR2/3	粉~粒	30	中	中		
	C4	SiCl	10YR4/4	SiCl	10YR2/3	粉	10	中	中		
RD10	A	SiCl	10YR2/1	SiCl	10YR4/3~4/4	粉~塊	20	中	中	焼土粒、炭粒含	
RD11	A	SiCl	10YR2/2~2/3	SiCl	10YR4/3~4/4	粉	3	中	中	焼土粒、炭粒1%含	
	B	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/3~4/4	粉~粒	30	中	中	炭粒~塊含	
				SiCl	5YR4/6	粒	5			焼土	
	C1	SiCl	10YR2/1	SiCl	10YR4/3~4/4	粉~粒~塊	20	中	中	焼土粒、炭粒含	
	C2	SiCl	10YR2/1	SiCl	10YR4/3~4/4	粉~粒	40	中	中	焼土粒、炭粒含	

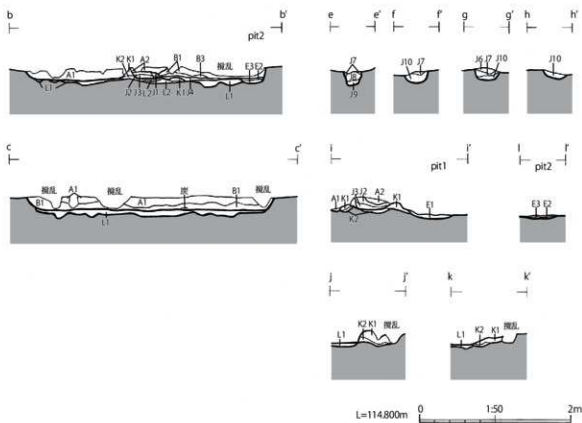
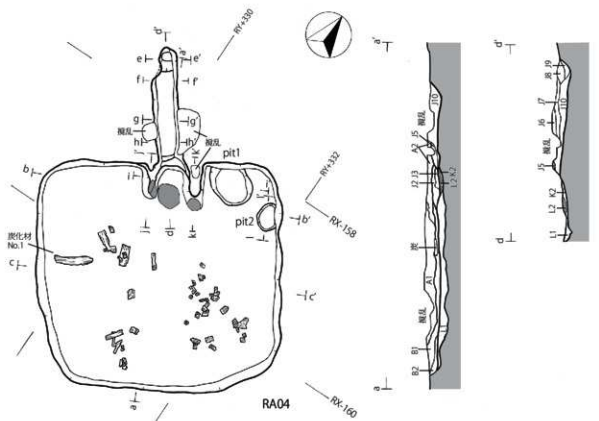
道標名	層名	主要土		含有土				密度	軟硬	その他
		土性	土色 (JIS)	土性	土色 (JIS)	状態	%			
RD12	A	SiCl	10YR2/2	SiCl	10YR4/4~4/3	粉~粒~塊	20	中	中	炭粒 1% 含
				SiCl	5YR4/6	粉~粒	1			
RD13	B	SiCl	10YR4/3~4/4	SiCl	10YR2/3	粉	20	中	中	
	A1	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR3/4~4/4	粉	20	中	中	
RD14	A2	SiCl	10YR2/3	SiCl	5YR4/6	粒	1			焼土
				SiCl	10YR4/4~3/4	粉~粒	40	中	中	
				SiCl	5YR4/6	粒	1			焼土
RD15	A	SiCl	10YR2/2	SiCl	10YR4/4	粉~塊	30	中	中	
RD15	A1	SiCl	10YR2/1	SiCl	10YR4/4	粉~粒	1	中	中	
	A2	SiCl	10YR2/1	SiCl	10YR4/4	粉~粒	20	中	中	炭粒~塊含
SiCl				5YR3/6	粒~塊	10			焼土	
RD15	B	SiCl	10YR3/1	SiCl	10YR4/4	粉~粒	10	中	中	焼土浸透層含 (5YR5/8)
				SiCl	5YR3/6~4/6	屑状	30			炭粒~塊含
	C	SiCl	10YR3/1	SiCl	10YR4/4	粉~粒	5	中	中	焼土と黒色土と互層 (火床面)
	D	SiCl	10YR2/1	SiCl	10YR4/4	塊 (径 3~5cm)	50	中	中	人為堆積か
RD16	A	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉	3	中	中	RA13 を切る
RG03・04	A	SiCl	10YR2/2	SiCl	10YR4/3	塊	10	中	中	径 2~10cm 礫含
	B1	SiCl	10YR3/1	SiCl	10YR4/3	塊	30	中	中	
	B2	SiCl	10YR3/1	SiCl	10YR4/6	粒	5			
				SiCl	10YR4/4	粉~粒~塊	30	中	中	
	C	SiCl	10YR4/3				30	中	中	
ピット 1	P	SiL	10YR3/3	SiCl	5YR3/2	粉	30	中	中	焼土
ピット 2	P1	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR3/3	粉	5	中	中	
				SiCl	10YR4/4	粉~粒	10	中	中	
ピット 3	P2	SiCl	10YR3/1	SiCl	10YR4/4	粉	30	中	中	
ピット 4	A	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉~粒	5	中	中	
	B	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粒	10	中	中	
	C1	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉~塊	20	中	中	
	C2	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉	5	中	中	
	C3	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粒~塊	40	中	中	
旧低地 トレンチ	A1	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR2/2	粉	30	中	中	
				SiCl	10YR4/4	粉	5			
	B1	SiL	10YR4/4	SiCl	10YR2/3	粉	1	中	中	径 1~5cm 礫含
	B2	SiCl	10YR4/4	SiCl	10YR2/3	粉	10	中	中	
	C1	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR4/4	粉	30	中	中	径 1~10cm 礫含
	C2	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉	10	中	中	
				SiCl	10YR3/3	粉	5			
C3										
IV	SiCl	10YR4/4	SiCl	10YR3/3	粉	5	中~密	中~硬		

第9表 第5次調査出土遺物観察表

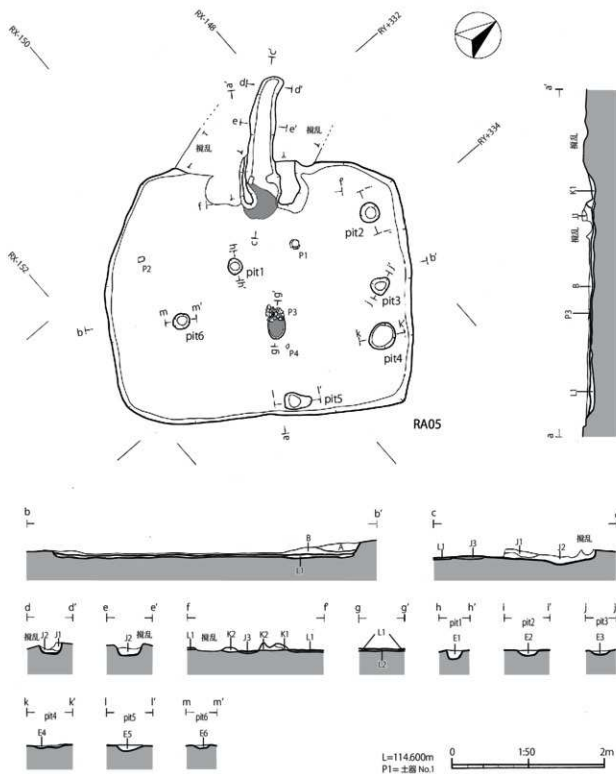
番号	図版	写真 図版名	遺構名	台帳 番号	形態				残存	寸法(cm)				断面調整		断面	その他
					区分	器種	位置	層位		器高	口径	体径	底径	外面	内面		
1	30	20	RA04	土器 7	土器 壺	NW	B	口~底	15.6	16.6	14.8	8.5	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヘラナデ、厚減	木炭痕		
2	30	20		土器 9	土器 壺	NE	B	体~底				8	ハケメ→ヘラナデ	ハケメ	木炭痕		
3	30	20		土器 8	土器 壺	NW	B	口~体					ヨコナデ、縁部沈線、ヘラミガキ	ヨコナデ、ハケメ			
4	30	20		土製品 1	土器 壺	ミナチヤウ 坏	N	B	口~底	2.8	5.8		2	ヘラケズリ	ヘラナデ	丸底	手づくね
5	31	-	RA05	土器 23	土器 坏	NW	A	口~体	15.2				ヨコナデ、有段、ヘラミガキ	ヘラミガキ、黒色処理	丸底		
6	31	-		土器 14	土器 坏	NE	B1	口~底	3.4	13.6			ヨコナデ、有段沈線、ヘラミガキ	ヘラミガキ、黒色処理	丸底		
7	31	-		土器 15	土器 坏	NE	B1	口~底	13				ヘラミガキ	ヘラミガキ、黒色処理			
8	31	20		土器 5	土器 坏	No.3(1)	底	口~底	5.1	15.8			ヘラミガキ、ヘラナデ、有段沈線、一部黒色	ヘラミガキ、黒色処理			
9	31	-		土器 32	土器 坏	SW	A	口~体	13.5				ヘラミガキ	ヘラミガキ、黒色処理			
10	31	20		土器 6	土器 坏	No.3(2)	底	体~底					ヘラナデ→ヘラミガキ、ヘラケズリ、一部黒色	ヘラナデ→ヘラミガキ、黒色処理			
11	31	-		土器 3	土器 壺	No.1	底	底				9.3	ハケメ→ヘラナデ	ヘラナデ	木炭痕		
12	31	-		土器 16	土器 壺	NW	B	口~体	19.2				ヨコナデ、ヘラナデ	ハケメ	木炭痕		
13	31	-		土器 17	土器 壺	NW	B	口					ハケメ→ヨコナデ	ハケメ			
14	31	-		土器 12	土器 壺	カマド右	B2	口					ハケメ→ヘラナデ	ハケメ			
15	31	20		石盤 2	石製品	磁石	石 No.1	底		長 11.0	幅 5.1	厚 3.3		ハケメ→ヘラナデ	ハケメ		流紋岩
16	31	20		土製品 10	土製品	不明	NW	B									
17	32	20	RA06	土器 65	土器 坏		検出面	口~底	5.8	16			ヘラミガキ、有段沈線	ヘラミガキ、黒色処理			
18	32	20		土器 66	土器 壺		検出面 -A	口~体	20.4	17.8			ハケメ→ヨコナデ、ハケメ、縁部有段沈線	ヨコナデ、ヘラナデ			
19	32	20		土器 18	土器 壺	NE	B	体~底			11.5	7.1	ハケメ→ヘラナデ	ヘラナデ			
20	32	20		土器 3	土器 壺	NE	J	体~底					ヘラミガキ	ヘラミガキ、黒色処理	平底、ヘラミガキ		
21	32	20		土製品 4	土製品	玉	カマド内	攪乱									
22	32	20		土製品 7	土製品	勾玉	SE	A									
23	33	20		RA07	土器 18	土器 坏	カマド	J	口~体	16.4				ヨコナデ、有段沈線、ヘラミガキ	ヘラミガキ、黒色処理		
24	33	20	土器 13		土器 坏	カマドベルト (1)南	底	口~体、底					ヘラミガキ、黒色処理	ヘラミガキ、黒色処理			
25	33	21	土器 20		土器 壺	No.1	底	口~体	16				ハケメ→ヨコナデ、ヘラミガキ	ヨコナデ、ハケメ			
26	33	-	土器 26		土器 壺	ベルト①南	底	口~体	16.4	15.8			ハケメ→ヨコナデ、ヘラミガキ、縁部有段沈線	ヨコナデ、ハケメ、ヘラナデ			
27	33	21	土器 19		土器 壺	カマド	J	口~体、底	15.2				ヨコナデ、ハケメ	ヨコナデ、ハケメ			
28	33	21	土器 6		土器 椀調整	No.2,3	底	口~体	22.8	15.9	21.4	7.7	ヨコナデ、ハケメ、裏面	ヨコナデ→ヘラナデ、ハケメ			
29	33	24	鉄製品 3		鉄製品	刀子	カマド内	J	1/2	長 6.58	幅 1.87	厚 0.67	重 6.4				
30	34	-	RA08	土器 54	土器 坏	NW	底	口~体					ヘラミガキ、有段沈線	ヘラミガキ、黒色処理			
31	34	-		土器 72	土器 椀	NW	ベルト②	C	口~体				ヘラミガキ、ハケメ→ヘラミガキ	ヘラナデ→ヘラミガキ			
32	34	21		土器 10	土器 壺	No.9	K カマド芯	口~体	18.7	16.6			ハケメ→ヨコナデ、ハケメ	ハケメ→ヨコナデ、ハケメ			
33	34	21		土器 11	土器 壺	No.10	K カマド芯	口~底	30.5	19.4	17.7	7	ハケメ→ヨコナデ、縁部有段、ハケメ	ハケメ→ヨコナデ、ハケメ			
34	34	21		土器 7	土器 壺	No.6	K	口~底	16	16.2	14.4	8.2	ハケメ→ヨコナデ、ハケメ	ヨコナデ、ハケメ	木炭痕		

35	35	21		土器 9	土師器	甕	No.8	K カマド芯	口～底	32.1	20.6	19.5	7.9	ハケメ→ヨコナデ、ハケメ	ヨコナデ、ハケメ、ハラナデ、輪轡痕	木炭痕→ハラナデ
36	35	21		土器 8	土師器	甕	No.7	K カマド芯	口～底	26.5	19.4	17.7	8.1	ハケメ→ヨコナデ、ハケメ	ヨコナデ、ハケメ	ハケメ
37	35	21		土器 6	土師器	甕	No.3	次床面	口～底	14.5			5.9	ヨコナデ、ハケメ	ヨコナデ、ハケメ	ハケメ
38	35	21		土器 16	土師器	甕	No.4	床	体～底				9.0	ハラナデ	ハラナデ	木炭痕?
39	36	-		土器 14	土師器	甕	No.1	床	口～体			17.8		ヨコナデ、ハケメ、ハラナデ	ヨコナデ、ハケメ、ハラナデ	
40	36	21		土器 48	土師器	甕	NW	J	口～体～底	25.0	18.2	18.0	7.7	ハケメ→ヨコナデ、ハラナデ	ヨコナデ、ハケメ、ハラナデ	
41	36	21		土器 37	土師器	甕	カマド前	J	口～底	9.3	14.1	12.4	6.3	ヨコナデ、ハケメ→ハラナデ	ヨコナデ、ハラナデ、ハラナデ、ハラナデ	ハラミガキ
42	36	-	RA08	土器 38	土師器	球胴甕	カマド前	J	体～底	11.1			8.8	ハケメ→ハラミガキ、ハラナデ	ハラナデ、ハケメ	木炭痕
43	36	-		土器 91	土師器	甕	NE	C	体～底	11.3			9.6	ハラナデ	ハラナデ	
44	37	-		土器 21	土師器	球胴甕	No.5	床	体～底				8.9	ハケメ	ハケメ	
45	37	21		土器 39	土師器	球胴甕	カマド前	J	口～底	22.8	15.9	21.4	7.7	ヨコナデ、ハケメ→ハラミガキ、ハラミガキ、輪轡痕	ヨコナデ、ハラナデ、輪轡痕	木炭痕→ハラナデ
46	37	21		土製品 2	土師器	ヒニチユア片口	燈通	J	口～底	3.3	8.0			ハラミガキ	ハラナデ、スズ付着	平づくね
47	38	21		土製品 5	土玉	丸玉	NW	B	完整	径 0.7	厚 0.6			中央に穿孔		
48	38	21		土製品 6	土玉	丸玉	NW	A	完整	径 1.0	厚 0.7			中央に穿孔		
49	38	21		土製品 9	土玉	勾玉	NW	A	2/3	幅 1.0	厚 1.2	(重 3.9)		穿孔あり		一部欠損
50	38	24		鉄製品 4	鉄製品	刀子	NE	実	4/5	長 22.0	幅 1.68	厚 0.78	重 33.3			
51	38	21		石器 6	石製品	砥石	NE	C		長 8.6	幅 7.1	厚 5.7		断面三角形		砥石
52	38	21		石器 7	石製品	砥石	NE	C		長 9.9	幅 8.5	厚 6.0		一面だけ使用		砥石
53	39	22		土器 12	土師器	坏	No.8	床	口～底	3.8	13.4			ハラミガキ、有段	ハラミガキ、黒色処理、有段	内面底部凹む
54	39	22		土器 8	土師器	坏	ベルト①北	C	口～底	5.0	(14.6)			ハラナデ、ハラミガキ、有段	ハラミガキ、黒色処理	
55	39	22		土器 47	土師器	坏	No.6	C上	口～底	4.2	(14.0)		5.0	ハラナデ、ハラミガキ、有段	ハラナデ、ハラミガキ、有段	平底、ハラミガキ
56	39	22		土器 28	土師器	坏	SE	C	口～底	5.0	(17.8)			ハラミガキ、有段	ハラミガキ、有段	
57	39	22		土器 37	土師器	坏	SW	C	体					ハラミガキ、有段	ハラミガキ、黒色処理	
58	39	22		土器 51	土師器	坏	NW	B	口～底	5.7	(14.0)			ハラミガキ、有段	ハラミガキ	
59	39	22		土器 50	土師器	坏	NW	B	口～底	5.8	(16.6)			ハラミガキ、有段、一部黒色	ハラナデ→ハラミガキ、有段、黒色処理	
60	39	22		土器 52	土師器	坏	NW	B	口～底	5.4	(14.4)			ハラナデ、輪轡痕	ハケメ、黒色処理	平底
61	39	-		土器 83	土師器	坏	SE	A	口～体	15.2				ハラミガキ、有段	ハラミガキ、黒色処理	
62	39	-		土器 85	土師器	坏	SW	A	口～体	(3.7)	16.0			ハラナデ→ハラミガキ、ハケメ	ハラミガキ、黒色処理	
63	39	22		土器 13	土師器	鉢	No.9	床	口～底	10.0	19.6		7.7	ヨコナデ、ハラナデ、ハラミガキ	ヨコナデ、ハラミガキ、被熱痕	平底
64	39	22		土器 26	土師器	鉢	NE	C	口～体	10.2	(25.0)			ヨコナデ→ハラミガキ、ハラミガキ、有段	ハラミガキ	平底、丸底
65	40	22		土器 5	土師器	甕	No.12,14,15,17	K	口～体	(20.6)	17.0	16.5		ヨコナデ、ハラミガキ、輪轡痕	ヨコナデ、ハケメ	カマド芯
66	40	22		土器 6	土師器	甕	No.12,13,16	K	口～底	21.5	18.9	18.0	7.7	ヨコナデ→ハラミガキ	ヨコナデ、ハケメ	ハラミガキ、カマド芯
67	40	-		土器 38	土師器	甕	SW	C	口～体		18.6			ハケメ→ヨコナデ、ハケメ、輪轡痕	ヨコナデ、ハケメ	
68	40	22		土器 27	土師器	甕	SE	C	口～底	14.4	(16.2)	(13.9)	7.6	口唇有段、ヨコナデ、ハラナデ	ハラナデ	ハラナデ→ハラミガキ
69	40	22		土器 7	土師器	甕	カマド	C	口～底	22.1	18.0	16.1	8.3	ヨコナデ、輪轡痕	ヨコナデ、ハケメ	無底
70	41	22		土器 42	土師器	甕	No.3	C上	口～底	10.6	12.9	10.9	6.1	ヨコナデ、ハラナデ	ヨコナデ、ハケメ	
71	41	-		土器 46	土師器	甕	No.5	C上	口～体	15.6	12.9			ヨコナデ、ハラミガキ	ヨコナデ、ハラナデ	
72	41	22		土器 40	土師器	甕	No.1	C上	口～底	27.7	19.0	18.6	8.4	ヨコナデ、輪轡痕	ヨコナデ、ハラナデ、輪轡痕	ハラナデ
73	41	22		土器 48	土師器	甕	No.7	C上	口～底	21.6	21.5	16.7	7.6	口唇有段、ヨコナデ、輪轡痕	ヨコナデ、口唇沈着、ハケメ	木炭痕
74	41	23		土器 45	土師器	甕	No.4	C上	口～底	27.4	18.6	16.5	9.0	ヨコナデ→ハラミガキ、表面厚薄不均、被熱痕	ハラナデ、ハケメ、輪轡痕	ハラナデ

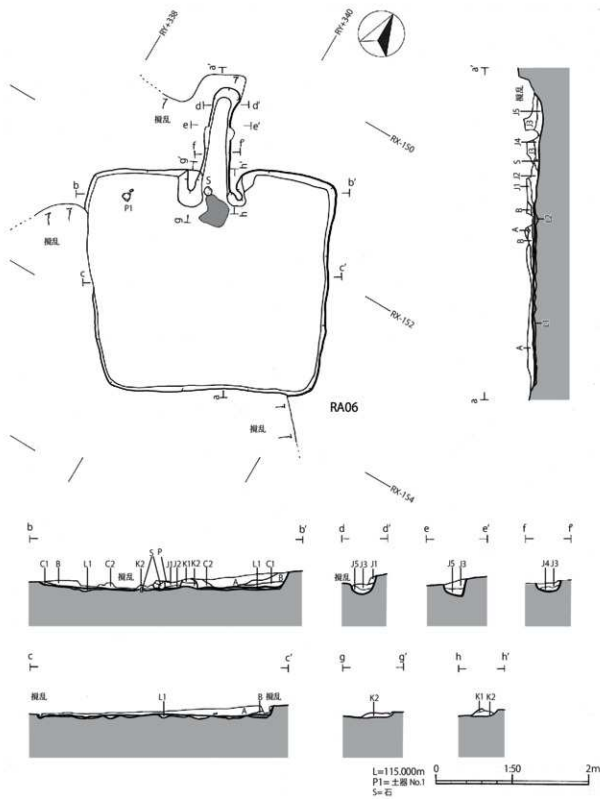
75	42	23		土器 49	土師器	甕	No.10	C上	口～体	(19.0)				ヨコナデ、ハケメ 頸部文様 2 条、 口唇折曲有段	ヨコナデ、ハケメ、 輪襷痕				
76	42	23		土器 74	土師器	甕	NE	B	口～体	22.0	19.5			ヨコナデ、ハケメ	ハケメ、ヘラナ デ、ヘラミガキ				
77	42	23	RA09	土器 75	土師器	甕	NW	A	口	21.8				ヨコナデ、頸部 有段、口唇段 有	ヨコナデ、ハケメ				
78	42	23		土器 15	土師器	椀調羹	標蓮ペルト ①W	C上	口～体	20.0				ヨコナデ、頸部 有段、ハケメ～ ヘラミガキ	ヨコナデ、ハケメ、 ヘラナデ、輪襷 痕				
79	42	23		土器 41	土師器	甕	No.2	C上	口～底	(9.9)	15.0	15.0	7.2	ヘラミガキ、厚 減、	ヘラミガキ、黒 色トビ?	多孔式 被 体下部に 熱刺痕	体下部に 穿孔有		
80	42	23		土製品 11	土製品	不明	カマド	J		長 9.3	厚 1.1	幅 1.6							
番号	図版	写真	遺構名	台帳 番号	形態				出土	残存	寸法(cm)				断面調整		底面	その他	
					区分	器種	位置	層位			器高	口径	体径	底径	外面	内面			
81	43	23		土器 22	土師器	坏	SE	B	口～底	3.0	10.0		4.0	ヘラナデ～ヘラ ミガキ	ヘラミガキ			手づくね風	
82	43	23		土器 3	土師器	坏	No.3	床	口～底	4.5	(16.0)		5.8	ヘラミガキ、有 段、黒色処理	ヘラミガキ、黒 色処理				
83	43	23	RA10	土器 6	土師器	高坏	SW	床	体～底				(8.8)	ハケメ～ヘラミ ガキ、文様複数 条、	ハケメ～ヘラミ ガキ、黒色処理				
84	43	23		土器 1	土師器	甕	No.1	床	体～底				5.2	ハケメ	ハケメ	ヘラナデ			
85	43	23		土器 2	土師器	甕	No.2	床	口～体	15.4	15.1			ヨコナデ、ハケメ 厚減	ヨコナデ、ハケメ、 厚減				
86	43	23		土器 4	土師器	坏?	NE	床	口～体					ヘラミガキ、口 縁外反	ヘラミガキ、黒 色処理				
87	43	23		土製品 3	土製品	助輪車	SW	床	完形	径 4.7	厚 2.2			ヘラナデ、ヘラ ミガキ			断面台形		
番号	図版	写真	遺構名	台帳 番号	形態				出土	残存	寸法(cm)				断面調整		底面	その他	
					区分	器種	位置	層位			器高	口径	体径	底径	外面	内面			
88	44	23		土器 3	土師器	甕	No.6	K	口～底	23.2	15.7	15.1	7.5	ヨコナデ、ハケメ、 輪襷痕、被熱 刺痕	ヨコナデ、ハケメ			カマド芯	
89	44	23		土器 4	土師器	甕	No.8	K	口～底	22.5	17.6	16.6	6.5	ヨコナデ、ヘラナ デ、口唇段整形	ヨコナデ、ヘラナ デ、被熱刺痕	ヘラナデ、厚 減	カマド芯		
90	44	24	RA11	土器 2	土師器	甕	No.5	K	口～底	15.2	16.5	14.7	8.4	ヨコナデ、ヘラナ デ、ヘラミガキ	ヨコナデ、ヘラナ デ、ヘラミガキ	ヘラミガキ	カマド芯、 91下から 出土		
91	44	24		土器 1	土師器	甕	No.4	K	口～底	14.0	14.9	13.3	7.0	ハケメ～ヨコナ デ、ヘラミガキ	ヨコナデ、ヘラナ デ、ヘラミガキ	ヘラミガキ	カマド芯		
92	44	24		土器 9	土師器	甕	No.1	床	口～底	10.0	12.2	11.5	5.4	ヨコナデ、ハケメ ～ヘラナデ	ヨコナデ、ハケメ ～ヘラナデ	ヘラナデ、厚 減			
番号	図版	写真	遺構名	台帳 番号	形態				出土	残存	寸法(cm)				断面調整		底面	その他	
					区分	器種	位置	層位			器高	口径	体径	底径	外面	内面			
93	45	24	RA12	土器 3	土師器	甕	NE	A	口～体	15.4				ハケメ～ヨコナ デ	ヘラミガキ、黒 色処理				
94	45	24		土器 1	土師器	甕	No.1	K	口～体	18.8				ハケメ～ヨコナ デ	ヨコナデ、ハケメ				
番号	図版	写真	遺構名	台帳 番号	形態				出土	残存	寸法(cm)				断面調整		底面	その他	
					区分	器種	位置	層位			器高	口径	体径	底径	外面	内面			
95	45	24		土器 1	土師器	坏	ペルトQNW	B	口～底	4.2	11.0		4.7	ヨコナデ、ヘラナ デ、有段	ヘラナデ	平底風丸 底	谷み大		
96	45	24	RE01	土器 3	土師器	甕	SE	B	体				(21.0)	ハケメ	ハケメ、工具擦 痕		接合小破 片 RD11		
97	45	24		土器 2	土師器	甕	NE	B	口～体、底	23.0			10.8	ヘラナデ～ヘラ ウズ?	ヘラナデ	無底式			
番号	図版	写真	遺構名	台帳 番号	形態				出土	残存	寸法(cm)				断面調整		底面	その他	
					区分	器種	位置	層位			器高	口径	体径	底径	外面	内面			
98	45	24	RD10	土器 3	土師器	坏	A	口～底	4.2	13.6				ヘラミガキ、有 段文様	ヘラミガキ、黒 色処理	平底風丸 底			
番号	図版	写真	遺構名	台帳 番号	形態				出土	残存	寸法(cm)				断面調整		底面	その他	
					区分	器種	位置	層位			長	厚	幅	重(g)	外面	内面			
99	45	24	遺構外	石器 16	石器	石敲	RE-122 RY-388	検出面	壳形	3.3	0.3	1.5						無底	
200	-	24	RA08	石 8	石材?	自然石	NW	C		3.4	1.4	2.8	24						
201	-	24	RA08	石 10	石材?	自然石	NW	C		3.0	1.7	2.5	17						



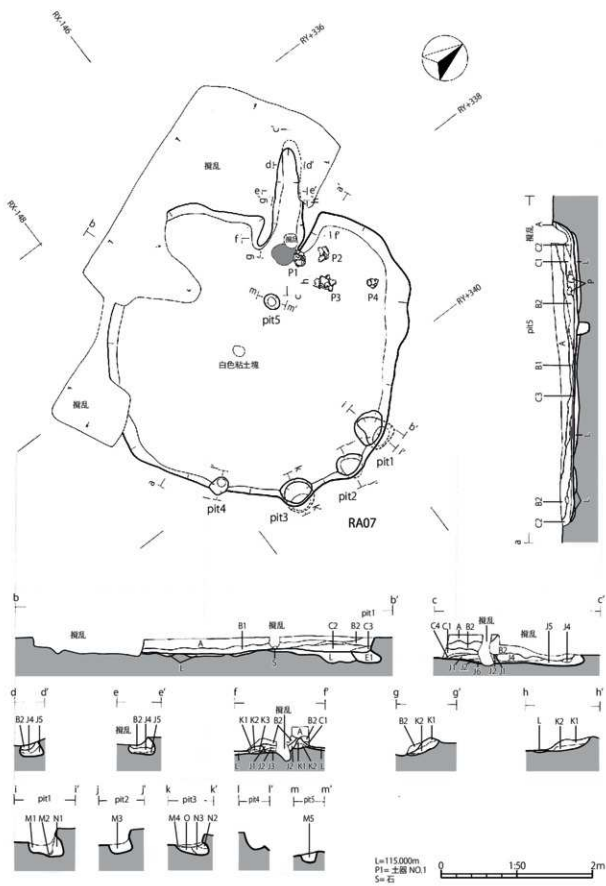
第6図 RA04 竪穴建物跡



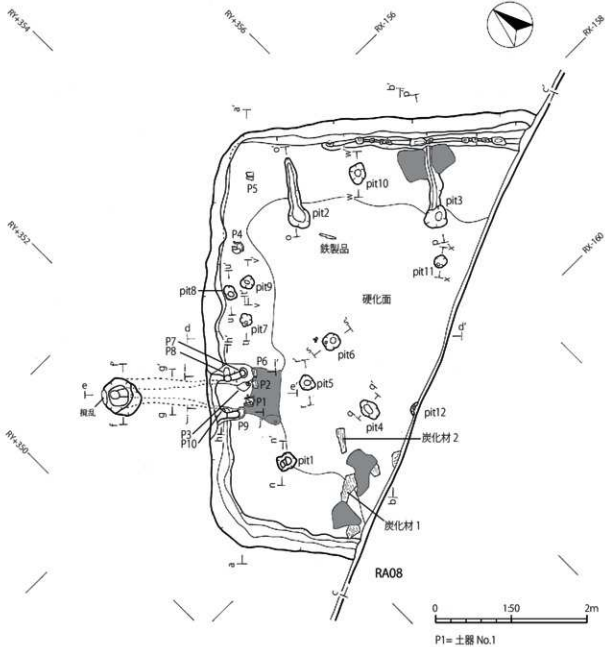
第7图 RA05 竖穴建物跡



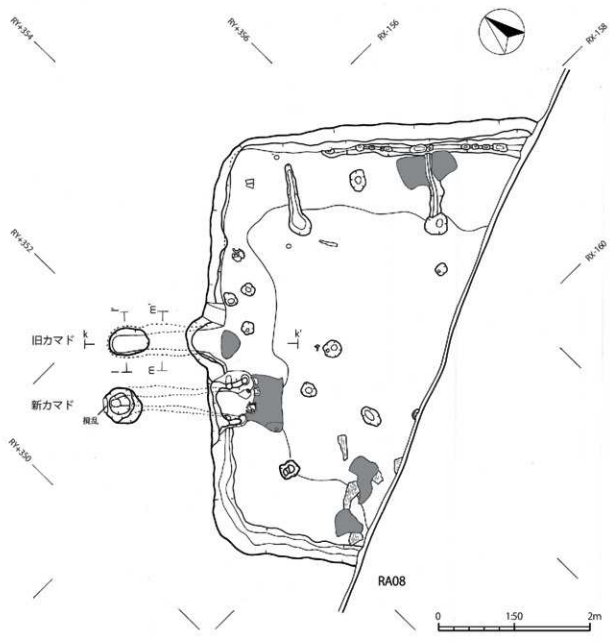
第8圖 RA06 竪穴建物跡



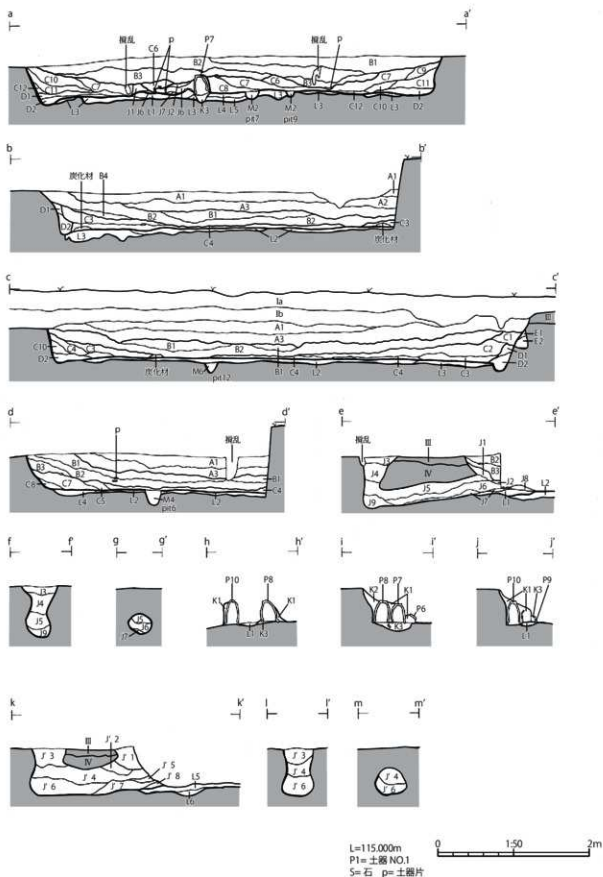
第9圖 RA07 竪穴建物跡



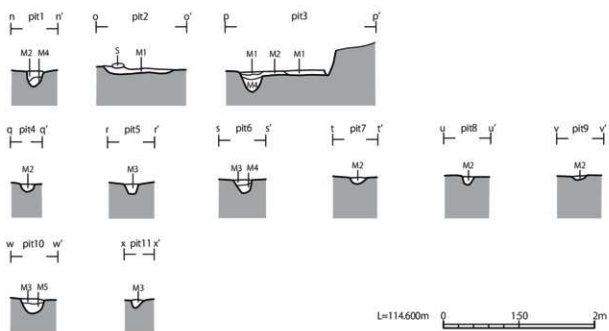
第 10 図 RA08 竪穴建物跡 (1)



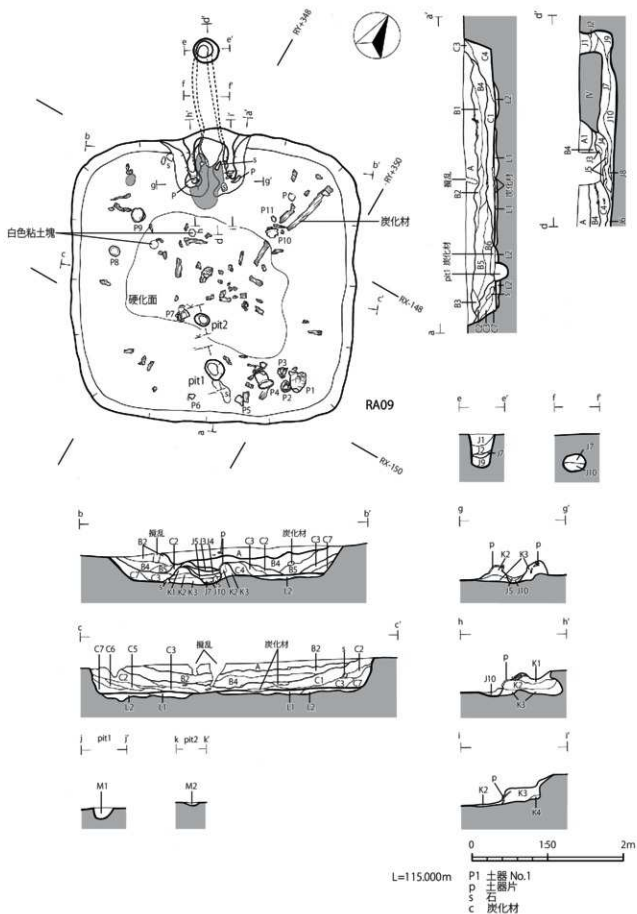
第10図 RA08 竈穴建物跡(2)



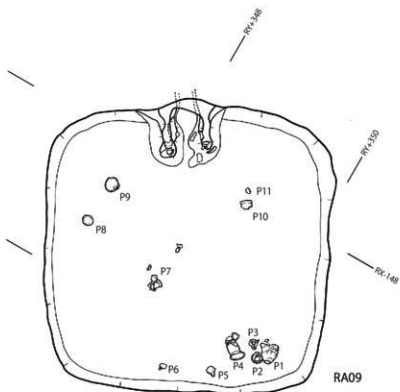
第 12 図 RA08 竪穴建物跡 (3)



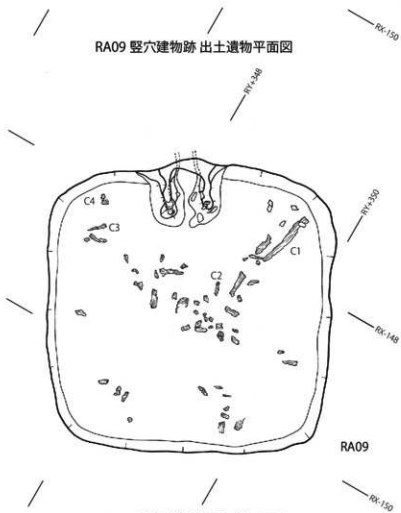
第 13 图 RA08 豎穴建物跡 (4)



第 14 图 RA09 竖穴建物跡 (1)



RA09 竪穴建物跡 出土遺物平面図

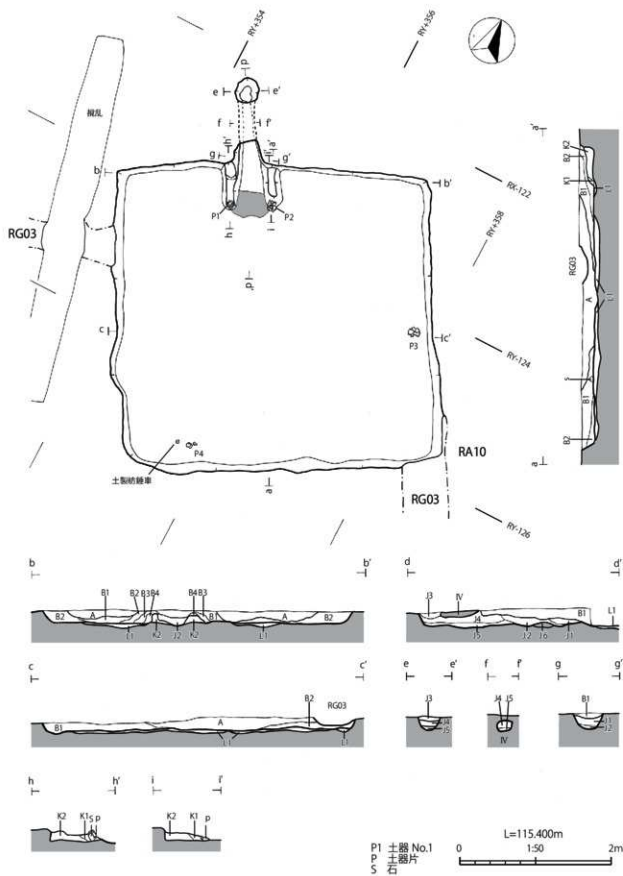


RA09 竪穴建物跡 炭化材平面図

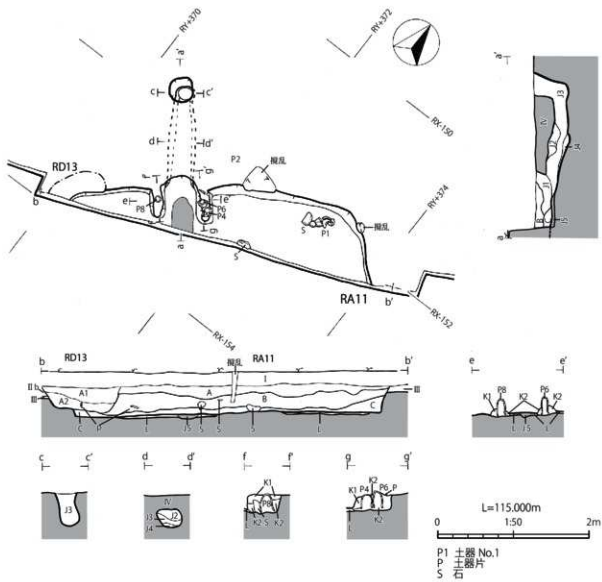
0 150 2m

P1 土器 No.1 C1 炭化材 No.1

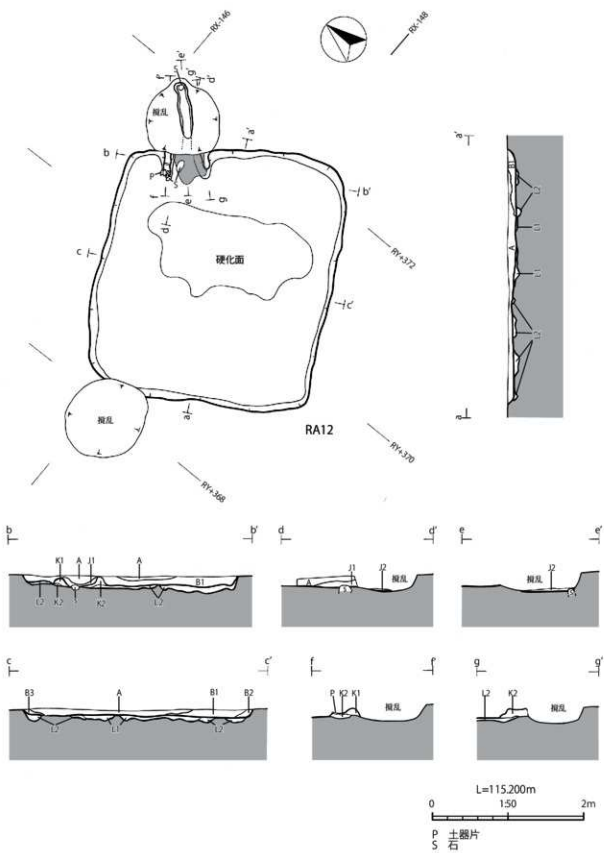
第15図 RA09 竪穴建物跡(2)



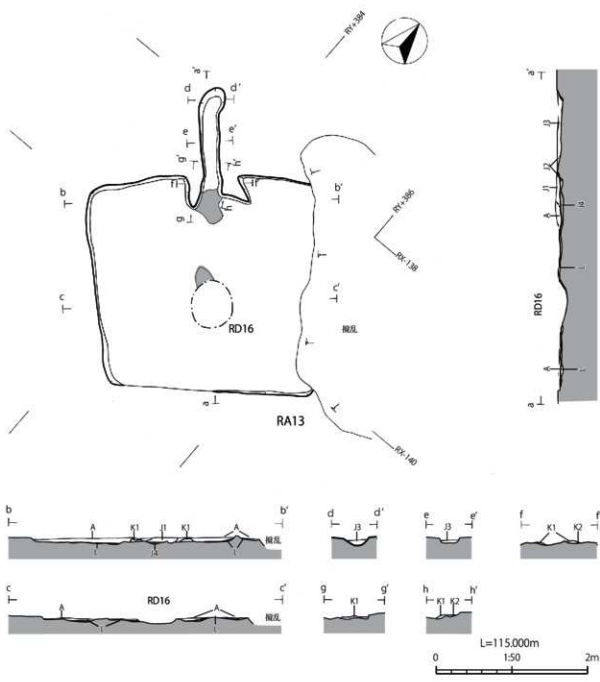
第 16 图 RA10 豎穴建物跡



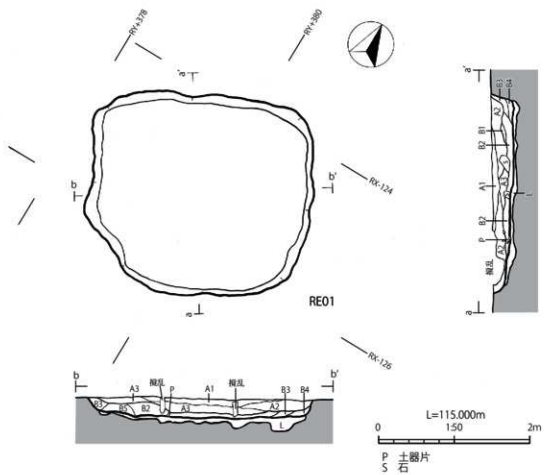
第 17 図 RA11 豎穴建物跡



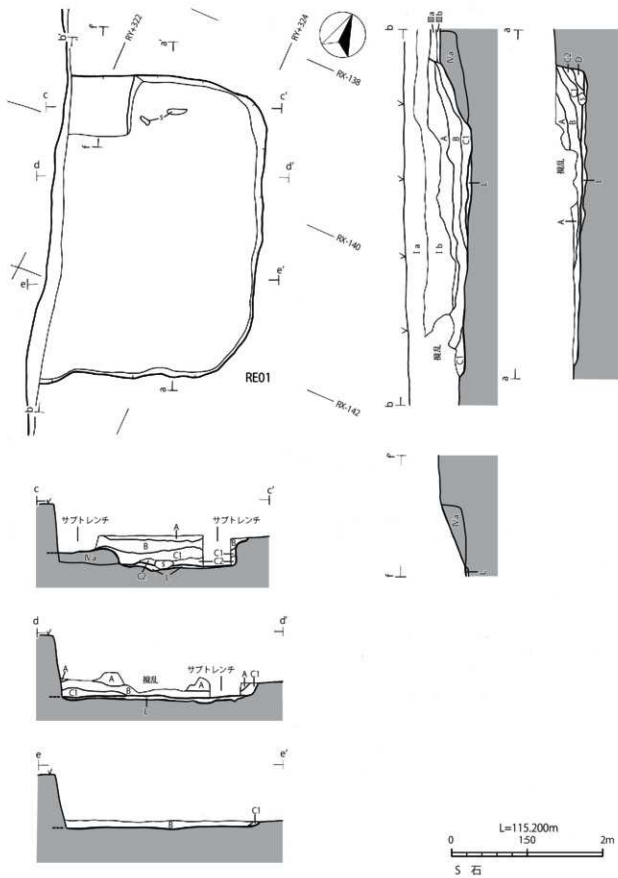
第 18 图 RA12 竖穴建物跡



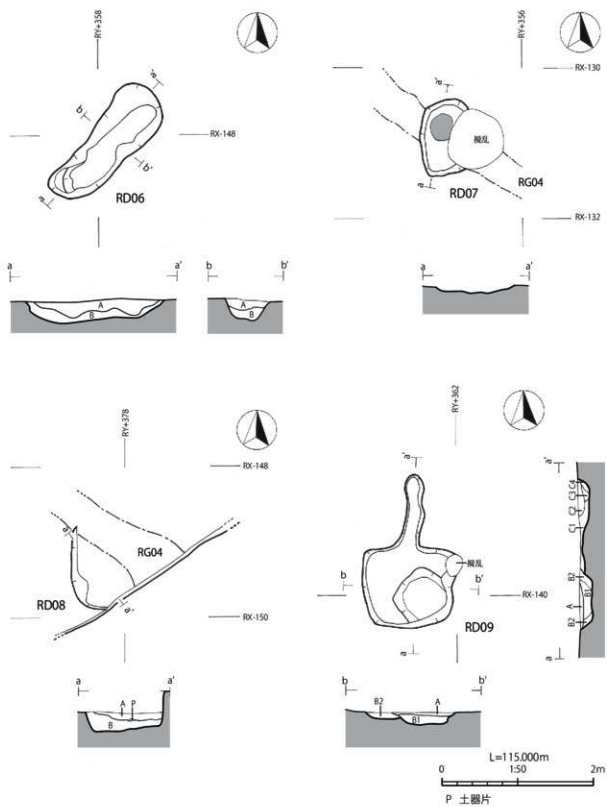
第 19 図 RA13 竪穴建物跡



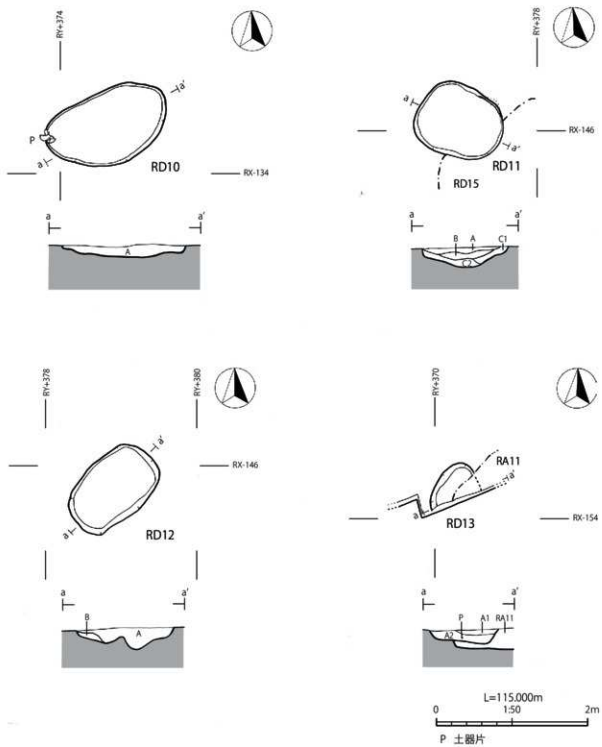
第 20 図 RE01 竖穴建物跡



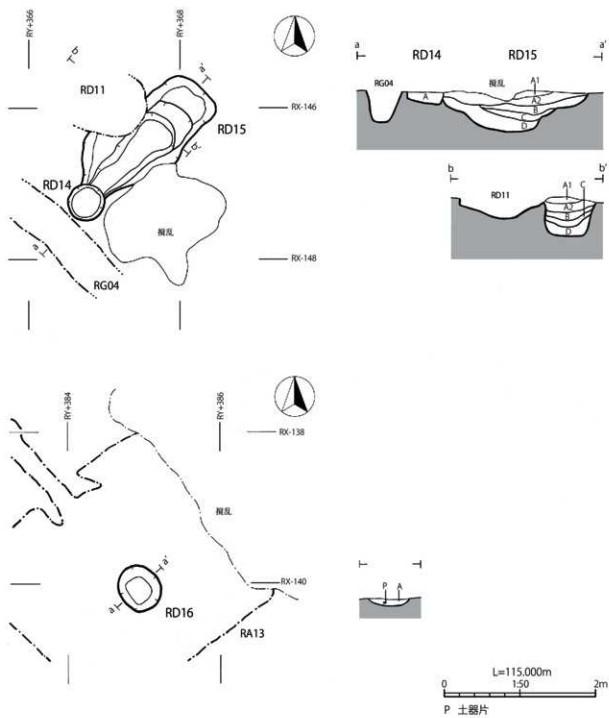
第 21 図 RE02 竪穴建物跡



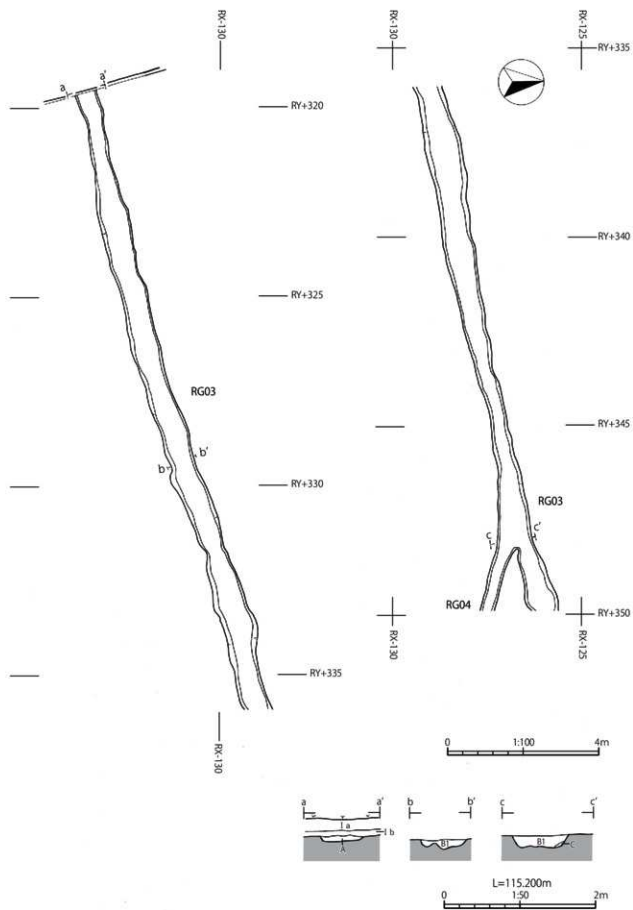
第 22 図 RD06 ~ 09 土坑



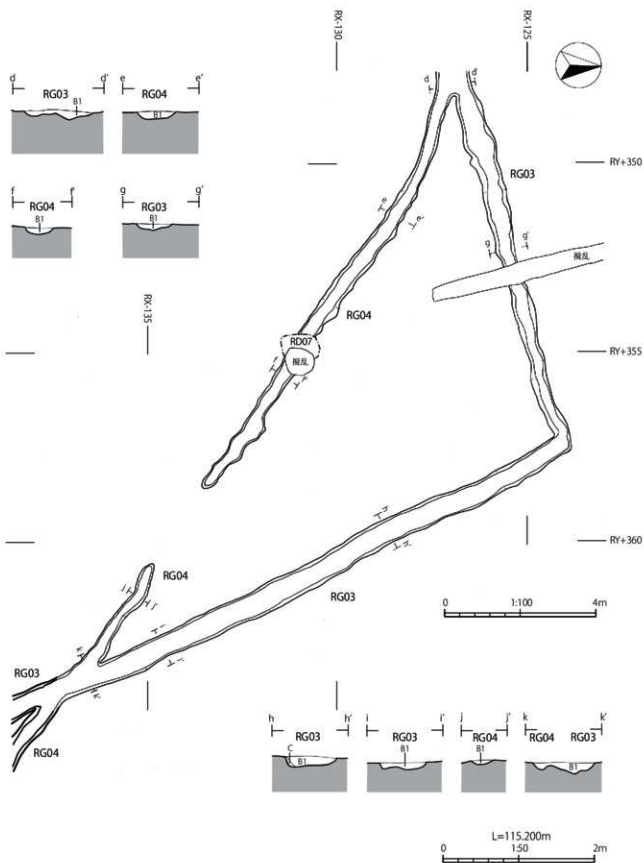
第 23 图 RD10 ~ 13 土坑



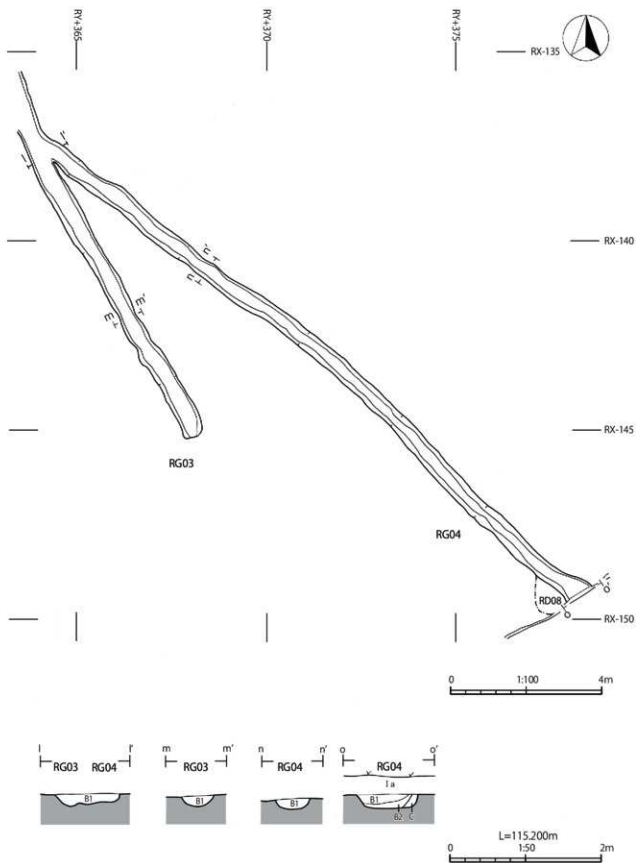
第 24 図 RD14 ~ 16 土坑



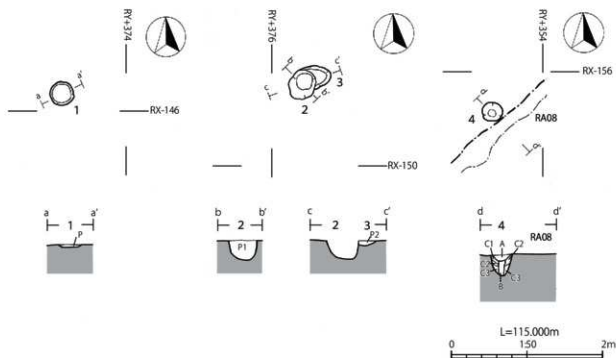
第 25 図 RG03・04 溝跡 (1)



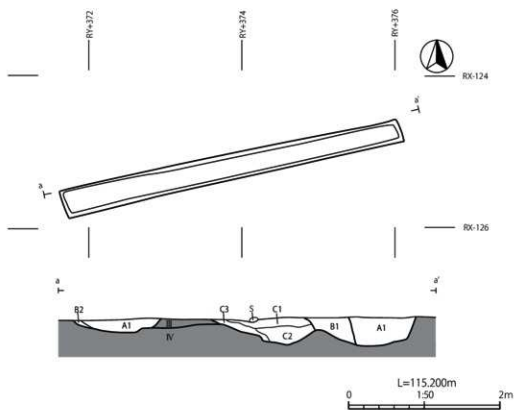
第 26 図 RG03・04 溝跡 (2)



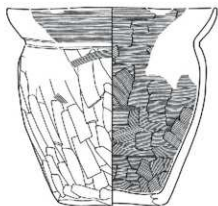
第 27 图 RG03・04 沟迹 (3)



第28図 ビット1~4



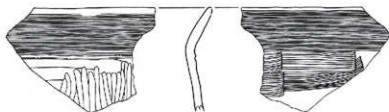
第29図 旧低地トレンチ



1 (NW-B層)



2 (NE-B層)



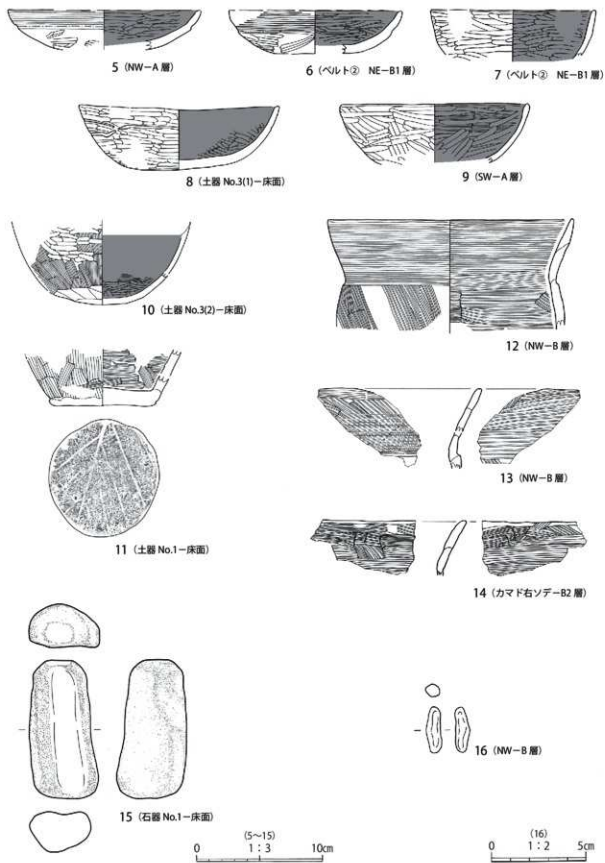
3 (NW-B層)



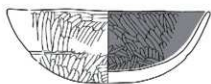
4 (ベルト①北-B層)

0 1:3 10cm

第 30 図 RA04 竪穴建物跡出土遺物



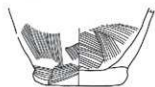
第 31 図 RA05 竪穴建物跡出土遺物



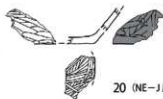
17 (検出面)



18 (検出面・A層)



19 (NE-B層)



20 (NE-J層)



21 (カマド脇 攪乱)



22 (SE-A層)



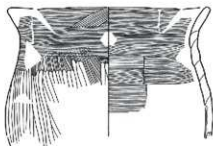
第 32 図 RA06 竪穴建物跡出土遺物



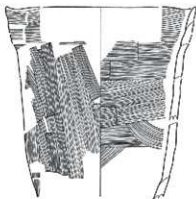
23 (カマド-J層)



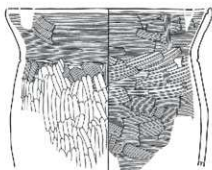
24 (カマドベルト①南-床面)



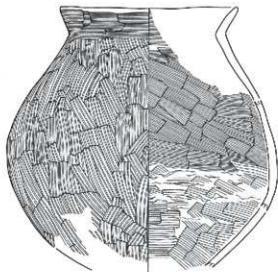
25 (土器No.1-床面)



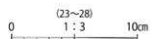
27 (カマド-J層)



26 (ベルト①南-床面)



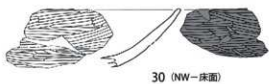
28 (土器No.2・3-床面)



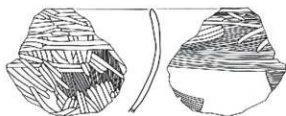
29 (カマド煙道-J層)



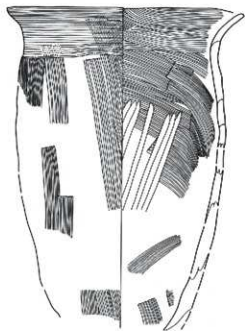
第 33 図 RA07 竪穴建物跡出土遺物



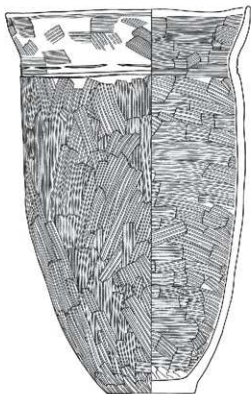
30 (NW-床面)



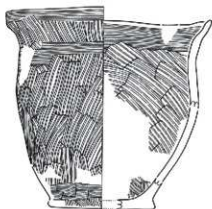
31 (ベルト②-C層)



32 (土器 No.9-K層カド芯)



33 (土器 No.10-K層カド芯)



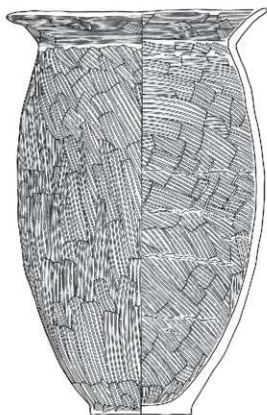
34 (土器 No.6-K層上位)



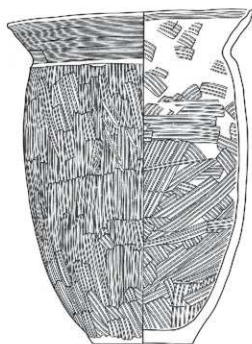
33 (土器 No.10-K層カド芯)



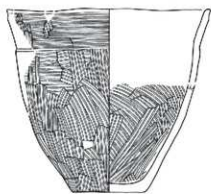
第 34 図 RA08 竪穴建物跡出土遺物 (1)



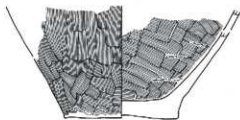
35 (土器 No.8-K層カマド芯)



36 (土器 No.7-K層カマド芯)



37 (土器 No.3-火床面)



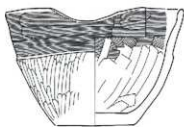
38 (土器 No.4-床面)



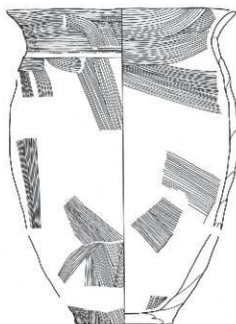
第 35 図 RA08 竪穴建物跡出土遺物 (2)



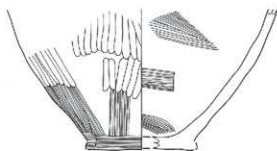
39 (土器No.1-床面)



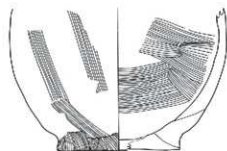
41 (カマド前-J層)



40 (NW-J層)



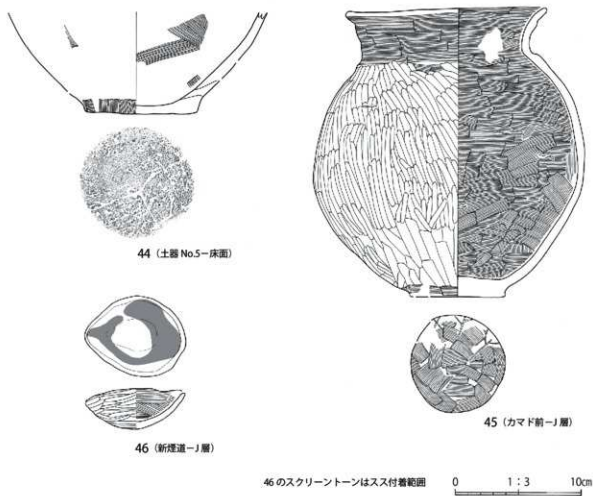
42 (カマド前-J層)



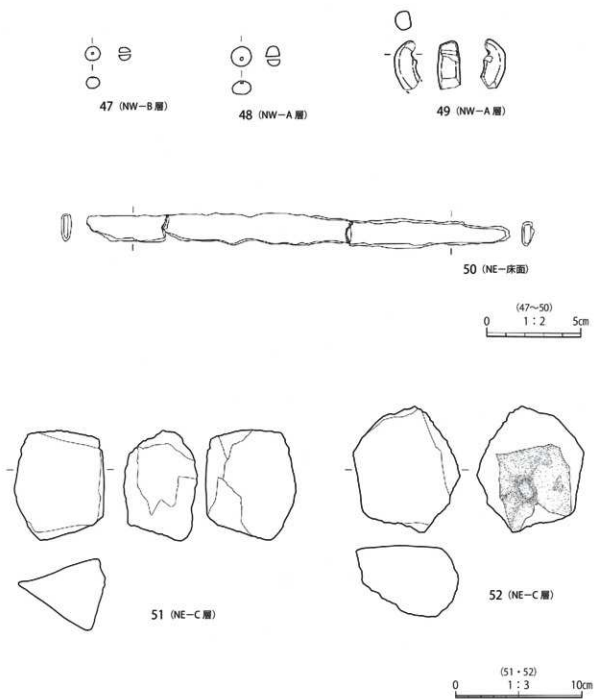
43 (NW-C層)



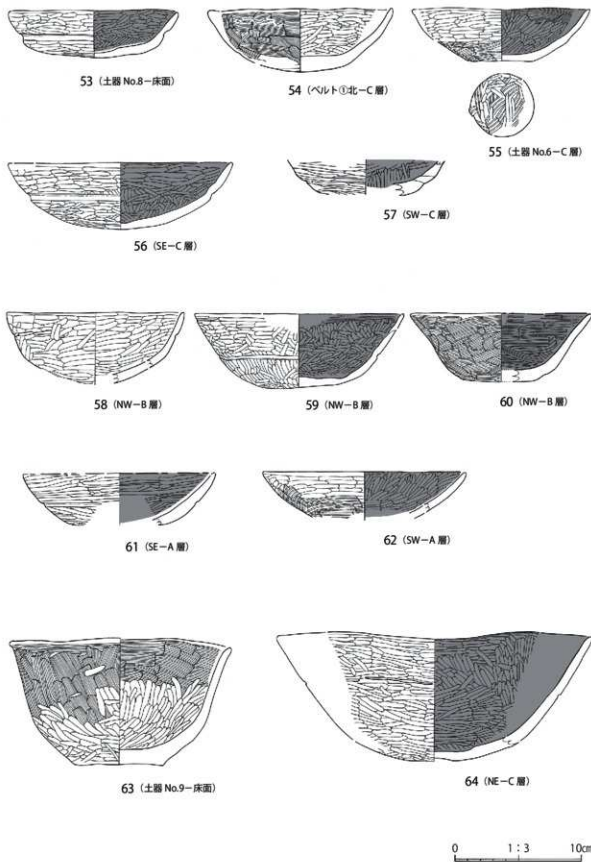
第36図 RA08 竪穴建物跡出土遺物(3)



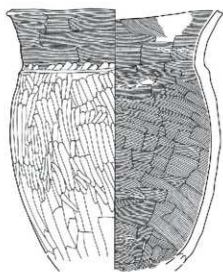
第 37 図 RA08 竪穴建物跡出土遺物 (4)



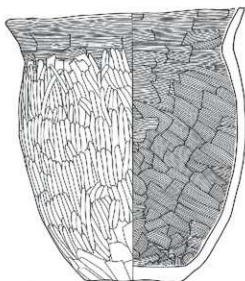
第 38 図 RA08 竪穴建物跡出土遺物 (5)



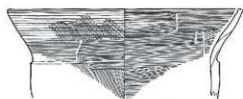
第 39 図 RA09 竪穴建物跡出土遺物 (1)



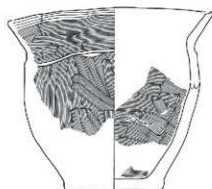
65 (土器 No.12・14・15・17-K層)



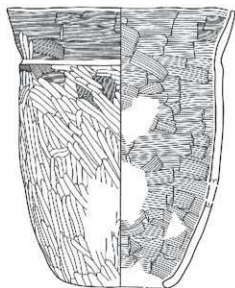
66 (土器 No.12・13・16-K層)



67 (SW-C層)



68 (SE-C層)



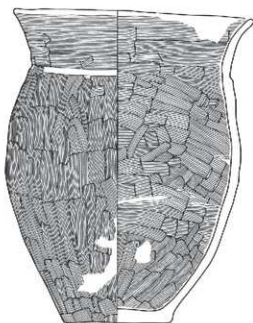
69 (カマド-C層)



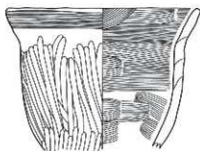
第40図 RA09 竪穴建物跡出土遺物(2)



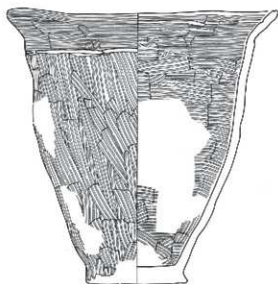
70 (土器 No.3-C層上)



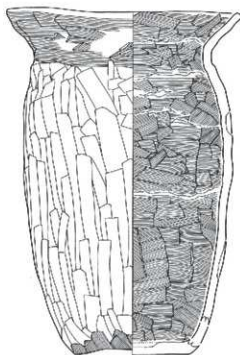
72 (土器 No.1-C層上)



71 (土器 No.5-C層上)



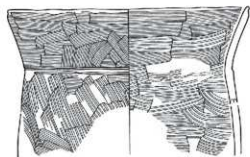
73 (土器 No.7-C層上)



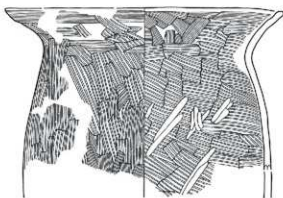
74 (土器 No.4-C層上)

0 1:3 10cm

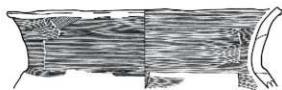
第 41 図 RA09 竪穴建物跡出土遺物 (3)



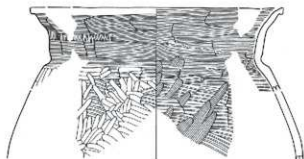
75 (土器No.10-C層上)



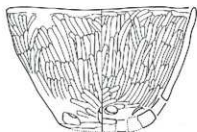
76 (NE-B層)



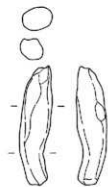
77 (NW-A層)



78 (NW煙道ベルト①西-C層上)



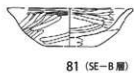
79 (土器No.2-C層上)



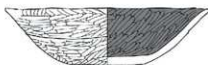
80 (カマド-J層)



第42図 RA09 竪穴建物跡出土遺物(4)



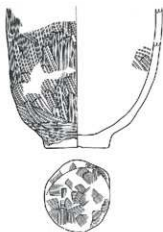
81 (SE-B層)



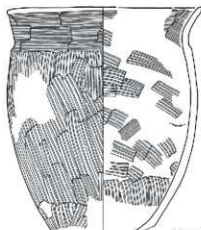
82 (土器No.3-床面)



83 (SW-床面)



84 (土器No.1-床面)

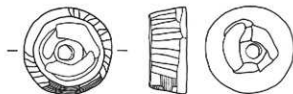


85 (土器No.2-床面)



86 (NE-床面)

0 1 : 3 10cm

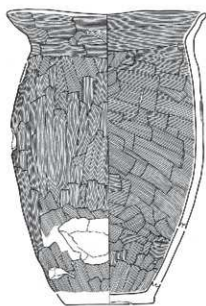


87 (SW-床面)

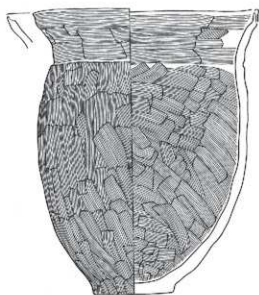


(87のみ)
0 1 : 2 5cm

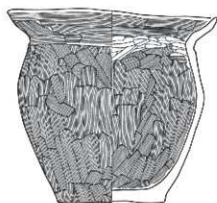
第43図 RA10 竪穴建物跡出土遺物



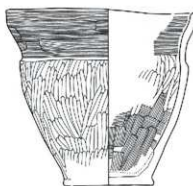
88 (土器 No.6-K層)



89 (土器 No.8-K層)



90 (土器 No.5-K層)



91 (土器 No.4-床面K層)



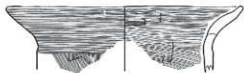
92 (土器 No.1-床面)



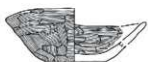
第 44 図 RA11 竪穴建物跡出土遺物



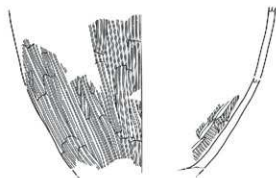
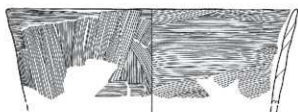
93 (RA12-NE-A層)



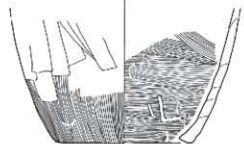
94 (RA12-土器No.1-K層)



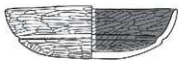
95 (RE01-ベルト②NW-B層)



96 (RE01-SE-B層)



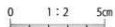
97 (RE01-NE-B層)



98 (RD10-A層)



99 (RX-122, RY+388-横出面)



第45図 RA12・RE01 竪穴建物跡, RD10 土坑, 検出面 出土遺物

第4章 科学分析・保存処理

※第4章中の(遺構番号)は、調査時の遺構番号。

1 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadize・黒沼保子

(1) はじめに

盛岡市の荒屋遺跡第5次調査で出土した炭化材について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。なお、同じ試料を用いて樹種同定も行われている(樹種同定の項参照)。

(2) 試料と方法

試料は、RA04(RA01)堅穴建物跡の床面と、RA08(RA05)堅穴建物跡の床面および旧カマド火床面整地土、RA09(RA06)堅穴建物跡のC層、RD15(RD11)土坑のB層から出土した炭化材、合計5点である。試料は、いずれも最終形成年輪が残存しておらず、部位不明であった。なお、調査所見から、RA04(RA01)堅穴建物跡とRA08(RA05)堅穴建物跡、RA09(RA06)堅穴建物跡は奈良時代、RD15(RD11)土坑は奈良時代以降と推測されている。測定試料の情報、調製データは第10表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製1.5SDH)を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

第10表 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ (調査時遺構番号)	試料データ	前処理
PLD-41808	遺構: RA04(RA01) 堅穴建物跡 層位: 床面 資料 No. 1	種類: 炭化材(コナラ属コナラ節) 試料の性状: 最終形成年輪以外、部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-41809	遺構: RA08(RA05) 堅穴建物跡 層位: 床面 資料 No. 2	種類: 炭化材(コナラ属コナラ節) 試料の性状: 最終形成年輪以外、部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-41810	遺構: RA08(RA05) 堅穴建物跡 位置: 旧カマド火床面整地土 層位: L3層 資料 No. 3	種類: 炭化材(コナラ属コナラ節) 試料の性状: 最終形成年輪以外、部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-41811	遺構: RA09(RA06) 堅穴建物跡 層位: C層 資料 No. 4	種類: 炭化材(コナラ属コナラ節) 試料の性状: 最終形成年輪以外、部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-41812	遺構: RD15(RD11) 土坑 層位: B層 資料 No. 5	種類: 炭化材(コナラ属コナラ節) 試料の性状: 最終形成年輪以外、部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)

(3) 結果

第 11 表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、暦年較正結果を、第 46 図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.27% であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal 4.4 (較正曲線データ: IntCal20) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.27% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.45% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

第11表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-41808 資料No. 1	-26.34 \pm 0.30	1280 \pm 21	1280 \pm 20	679-707 cal AD (31.01%) 725-749 cal AD (24.32%) 758-768 cal AD (10.61%) 771-773 cal AD (2.32%)	671-774 cal AD (95.45%)
PLD-41809 資料No. 2	-28.06 \pm 0.22	1361 \pm 20	1360 \pm 20	651-666 cal AD (68.27%)	643-679 cal AD (93.13%) 751-758 cal AD (2.32%)
PLD-41810 資料No. 3	-28.14 \pm 0.23	1284 \pm 20	1285 \pm 20	677-706 cal AD (33.04%) 727-729 cal AD (1.76%) 737-752 cal AD (15.75%) 757-773 cal AD (17.72%)	671-709 cal AD (39.41%) 711-774 cal AD (56.04%)
PLD-41811 資料No. 4	-28.02 \pm 0.23	1306 \pm 20	1305 \pm 20	667-686 cal AD (26.56%) 742-762 cal AD (29.83%) 764-772 cal AD (11.88%)	660-706 cal AD (45.74%) 726-773 cal AD (49.71%)
PLD-41812 資料No. 5	-28.60 \pm 0.23	1489 \pm 20	1490 \pm 20	568-602 cal AD (68.27%)	550-608 cal AD (85.83%) 621-638 cal AD (9.62%)

(4) 考察

以下、各試料の暦年較正結果のうち、 2σ 暦年代範囲（確率 95.45%）に着目して結果を整理する。

RA04(RA01) 竪穴建物跡の床面から出土した炭化材（資料 No. 1 : PLD-41808）の暦年代範囲は、671-774 cal AD (95.45%)であった。これは 7 世紀後半～8 世紀後半で、飛鳥時代～奈良時代の暦年代である。

RA08(RA05) 竪穴建物跡の床面から出土した炭化材（資料 No. 2 : PLD-41809）の暦年代範囲は、643-679 cal AD (93.13%)および 751-758 cal AD (2.32%)であった。これは 7 世紀中頃～8 世紀中頃で、飛鳥時代～奈良時代の暦年代である。また、旧カマド火床面整地土から出土した炭化材（資料 No. 3 : PLD-41810）の暦年代範囲は、671-709 cal AD (39.41%)および 711-774 cal AD (56.04%)であった。これは 7 世紀後半～8 世紀後半で、飛鳥時代～奈良時代の暦年代である。

RA09(RA06) 竪穴建物跡の C 層から出土した炭化材（資料 No. 4 : PLD-41811）の暦年代範囲は、660-706 cal AD (45.74%)および 726-773 cal AD (49.71%)であった。これは 7 世紀後半～8 世紀後半で、飛鳥時代～奈良時代の暦年代である。

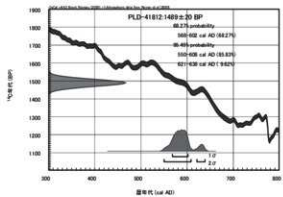
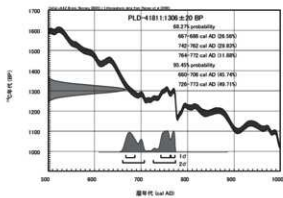
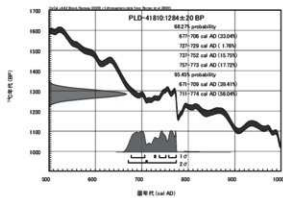
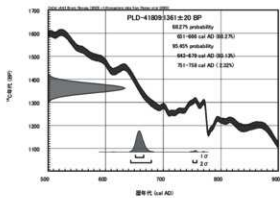
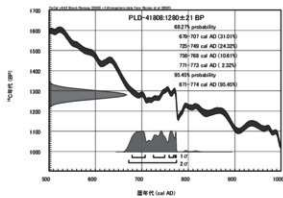
RD15(RD11) 土坑の B 層から出土した炭化材（資料 No. 5 : PLD-41812）の暦年代範囲は、550-608 cal AD (85.83%)および 621-638 cal AD (9.62%)であった。これは 6 世紀中頃～7 世紀前半で、古墳時代後期～飛鳥時代の暦年代である。

RA04(RA01) 竪穴建物跡と RA08(RA05) 竪穴建物跡、RA09(RA06) 竪穴建物跡は調査所見によれば奈良時代と推定されており、今回の年代測定の結果は整合的であった。一方で、RD15(RD11) 土坑の炭化材の年代測定結果は古墳時代後期～飛鳥時代の暦年代であり、推定時期である奈良時代以降よりも 70 年以上古い暦年代を示した。

なお、木材は最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回測定を行った試料は、いずれも最終形成年輪が残存しておらず、残存している最外年輪のさらに外側にも年輪が存在していたはずである。したがって、木材が実際に枯死もしくは伐採されたのは、測定結果の年代よりもやや新しい時期であったと考えられる。RD15(RD11) 土坑の資料 No. 5 (PLD-41812) が古い暦年代を示したのは、古木効果の影響による可能性がある。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62(4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)



第 46 図 曆年較正結果

2 荒屋遺跡出土炭化材の樹種同定

黒沼保子（パレオ・ラボ）

(1) はじめに

盛岡市の荒屋遺跡第5次調査で出土した炭化材の樹種同定を行った。なお、同じ試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている（放射性炭素年代測定の項参照）。

(2) 試料と方法

試料は、奈良時代の竪穴建物跡であるRA04(RA01)竪穴建物跡、RA08(RA05)竪穴建物跡、RA09(RA06)竪穴建物跡から出土した炭化材計4点と、奈良時代以降と推定されている土坑RD15(RD11)から出土した炭化材1点の、合計5点である。放射性炭素年代測定の結果、RA04(RA01)竪穴建物跡、RA08(RA05)竪穴建物跡、RA09(RA06)竪穴建物跡出土の炭化材は飛鳥～奈良時代、土坑RD15(RD11)出土の炭化材は古墳時代後期～飛鳥時代の暦年代を示した（放射性炭素年代測定の項参照）。

樹種同定に先立ち、肉眼観察と実体顕微鏡観察による形状の確認と、残存年輪数および残存径の計測を行った。その後、カミソリまたは手で3断面（横断面・接線断面・放射断面）を割り出し、試料台に試料を両面テープで固定した。次に、イオンスバツタで金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE社製 VHX-D510）を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

(3) 結果

樹種同定の結果、試料はいずれも広葉樹のコナラ属コナラ節であった。結果を第12表に示す。

第12表 樹種同定結果

資料番号	遺跡	遺構	位置	平面 図面番号	層位	サイズ(mm) 長×幅×厚	樹種	木取り	年代測定 番号
1	荒屋遺跡	RA04(RA01) 竪穴建物跡		炭 No.1	床面	24×20×19	コナラ属コナラ節	みかん割り状	PLD- 41808
2	荒屋遺跡	RA08(RA05) 竪穴建物跡		炭 No.3	床面	43×18×0.9	コナラ属コナラ節	不明	PLD- 41809
3	荒屋遺跡	RA08(RA05) 竪穴建物跡	旧カマド火床面整地土		L3層	11×0.6×0.8	コナラ属コナラ節	不明	PLD- 41810
4	荒屋遺跡	RA09(RA06) 竪穴建物跡		炭 No.2	C層	39×32×19	コナラ属コナラ節	みかん割り状	PLD- 41811
5	荒屋遺跡	RD15(RD11)土坑			B層	26×17×0.9	コナラ属コナラ節	不明	PLD- 41812

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、走査型電子顕微鏡写真を図版に示す。

(1) コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版 1a-1c (No. 1)、2a-2c (No. 2)、3a-3c (No. 3)、4a-4c (No. 4)、5a-5c (No. 5)

大型の道管が年輪のはじめに1列程度並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織の2種類がある。

コナラ節は暖帯から温帯下部に分布する落葉高木で、カシワとミズナラ、コナラ、ナラガシワがある。材は全体的に重硬で、加工困難である。

(4) 考察

今回樹種同定を行った RA04(RA01)堅穴建物跡と RA08(RA05)堅穴建物跡、RA09(RA06)堅穴建物跡から出土した炭化材計 4 点と、RD15(RD11)土坑から出土した炭化材 1 点は、いずれもコナラ属コナラ節であった。RA04(RA01)堅穴建物跡出土の資料 No. 1 と RA08(RA05)堅穴建物跡の資料 No. 2、RA09(RA06)堅穴建物跡出土の資料 No. 4 は建築部材、RA08(RA05)堅穴建物跡の旧カマド火床面整地土出土の資料 No. 3 は燃料材と推測される。RD15(RD11)土坑出土の資料 No. 5 は用途不明である。

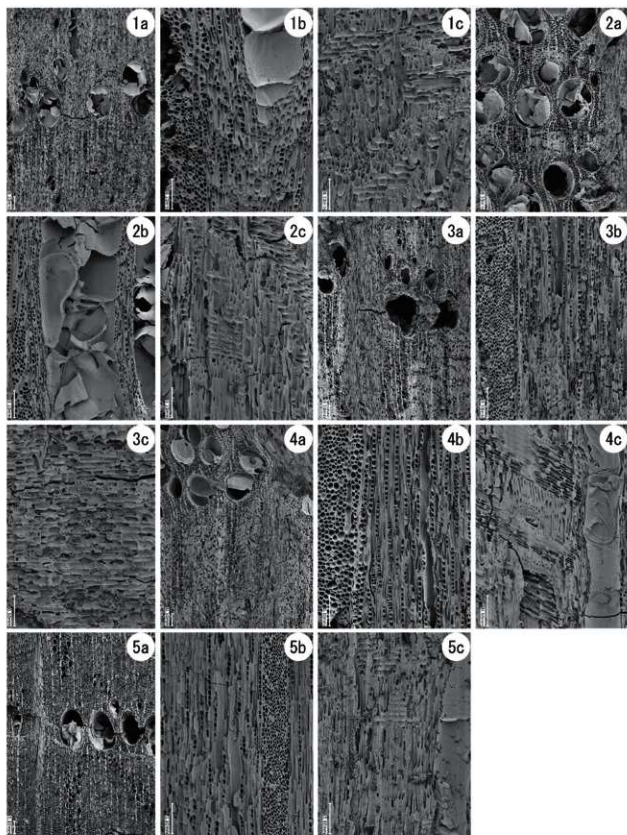
コナラ節は日当たりの良い二次林などによく生育する。材は重硬で、建築部材や器具材など多用途に利用されるほか、燃料材としては火持ちが良い(伊東・山田編, 2012)。

【引用・参考文献】

平井信二(1996)木の大本科, 394p, 朝倉書店。

伊東隆夫・山田昌久編(2012)木の考古学—出土木製品用材データベース—, 449p, 海青社。

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂(2011)日本有用樹木誌, 238p, 海青社。



第2図版 炭化材の走査型電子顕微鏡写真

1a-1c. コナラ属コナラ節 (No. 1)、2a-2c. コナラ属コナラ節 (No. 2)、3a-3c. コナラ属コナラ節 (No. 3)、
4a-4c. コナラ属コナラ節 (No. 4)、5a-5c. コナラ属コナラ節 (No. 5)

a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

3 荒屋遺跡出土鉄製品の保存処理

株式会社パレオ・ラボ

(1) 保存処理遺物一覧

処理 No	遺物種類	材質	法量 (cm・g)				
			処理	現存長	最大幅	最大厚	重量
1	刀子	鉄	前	22.00	1.68	0.78	33.30
			後	21.80	1.66	0.97	36.30
2	刀子	鉄	前	6.58	1.67	0.67	6.40
			後	6.58	1.41	0.67	7.40

(2) 遺物の所見

以下に処理番号と遺物番号を併記して、保存処理過程で得られた所見を記す。

1、2は刀子である。

1は錆化しきって芯部が空洞化する。表面は土砂が覆って鉱物化がすすみ、メタルは残存しない。2は複数の錆こぶができ、芯部は空洞化する。

(3) 処理工程

工程は以下の順で行った。

- (1)資料確認及び記録(写真撮影)→(2)X線透過写真撮影→(3)クリーニング・脱塩処理→
- (4)減圧乾燥→(5)アクリル樹脂含浸→(6)整形(接合)→(7)アクリル樹脂塗布→
- (8)整形(補彩・仕上げ)→(9)処理後写真→(10)処理後記録

(3-1) 資料確認及び記録(写真撮影)

処理前の遺物の状態を記録するため、遺物1点ごとに表裏1カットずつ、フルサイズ一眼レフデジタルカメラを使用して写真撮影を行った。また、処理前の法量を記録した。

(3-2) X線透過写真撮影

X線透過検査装置(リガク製ラジオフレックス200EGM2)を使用して遺物の透過写真を撮影し、肉眼では判別できない遺物の輪郭やひび割れの有無、密度状態を調査した。撮影条件は管電圧:80~100kV、管電流:5mA、照射時間:30秒間、照射距離:0.75mである。撮影媒体にはイメージングプレート(富士フィルム製ST-VI)を使用し、IPスキャナー(リガク製CR-1012)で25 μ mピッチで読み取った。

(3-3) クリーニング・脱塩処理

デザインナイフ、精密グラインダー(リューター)などを併用し、付着した泥土と不要な錆の除去を行った。またエタノール・キシレン・酢酸エチルを2:2:1の割合で混合した洗浄液で錆や汚れを洗浄した。

鉄製品の脱塩処理はアルカリ水溶液法で行った。純水に水酸化リチウム0.25%(0.1mol/L)を溶かして、pH12前後に調整した脱塩溶液を使用した。定期的に溶液交換とイオン濃度測定を行った。脱塩処理の終了点は、

溶出した塩化物イオンの測定値が1リットルあたり10mg(濃度換算10ppm)以下を目安とした*1。塩化物イオン、硫酸イオンの測定には、Dionex Aquion(サーモフィッシャーサイエンティフィック社製)を使用した(PL.1)。

脱塩処理は672時間(28日間)行った。最終的な塩化物イオン濃度は1リットルあたり1.74mg/L、硫酸イオン濃度は1リットルあたり7.47mg/Lである(PL.2,3)。

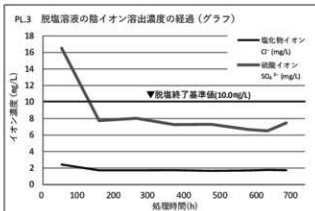
脱塩処理後、脱アルカリ処理として純水を適宜交換しながら24時間浸漬し、脱水処理としてエタノールに24時間浸漬した。

PL.1 測定条件

陰イオン(アニオン)測定			
分離カラム	IonPacAS12A-SC 4mm	試料注入量	5mL (オートサンプラー、5mLバイアル 使用、1.5mL/1回注入)
ガードカラム	IonPacAG12A-SC 4mm		
溶離液	炭酸ナトリウム 2.7mmol/L 炭酸水素ナトリウム 0.3mmol/L	サブレッサ	Dionex ERS 500 サブレッサ アニオンオートサブレッサ リサイクルモード
溶離液流量	1.5mL/min		
試料導入量	25 μ L		

PL.2 脱塩溶液の陰イオン溶出濃度の経過(表)

測定回数	処理時間(h)	塩化物イオン Cl ⁻ (mg/L)	硫酸イオン SO ₄ ²⁻ (mg/L)
開始	0	-	-
1	96	2.43	16.51
2	168	1.72	7.75
3	264	1.73	8.03
4	336	1.74	7.26
5	432	1.67	7.30
6	504	1.71	6.66
7	600	1.78	6.51
8	672	1.74	7.47



(3-4) 減圧乾燥

脱塩処理後は減圧乾燥を行った。乾燥後に除去可能な錆をクリーニングした。

(3-5) アクリル樹脂含浸

鉄製品にはアクリル樹脂バラロイドNAD-10 30%ソルベントナフサ溶液を使用した。初回は0.1mPa以下で6時間減圧して18時間静置し、取り出し後7日間風乾を行った。2回目・3回目は1時間減圧して2時間静置し、取り出し後はキシレンで余分な樹脂を除いて60℃24時間の加熱乾燥を行った。

(3-6) 整形（接合）

1はエポキシ樹脂系接着剤を用いて接合した。接合部の隙間やクラックには接着剤に充填材フェノールマクロバルーンやエロジールを混練したものをを用いて補填した。

(3-7) アクリル樹脂塗布

表面保護を強固にするため、減圧含浸に使用した溶液を3～6倍希釈して3度塗布含浸した。1回塗布ごとに風乾を行った。

(3-8) 整形（補彩・仕上げ）

樹脂部分は成形後、アクリルガッシュで周囲と違和感のない程度に補彩した。樹脂の光沢が目立つ遺物には、表面につや消しのアクリル樹脂スプレーを1～2度噴霧した。最後に60℃24時間の加熱乾燥を行って処理完了とした。

(3-9) 処理後写真

処理前の遺物の状態を記録するため、遺物1点ごとに表裏1カットずつ、フルサイズ一眼レフデジタルカメラを使用して写真撮影を行った。

(3-10) 処理後記録

処理後の法量を記録した。

*1) 松井敏也 2009年「出土鉄製品の保存と対応」同成社

(4) 各工程に使用した薬剤と使用条件

使用工程	種類	品名	使用条件
クリーニング	溶剤	エタノール (和光純薬工業)	エタノール・キシレン・酢酸エチルを2:2:1の割合で混合した洗浄液で錆や汚れを洗浄した。
	溶剤	キシレン (和光純薬工業)	
	溶剤	酢酸エチル (和光純薬工業)	
	アクリル樹脂	バラロイド B-72 (Rohm&Haas)	アセトンに10%濃度で溶かしたものを、ひび割れの保護のために塗布。
	溶剤	アセトン (和光純薬工業)	
脱塩処理・安定化処理	アルカリ薬剤	水酸化リチウム (和光純薬工業)	鉄製品の脱塩処理に使用。純水に0.25%濃度(0.1mol/L)で溶かし、pH12前後に調整して38日間脱塩処理に使用。
樹脂含浸・塗布	アクリル樹脂	バラロイド NAD-10 (Rohm&Haas)	ソルベントナフサに30%濃度で溶かしたものを含浸に使用。減圧0.1MPa以下2時間、常圧2時間静置。含浸回数2回。
	溶剤	ソルベントナフサ SN-1 (和光純薬工業)	
接合・充填・補彩	エポキシ接着剤	ボンド クイック 5 (コニシ)	遺物の接合、欠損部の充填・復原に使用。
	充填材	フェノールマイクロバルーン (三恒商事)	欠損箇所への補填に使用。
	アクリル絵の具	アクリラガッシュ (ホルベイン)	補填部の古色付けに使用。
	つや消し塗料	アスペン ラッカーズブレー つや消しクリヤ (アサヒペン)	アクリル樹脂の透明・つや消しスプレー。表面処理として2度噴霧した。



保存処理作業工程写真

1. X線透過写真撮影
2. 資料確認及び記録（写真撮影）
3. クリーニング
4. 脱塩処理
5. アクリル樹脂含浸
6. 整形（接合）
7. 整形（補彩・仕上げ）

第3図版 鉄製品保存処理作業工程写真



保存処理前写真



保存処理後写真

第4図版 処理 No.1 鉄製品 保存処理前・後写真
(RA08 聖穴建物跡出土 刀子)



保存処理前写真



保存処理後写真

第5図版 処理No.2鉄製品 保存処理前・後写真
 (RA07 堅穴建物跡出土 刀子)



第6図版 鉄製品 X線写真

第5章 第3次調査概要

1 経過

平成10年7月21日付で共同住宅建築に伴う発掘届の提出があり、同9月2日に試掘調査を実施したところ、竪穴建物跡と溝跡を検出し土師器数点の出土があった。協議の結果、事業主費用負担による発掘調査を実施することになり、同年10月5日から同20日に1,268㎡を対象に本調査を実施した。

この調査の図面や調査所見などの記録は、平成11年12月の盛岡市文化財調査室火災で罹災した。残存資料を基に概要を報告する。出土土器は別施設に保管されていたため無事であった。写真は罹災したが、救出された白黒フィルムベタ焼きから復元した。第5次調査隣接地であり遺跡の理解のため概要を報告する。

2 成果 (第47～50図・第25図版)

(1) 概要

遺構検出面は表土直下の暗褐色～褐色土層である。竪穴建物跡3棟 (RA01～03)、土坑5基 (RD01～05)、溝跡2条 (RG01・02)、遺物包含層1ヶ所を検出し、土師器、土製勾玉、土製紡錘車が出土した。調査区南端には、遺物包含層を形成する東西に伸びる自然低地が広がり、遺跡の南端に当たると考えられる。

(2) 遺構 (第47図・第25図版)

① 竪穴建物跡 (RA01～03)

RA01は、南北6.2m、東西約7.0mの方形を呈する大型の竪穴建物跡である。カマドは北辺につく。炭化材が出土していることから、焼失したものと考えられる。南辺中央内側のビットから、南の自然低地へ延びるRG01溝跡と接続し、排水施設と考えられる。RA02は、南北約4.0m、東西約4.5mの方形を呈する中型の竪穴建物跡である。RA03は一辺約4.5mの竪穴建物跡である。南辺のみの検出で、詳細は不明である。出土遺物や遺構形態から、いずれも8世紀後半のものと考えられる。

② 土坑 (RD01～05)

5基の土坑を検出した。竪穴建物跡と同時期の8世紀後半のものと考えられるが、詳細は不明。

③ 溝跡 (RG01～02)

RG01は、幅50cmほどの溝跡で、全長9.5mほどを検出した。RA01竪穴建物跡の南辺内側のビットから、南の自然低地に延びることから、竪穴建物跡内部からの排水施設と考えられる。RA01竪穴建物跡と同時期の8世紀後半のものと考えられる。

RG02は幅80cm前後、全長19mほどを検出した。調査区南部に東西に延びる。時期や用途は不明である。

④ 遺物包含層

調査区南端部に東西に延びる自然低地を検出した。遺物包含層を形成している。遺物は竪穴建物跡と同じ8世紀後半代のものである。当該期集落の南端部と推測される。

(3) 遺物 (第13表・第48～50図・第25図版)

プラスチックコンテナ3箱の出土遺物がある。土器はすべて土師器である。結果報告文書には、紡錘車が出土した記載が見えるが、盛岡市文化財調査室の火災により滅失したと考えられる。

土師器坏は、丸底を主体としつつも、体部外面の段が不明瞭であり、内面には段が認められない。器面調整は、ヘラミガキ、内面黒色処理が主体である。土師器甕は、最大径が口縁部にあり、口縁部は直立気味に緩く外反して立ち上がり、底部内面は平底化している。器面調整は、ヘラナデを主体に、ハケメ、ヘラミガキ整形がみられる。球胴甕は、体部中程に最大径があり、器面はヘラミガキの調整が認められる。8世紀後半の年代が考えられる。

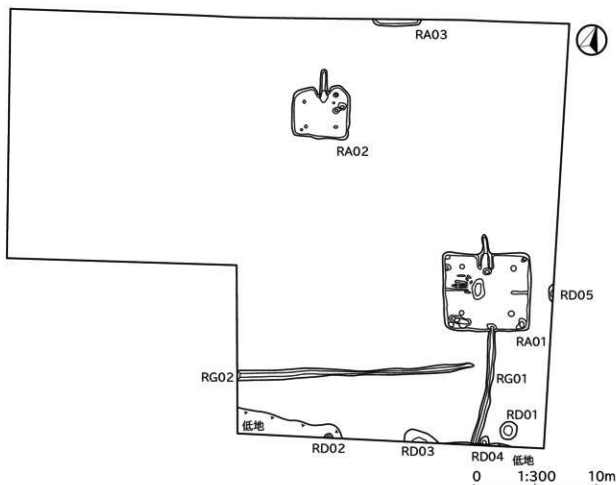
3 まとめ

本調査区内から3棟の堅穴建物跡、5基の土坑、2条の溝跡、1ヶ所の遺物包含層を検出した。

出土遺物の様相からすべて8世紀代のものと考えられる。南辺部が低地に入ることから、遺跡の南端に当たる。周辺地域も含めた8世紀代の堅穴建物跡の出土状況から、3棟の堅穴建物跡のうち、RA01は6mを超える大型、RA02、RA03は3m中型に分類される。

RA01の南辺部から南へ溝跡が低地に向かって延びる。調査所見では、埋土の状況から堅穴建物跡内部の排水のための溝跡と考えられる。

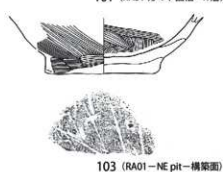
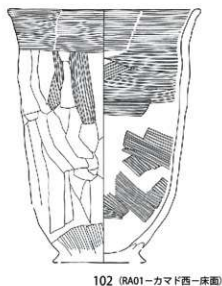
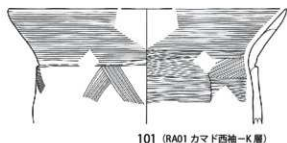
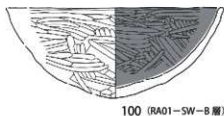
RA01とRA02の出土遺物に時期的差異は認められないことや、カマド方向はほぼ同じ方向を向いていることから、同時期の存在が想定される。当該時期の他の集落同様に、大型の堅穴建物跡1棟と中小型の堅穴建物跡が複数で一時期のムラを形成したと考えられる。



第47図 荒屋遺跡第3次調査全体図

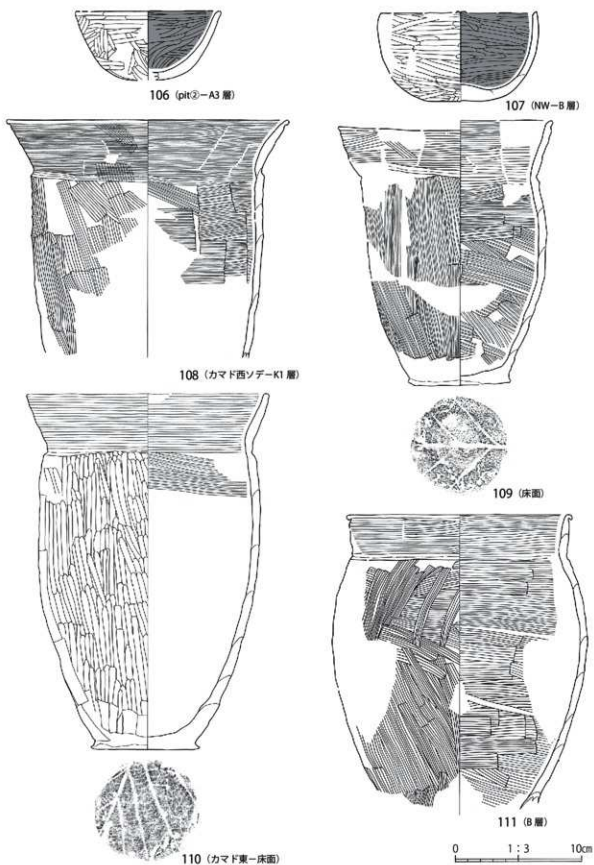
第 13 表 第 3 次調査出土遺物観察表

番号	図版	写真 図版	遺構名	台帳 番号	形態				出土				寸法 (cm)				断面調整		底面	その他
					区分	器種	位置	層位	残存	器高	口径	径深	口径	径深	断面調整					
															外面	内面				
100	48	25	RA01	土器 44	土師器	杯	SW	B	口～底	7.1	17.2				ヘラミガキ、ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理				
101	48	25		土器 2	土師器	壺	カマド西袖	K	口～体	22.0	18.1			ヨコナデ、 ハケメ→ヘラケズリ	ヨコナデ、ハケメ					
102	48	25		土器 3	土師器	壺	カマド西	床	口～底	19.9	15.2	13.6	7.4	ヨコナデ、 ハケメ→ヘラケズリ	ヨコナデ、体ハケメ					
103	48	-		土器 62	土師器	埴輪壺	NE 横 Pit	構築土	体～底				15.5	8.2	ヘラナデ	ヘラナデ	木炭痕			
104	48	25		土器 63	土師器	ヒコチュウ 杯	カマド東袖	K	体	3.9	6.0			5.0	ヘラナデ	ハケメ				
105	48	25	土製品 1	土製品	勾玉	カマド東 Pit	埋土	完形	長 4.0	幅 2.5	厚 1.2									
106	49	25	RA02	土器 33	土師器	杯	Pit2	A3	口～底	5.4	11.4				ヘラミガキ	ヘラミガキ、黒色処理				
107	49	25		土器 27	土師器	杯	NW	B	口～底	7.1	12.0				ヘラナデ→ヘラミガキ	ヘラミガキ、黒色処理				
108	49	-		土器 1	土師器	壺	カマド西袖	K1	口～体	22.4	18.3				ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ハケメ				
109	49	25		土器 7	土師器	壺		床	口～底	21.0	17.0	14.2	8.1	ヨコナデ、ハケメ	ヨコナデ、ハケメ	木炭痕				
110	49	25		土器 8	土師器	壺	カマド東	床	口～底	28.1	19.2	17.3	8.6	ヨコナデ、ヘラケズリ→ヘラ ミガキ	ヨコナデ、ハケメ	木炭痕				
111	49	25	土器 47	土師器	壺		B	口～体	17.8	20.1			ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラナデ						
112	50	-	土器 9	土師器	壺	NE	床	体～底		13.9	7.0			ヘラナデ、ヘラケズリ	ヘラナデ					
113	50	-	土器 25	土師器	壺	NE	J	体～底		20.2	10.0			ヘラケズリ	ヘラナデ、ヘラケズリ	木炭痕				
114	50	25	石器 18	土師器	埴輪壺	カマド東・ 穴床面	J	口～体	18.4	28.8				ヨコナデ、ヘラナデ、 磨部沈着	ヨコナデ、ヘラナデ					
115	50	25	土器 51	土師器	埴輪壺		B	口～底	30.9	18.8	32.6	9.7	ヨコナデ、 ヘラナデ→ヘラミガキ	ヨコナデ、ヘラナデ	ヘラナデ、 ヘラケズリ磨痕					

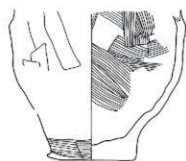


0 1:3 10cm

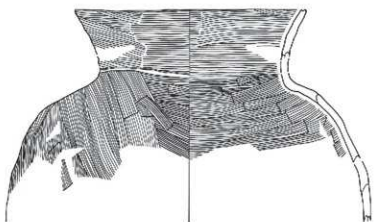
第 48 図 RA01 竪穴建物跡出土遺物



第 49 図 RA02 竪穴建物跡出土遺物 (1)



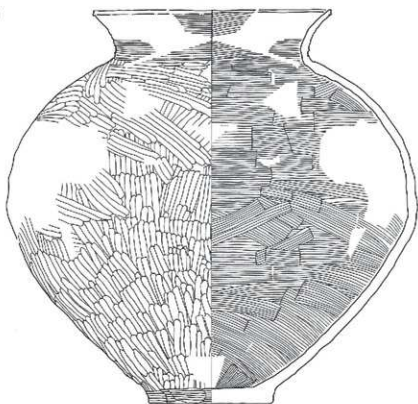
112 (NE-床面)



114 (カマド火床面東側-1層)



113 (NE-1層)



115 (B層)



第 50 図 RA02 竪穴建物跡出土遺物 (2)

第6章 総括

1 調査のまとめ

(1) 調査成果の概要

第5次調査区では、12棟の古代の竪穴建物跡(RA04～13, RE01・02)、古代以降の土坑11基(RD06～16)、溝跡2条(RG01・02)を検出した。以下特筆事項を概観する。

①竪穴建物跡

竪穴建物跡のうち、RA04～13はカマドが有り、RE01・02はカマドが無い。

RE02は調査区外に延びるため全容及びカマドの存在は不明であるが、北辺にスロープ状の部分を確認した。断り割ったところ、地山IV層シルト層を掘り残して構築されていた。埋土状況や出土遺物から、古代・奈良時代の竪穴建物跡と考えられるが、この時代の明確なスロープがある竪穴建物跡の類例は管見において見つけられない。状況から、竪穴建物のカマド構築途中で放棄されたものか、出入口部と考えられる。周辺の竪穴建物跡は北辺にカマドを設けるものがほとんどであること、出土遺物量が少ないこと、スロープの脇の床面からカマド芯材に使えそうな長さ30cmと15cmほどの川原石2点が出土したことから、カマド構築途中で放棄された竪穴建物跡の可能性を指摘したい。

このほかカマドのある竪穴建物跡については後述する。

②土坑

RD06・07・09・13・14は、検出や埋土の状況、重複関係から、古代以降の物と考えられる。

RD09は一見すると竪穴建物跡のような平面形だが、底面や埋土の状況から耕作等に伴う土坑と推察される。

RD08・10・11・12・15・16は、検出や埋土、重複状況、出土遺物から古代・奈良時代の物である。

RD15は、焼土が堆積した埋土の状況から、繰り返し火を焚かれた土坑と考えられる。A層から土師器甕破片が出土している。また、B層焼土層内出土炭化材の放射性炭素年代測定では、古木効果の影響も指摘されるが、6世紀半ば～7世紀前半の年代が得られている。埋土中から土器の出土が少ないことから土器焼成遺構の可能性は低いが、樹種同定からコナラ材を薪に何らかの火を焚いた土坑と考えられる。

RD16はRA13竪穴建物跡の埋土を掘り込んで構築されている。廃棄され埋没が進む過程の凹地となった竪穴建物跡を掘り込んだと考えられる。同様の事例は、近隣の高櫓A遺跡では中型～小型の竪穴建物跡のいくつかにみられる。祭祀儀礼習俗活動の可能性が指摘されているが、廃棄土坑の可能性も指摘できよう。

③溝跡

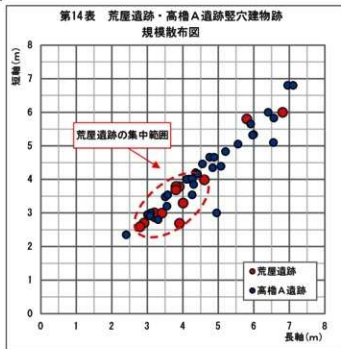
RG03・04溝跡2条は、表土I層直下から掘り込まれており、古代の竪穴建物跡や土坑と重複し新しい。このことから、詳細な時期は不明だが、耕作に伴う水路や地境などの溝跡だろう。

(2) 竪穴建物跡の特徴 - 高槽A遺跡との比較

本遺跡の約 200m 北東に近接する高槽A遺跡報告において、カマドが確認された竪穴建物跡 31 棟のカマド方向、床面積の比較検討を行っている。荒屋遺跡の第5次及び第3次調査で調査したカマドのある竪穴建物跡 13 棟についても、高槽A遺跡と比較検討を行った。

①規模 (第14表)

竪穴建物跡面積の平均は、荒屋遺跡が 16.08 m²、高槽A遺跡は 22.6 m² であり、荒屋遺跡の方が小ぶりである。この面積平均と規模の散布図から、荒屋遺跡は高槽A遺跡よりも、中～小型が多く、規模が均質化している。



②カマド方位 (第15・16表)

カマドの方位は、荒屋遺跡は、北2棟 (15%)、北西10棟 (77%)、北東1棟 (8%) である。高槽A遺跡は、北13棟 (42%)、北西16棟 (52%)、西南1棟 (3%)、南東1棟 (3%) である。

荒屋遺跡は北西に集中しており、高槽A遺跡は北から北西に広く分布している。荒屋遺跡の方が、北西の傾向が強い。

また、RA12 竪穴建物跡のカマドは、東辺の中央では無く左に寄せて構築されており、他の竪穴建物跡とは様相が異なる。盛岡周辺・古代志波郡内の竪穴建物跡のうち、カマド方向が東～南向で、辺の中央では無く左右どちらかに寄せてカマドが構築されたものは、9世紀以降の平安時代の竪穴建物跡の特徴とされる。RA12 竪穴建物跡は出土遺物が少なく、遺物から時期を明確にはできない。高槽A遺跡においても、カマドが確認された 31 棟の竪穴建物跡のうち、南東向き、南西向きが 1 棟ずつ確認されている。高槽A遺跡のこの 2 棟は、土器から明確な時期差は見られないことから、小時期差や集落内のバラエティーの一種の可能性が指摘されている。RA12 竪穴建物跡も同様の指摘ができよう。土器の特徴については後述する。

③カマド構築の特徴 (第7図版)

RA08・11 竪穴建物跡において、カマド袖構築土内の芯材に土師器甕を伏せ、縦に 2 個並べて使用している。古代志波郡内の竪穴建物跡には、川原石を使う事例と共に、まれに見られる事例である。

このカマド構築芯材として使われた土師器甕には、口縁部先端を意図的に打ち欠いた痕跡がみられるものがある。RA11 竪穴建物跡出土のものには、口縁部の中心に対する対称点の 2 か所を打ち欠いたようにみえるものもある (第7図版 89)。

遺物洗浄後の整理作業時に発見したため、調査現場記録写真でもこの打ち欠きの位置関係は不明である。カマド構築芯材として縦に 2 個体並べて据える位置の目印としたのか、甕としての機能を終えカマド芯材として使うという儀礼的な行為なのかは不明である (墓へ供える際に甕の底部の穴を打ち欠いて穴を開ける事例)。他の出土事例との比較検討が必要だ。

第 7 図版 RA11 竪穴建物跡 カマド構築土内出土土師器甕の口縁部

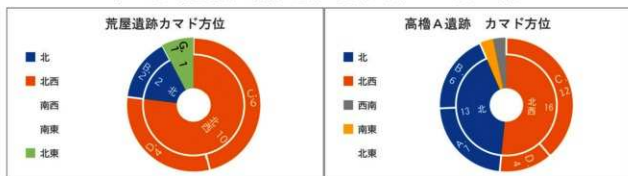


32 RA08 カマド K 層出土

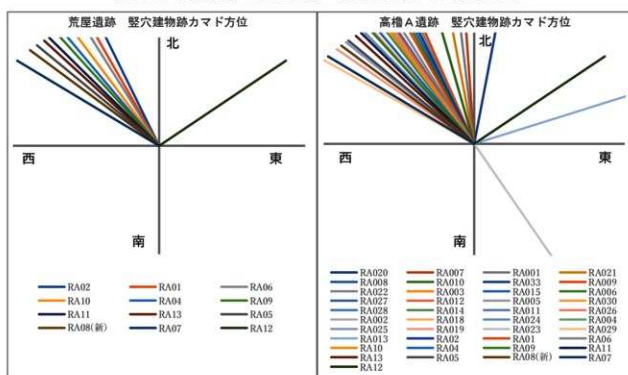
89 RA11 カマド K 層出土

90 RA11 カマド K 層出土

第 15 表 荒屋遺跡・高槽 A 遺跡 竪穴建物跡カマド方位の割合



第 16 表 荒屋遺跡・高槽 A 遺跡 竪穴建物跡カマド方位の分布



(3) 土器の特徴

荒屋遺跡の第5次及び第3次調査では、ロクロ(回転台)不使用の土師器のみが出土しており、ロクロを使用した土器(須恵器, あかやき土器)は出土していない。器種は、坏・高坏・甕・球胴甕・甔である。これは奈良時代・8世紀代の集落出土土器群の標準的なセット関係といえる。

器形の特徴ごとに分類した(第17表)。竪穴建物跡ごとの出土は、第18表のとおりである。

坏は体部外面の段や線があり、底部外面は丸底と平丸底が大半を占める。平底の坏で特筆すべきは、RA09出土のものが挙げられる(第39図, 第19図版55)。器形はロクロ成形坏のようにも見えるが、ロクロ非使用で、内面黒色処理ミガキが施され、底面にヘラでロクロ糸切り痕跡を模したかのような調整が見られる。

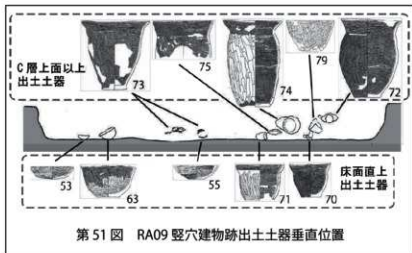
甕は、最大径が口縁部にあり、頸部外面に段があるものも一定量含むが、沈線のみや段や線が無いものも含まれる。内底面は丸底よりも平丸底が多く、平底も一定量含まれる。外面調整はヘラミガキ、ハケメ、強いヘラナゲ調整が多く、ヘラケズリは少ない。口縁を面取りするものはRA09竪穴建物跡出土に限られる。

また、球胴甕は、RA07竪穴建物跡出土のものは中央やや下部に最大径を有する下膨れな器形で、RA08竪穴建物跡と第3次調査RA02竪穴建物跡出土のものは中央上部に最大径を有する。

この土器の細分と出土竪穴建物跡の関係を第18表から検討の結果、荒屋遺跡も高橋A遺跡報告にもあるように、竪穴建物跡の分類と土器の分類に、特徴的な関係性は見いだせない。

ただし、RA09竪穴建物跡はC層に完形の甕がまとまって出土するなど、土器の出土量が他の遺構よりも多い(第39~42図, 第51図)。出土状況からC層上面以下出土の土器は、竪穴建物跡が機能していた最終段階

の遺物で、それ以上の層出土土器は埋まりかかっている時点で流入した遺物と考えるのが一般的だろう。この土器群を観察すると、床面及び床面直上出土の坏には有段丸底(a1)が含まれるが、B・C層には有段または沈線の平丸底の坏(a2, b2)のみが出土し有段丸底(a1)は含まれていない。さらに、床面及び直上出土の甕の内底面は丸底または平丸底であるが、C層上面以



第51図 RA09 竪穴建物跡出土土器垂直位置

第17表 出土土器の分類

坏の分類				甕の分類					
分類	体部外面	細分	底部外面	分類	最大径	細分	頸部	細分	底部内面
a	有段	1	丸底	a	体部下半	1	有段	7	丸底
		2	平底風丸底			2	沈線	イ	平丸底
		3	平底			3	無	ウ	平底
b	沈線	1	丸底	b	体部上半	1	有段	7	丸底
		2	平底風丸底			2	沈線	イ	平丸底
		3	平底			3	無	ウ	平底
c	無段, 無線	1	丸底	c	口縁部	1	有段	7	丸底
		2	平底風丸底			2	沈線	イ	平丸底
		3	平底			3	無	ウ	平底

第 18 表 荒屋遺跡・高槽 A 遺跡 竪穴建物跡分類

分類は高槽 A 遺跡報告の分類に倣った。(盛岡市教育委員会 2009)

A : 北カマド N8.0°E~12.0°W, B : 北カマド N18.0°~22.0°W, C : 北西カマド N26.5°~36.0°,

D : 北西カマド N42.0°~47.0°W, E : 南西カマド, F : 南東カマド, G : 東北カマド

荒屋遺跡

分類	遺構名	カマド方向	長軸 (m)	短軸 (m)	面積 (㎡)	規模分類	周溝	仕切溝	土坑重複	袖芯材	坪分類	裏分類	To-a
B	RA02	N20°W 北	4.6	4	18.4	中					c1,c2	c1 7,c1 f	
	RA01	N23°W 北	6.8	6	40.8	大	○	○			b1	c3 7	
C	RA06	N25°W 北西	3.2	2.9	9.28	小					b1		—
	RA10	N29°W 北西	4.1	4	16.4	小					b2,c2		A層
	RA04	N32°W 北西	3.2	3	9.6	小						c2 7	—
	RA09	N34°W 北西	3.9	3.8	14.82	小					a1・2,b1・2, c1・2・3	c1 7・7, c2 7,c3 f	A1層
	RA11	N37°W 北西	3.8	0.9	14.44	小				土器・礎		c1 7・7, c3 7	—
D	RA13	N39°W 北西	2.9	2.7	7.83	小			○				—
	RA05	N42°W 北西	4	3.3	13.2	小					a1,b2,c1		A層
	RA08(新)	N45°W 北西	5.8	4	33.64	大	○	○		土器	a1,c1	c1 f,c3 f・7	B層
	RA08(旧)	N45°W 北西	—	—	—	大							
G	RA07	W39°N 北西	3.8	3.7	14.06	小					a1,c1		A層
	RA12	E44°N 東北	3.4	3	10.2	小					c1		—
E	RA03	—	3.8	0.5	14.44	中							—
	RE01	—	2.8	2.6	7.28	小							A層
	RE02	—	3.9	2.7	15.21	小							A層

高槽 A 遺跡

分類	遺構名	カマド方向	長軸 (m)	短軸 (m)	面積 (㎡)	規模分類	周溝	仕切溝	土坑重複	袖芯材	坪分類	裏分類
A	RA020	N8°E 北	6.55	5.1	51.09	大	○	○			a2,b2,c1・2	b1 f,c1 7
	RA007	N3°W 北	4.01	4.17	16.72	中			○		c2	
	RA001	N5°W 北	4.36	4.2	18.31	中						c1 f
	RA021	N8°W 北	4	4.1	16.4	中	○		○		a1・2,c1	c3 7
	RA008	N12°W 北	4.39	5.07	22.26	中	○					c1 f・7
	RA010	N12°W 北	4.16	4.41	18.35	中	○				a1	
	RA033	N14°W 北	2.35	2.4	5.64	小					a1,c3	b1-
B	RA009	N18°W 北	4.66	4.75	22.14	中					a1・b2	
	RA022	N19°W 北	3	4.95								
	RA003	N20°W 北	4.46	4.55	20.29	中	○				a2	c1 7・7, c3 7・7
	RA016	N20°W 北	4.02	4.26	17.13	中					b2,c1	c3 f
	RA015	N21°W 北	5.34	5.99	31.99	大	○			土器	b1・2・3	b2 7,c1-
	RA006	N22°W 北	5.67	5.91	33.51	大	○					
C	RA027	N26.5°W 北西	3.2	3.55	11.36	小			○			
	RA012	N27°W 北西	5.83	6.56	38.24	大	○	○			a1,b3	
	RA005	N28°W 北西	5.05	5.55	28.03	大	○			土器	a1,c2	b2 7,c3 f
	RA030	N28.5°W 北西	6.4	6	38.4	大	○	○		土器	c1	c1-
	RA028	N29°W 北西	3.85	4.3	16.56	中				礎		
	RA014	N30°W 北西	3.48	3.5	12.18	小	○					
	RA011	N32°W 北西	4.26	3.54	15.08	中						
	RA026	N33.5°W 北西	6.95	6.8	47.61	大	○	○		土器	c1	c1 f,c2 7
	RA002	N36°W 北西	4.66	4.88	22.74	中	○				a1	c3 7
	RA018	N36°W 北西	5.32	5.96	31.71	大	○				c1,c3	c3-
D	RA024	N36°W 北西	6.8	7.1	48.28	大						
	RA034	N36°W 北西	3.3	2.8	8.96	小						
	RA004	N42°W 北西	4.83	5.2	25.12	大					c3	c2 f
	RA025	N43°W 北西	3.1	3	9.3	小			○			
	RA019	N47°W 北西	3.57	3.54	12.64	小						c3 f
E	RA029	W37°N 北西	4.35	4.84	21.05	中						c1 f
	RA023	W27°S 西南	3	2.95	8.85	小			○			c1 7
F	RA013	S23°E 南東	2.91	3.07	8.93	小						

上から出土した甕の内底面は平丸底と平底で、丸底が含まれない。甕の体部外面調整は、C層上面以上出土の甕にはヘラケズリ調整が見られる。これらのことから、床面及び床面直上出土の土器群とC層上面以上出土土器群とは、後者が僅かに新しい様相を持っていると言える。一方、甕の口縁の面取りが施されているものが含まれるなど、共通する様相を持った土器も存在することから、その時間差は小さいだろう。

また、C層上面以上の土器の出土状況は、竪穴建物跡の南東に集中しており、固体ごとの破片が散乱せずその場で割れたように出土したことから、南東側から投げ込まれた可能性が指摘できる。南に隣接するRA08竪穴建物跡は約半分の範囲が調査区外に延びるが、第5次調査区内では最大規模の竪穴建物跡であり、唯一カマドを作り替えていることから、他の竪穴建物跡より長期間存続した集落の拠点的な竪穴建物だったと言える。しかし出土遺物量は多くはない。想像を逞しくすれば、RA08竪穴建物跡の住人がカマドの新調に当たり、旧カマド時の不要な土器を隣接する窪地のRA09竪穴建物跡へ廃棄したとは考えられないだろうか。

(4) 土製品

①手づくね坯（第30図4、第20図版4）、小型片口状土器（第37図46、第21図版46）

RA04竪穴建物跡のB層から手づくねの坯、RA08竪穴建物跡の煙道J層から小型片口状土器が出土した。

RA04竪穴建物跡出土坯は、粗雑な作りであり用途等は不明。RA08竪穴建物跡出土小型片口は、カマド煙道入口付近から出土した。外面はヘラミガキ調整、内面はヘラナゲ調整が施され、内面にススが付着しており、油状の物が入っていたか。灯明皿の用途も考えられるが、詳細は不明である。

なお、第3次調査RA01竪穴建物跡から小型の坯状土器が出土している（第48図104、第25図版104）。

②土製紡錘車（第43図87、第23図版87）

RA10竪穴建物跡の床面から1点出土した。断面形は長方形に近い台形を呈する。上面や下面は中央で凹まず、段も無く、ほぼ中央に穿孔されている。側面はヘラミガキ、上面下面はヘラナゲ調整が施される。

なお、高櫓A遺跡からは14点出土している。最も多いRA08竪穴建物跡からは3個体出土し、ひとつの古代集落では突出した出土量といえる。高櫓A遺跡出土の紡錘車は、側面が丸みを帯びる物、上面が凹む物、断面の上面と下面の差が大きい台形の物が多く、表面調整も全面ヘラミガキが多い。

このことから、本遺跡RA10竪穴建物跡出土の土製紡錘車の方が、高櫓A遺跡出土の物より若干新しい特徴を持っている。

③土製丸玉、土製勾玉

土玉や勾玉の出土はRA06とRA08に限られる。なお第3次調査のRA01竪穴建物跡からも勾玉が出土している（第48図105、第25図版105）。

丸い粘土玉に穿孔されていない土製丸玉がRA06竪穴建物跡から1点（第32図21、第20図版21）出土した。丸い粘土玉の中央部を穿孔した土製丸玉が、RA08竪穴建物跡から2点（第38図47・48、第21図版47・48）出土した。また勾玉は、RA06竪穴建物跡から1点（第32図22、第20図版22）、RA08竪穴建物跡から1点（第38図49、第21図版49）出土した。勾玉はいずれも穿孔部分より上部が破損している。

④不明土製品

粘土塊を細長く手でこねて、焼成したものが2点出土した。

RA05 竪穴建物跡B層出土の物は、棒状を呈する(第31図16, 第20図版16)。用途等不明。RA09 竪穴建物跡カマドJ層から出土の物は、細長い棒状を呈し、一端は別の土器等に接着していたようにも見え、また一端は平たく成形されている(第42図80, 第23図版80)。何かの脚部が剥離した可能性が考えられる。

(5) 鉄製品 (第33図29, 第38図50, 第4・5・24図版)

RA07 竪穴建物跡の煙道埋土J層とRA08 竪穴建物跡の床面から、刀子が1点ずつ出土した。RA07のものは刃部の一部のみ残存しており錆化が激しい。RA08のものは切先と茎が破損している。(第4章3参照)

(6) 石製品, 石材 (第31図15, 第38図51・52, 第20・21・24図版)

RA05 竪穴建物跡から流紋岩の砥石, RA08 竪穴建物跡から軽石の砥石2点が出土した。それぞれ使用痕跡が認められる。

またRA08 竪穴建物跡埋土C層から、周辺の川原石では見られない材質の直径3cm程の自然石の小石が2点出土した(第24図版200・201)。盛岡周辺では見られないものであり、秋田から青森にかけての日本海沿岸, 出羽国方面等との交易品の可能性も考えられる。事例蓄積と材質の分析が必要だ。

2 荒屋遺跡の古代集落について

以上の調査成果から、本遺跡の古代集落の歴史的背景や時期について考察する。

まず盛岡周辺地域の8世紀から9世紀初頭の状況を概観する。本地域の8世紀は、律令政府の在地蝦夷(エミシ)社会への積極的な政策がとられていた時期である。政府は8世紀代の岩手県南部への軍事行動に引き続き、9世紀初頭に地域支配と経営拠点として城柵(胆沢城(802年・奥州市水沢), 志波城(803年・市内下太田), 徳丹城(811年頃・矢巾町西徳田))を造営した。

集落では、9世紀初頭の城柵設置以降、土器組成に須恵器やあかやき土器といった「官」的様相が見られるようになる。在地系の土師器は、ロクロ成形を取り入れながらも、伝統的な内面にヘラミガキと黒色処理を施し続ける。城柵設置以降、官から在地へ技術移転があり、土器様相が変化していったことがうかがえる。

8世紀以降はそれまで集落が無かった場所に集落が発生し、竪穴建物の総数も増加する。これらの集落は、それ以前から存続する集落同様に大型竪穴建物跡1棟と複数の中・小型の竪穴建物跡が衛星のように分布し一時期の集落を形成する。終末期古墳も作られ続け、家父長制の蝦夷社会が想定される。この背景には、気候温暖化や鉄製品普及による農業生産力向上に伴い、地域社会の安定化による人口増加が推測される。城柵が造営され政府統治下に入った9世紀以降は、竪穴建物跡の規模や竪穴建物跡の出土遺物の質や量が均質化する傾向は見られ、カマド方位が東へ南向きで壁の中央では無く左右どちらかに寄って作られるようになる。それでもなお、終末期古墳は継続することから葬送儀礼の大きな変化は見られない。城柵設置以降も在地蝦夷社会は前代の様相を保持し、城柵設置によって地域社会が急激に変化したとは言えない。

これらを踏まえ、本遺跡の集落様相と時期を推察する。

本遺跡今次調査出土土器には、須恵器やあかやき土器、ロクロ成形土師器のような「官」的な要素は見

取れず、それ以前から続く在土器様相の範疇におさまる。竪穴建物跡のカマド方向は極めて北西に集中し、カマドは壁中央に構築される。これは8世紀代の特徴だが、竪穴建物跡の規模は中へ小型に均質化してきており、これは9世紀以降の新しい集落の特徴でもある。

放射性炭素年代測定の結果は、RA04・08・09 竪穴建物跡出土炭化材の年代にあまり差異は無く、古木効果の指摘付で7世紀半ばから8世紀後半の年代が示されている。

各竪穴建物跡相互の前後関係は、土器やカマド方位の特徴からの細かい時期区分は困難である。強いて挙げれば灰白色火山灰（十和田 a 火山灰・915 年降下）の堆積状況が埋土の上位と中位で時間差を想定できるが、竪穴建物跡規模による埋没速度の違いが想定され、明確な時間差は見いだせない。

近接の高橋A遺跡では、出土土器の様相は本遺跡と大きく変わらないものの、僅かにロクロ使用のあかやき土器や須恵器が出土し、8世紀末から9世紀初頭（第1四半期）の年代を想定している。

また、松ノ木遺跡（市内上太田）のRA026 竪穴建物跡は、西壁中央にカマドが構築され、ロクロ不使用で内外面へヘラミガキ調整を施した土器器坏、頸部に段や沈線がない土器器甕、内底面が平底の土器器甕とともに、底径が大きいヘラ切りの須恵器が共伴して出土し、8世紀末から9世紀初頭の年代観が提示されている。松ノ木遺跡の例は、須恵器の存在を除けば本遺出土土器とよく似た様相である。しかし、松ノ木遺跡の事例は、RA026 竪穴建物跡がもっとも古い竪穴建物跡であり、この時期に集落が発生したと考えられている。併せて志波城から1kmほどの距離と近接しており、官的な影響を受けつつ発生した集落と考えられる。

以上のことや先行研究成果から、本遺跡古代集落は志波城造営前後にも政府からの影響をあまり受けずに存在した在地蝦夷の集落であり、存続時期は8世紀第3四半期から9世紀第1四半期と想定される。

（今野公顕）

【参考文献】

盛岡市教育委員会1992『館・松ノ木遺跡-古代の遺構編-』

盛岡市教育委員会1999『館・松ノ木遺跡-古代の遺物編-』

盛岡市教育委員会2009『高橋A遺跡-パークスクエア都府中央宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書-』

盛岡市教育委員会2019『西鹿渡遺跡-宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書-』

盛岡市教育委員会2020『西鹿渡遺跡-第36次調査 宅地造成に伴う緊急発掘調査-』

津嶋知弘2004『志波城と蝦夷社会』『古代蝦夷と律令国家』高志書院

津嶋知弘2013『古代「脚波（志波）」郡北部の土器変遷（その1）-磐石川南岸所在遺跡の盛岡市教育委員会発掘調査資料を中心に-』

盛岡市遺跡の学び館学芸レポートVol.2 盛岡市ウェブサイト

津嶋知弘2015『志波城跡出土土器群の特徴』盛岡市遺跡の学び館平成27年度テーマ展「方八丁を掘る！-志波城発掘史-」資料集

『古代城跡志波城跡出土土器実測図集（盛岡市教育委員会調査）』盛岡市遺跡の学び館

西野 修2008『志波城・徳丹城』日本の遺跡31 同成社

福島正和2009『志波城周辺の集落様相』『第35回古代城址官衙遺跡検討会資料集』古代城址官衙遺跡検討会

今野公顕2009『9世紀前半の志波城跡周辺の土器』『第35回古代城址官衙遺跡検討会資料集』古代城址官衙遺跡検討会

3 「ちょうえんぼう」について

旧地権者及び古くから住む周辺住民の話では、第5次調査区の場所は「ちょうえんぼう」、「ちょうえんぼうの畑」と呼ばれ、「昔、南側に湧き水があり、ちょうえんぼうというお坊さんがいた。」と伝わっている。また「ちょうえんぼうは北から来た。」という話もあるという。今のところ、本遺跡及びその近隣の発掘調査で、寺院跡や僧坊跡、仏具等は見つかっていない。この「ちょうえんぼう」について、文献史料等から推測できることを以下にまとめる。

(1) 八戸市の地名

インターネットで「ちょうえんぼう」と検索すると、青森県八戸市河原木大字「長円坊堀（ちょうえんぼうぼり）」という地名がヒットする。八戸市立図書館によれば、地名の由来は不明で近くの祠を管理した修験者の名の可能性がある、とのことであった。

(2) 「ちょうえんぼう」とは

神田より子著『東北地方における修験者と権現舞』、青森県立図書館『多聞院文書』には、「漆水村 長円坊」、「32 五戸神明別当 長円坊」と見える。

また、『内史畧(1)前六』「奥南日記抜率巻之三 寺社修験本末支配之記」には、「十七自光坊」内に「田名部自光坊末流 一 長円坊 長後村」、「二〇寿松院」内に「寿松院末流 一 長円坊 腹帯村」、「一 長円坊 和井内村」、「二一西福院」内に「西福院末流御城下住居 一 長円坊 山伏小路」と、長円坊が散見される。これらのことから「ちょうえんぼう」は、修験関係にしばしば見られる名称のひとつといえる。

(3) 土地の行政区分

第5次調査区の地番は、盛岡市永井 25 地割であり、旧字名は荒屋、近世期は向中野通永井村に属していた。本遺跡南隣接地の地番は、西見前 19 地割であり、旧字名は菖蒲田(あやめだ)、近世期は見前通西見前村に属していた。また第5次調査区西隣民家の現住所は、昔からの地縁があることから、飛び地の西見前 19 地割である。第5次調査区旧地権者は西見前在住でもあり、土地の歴史を考える上では永井よりも西見前との関係性が深いといえる。なお明治 22 年の町村制により、飯岡村永井、見前村西見前となる。昭和 30 年には乙部村と共に 3 村合併し都南村となり、平成 4 年に盛岡市に編入合併し現在に至る。

(4) 北野神社別当宮崎家

都南歴史民俗資料館に残る昭和 63 年の都南村文化財調査員調査報告に、次の記録がある。

長円坊(宮崎家)跡と伝えられる 昭和六三 十一 四 吉田長一郎

都南村下永井二十五-四五藤川与次郎氏宅前五千平方米余、昔より長円坊跡地と伝えられ宮崎家の修験道場があったと言われ、今も土地の人々は、その土地を「ちょうえんぼう」と言っております。

吉田長一郎氏は都南村文化財調査員を務め、村内各地の歴史を調査し記録した。上記報告には現地写真が添えられ、本遺跡第 3・5 次調査区周辺が写っている。宮崎家の修験道場があったと記されているがその根拠等は、吉田氏の記録に無く不明である。

宮崎家は、西見前の北野神社の別当職(統括者)を代々務めた家系である。

北野神社は、西見前第 17 地割三百刈田地内に所在し、明治時代から終戦前まで社格は村社であった。はっきりとした由緒は不明だが、都南歴史民俗資料館の『神社佛閣由緒世書上帖 志和郡年行司自光坊同行 頼光院』などの資料によれば、永正 2 (1502)年に亡くなった頼光院の創建と伝わる。慶長 12 (1607)年銘のある懸仏や、数枚の堂宇再建棟札が残るという。懸仏には「北野大明神奥州南部志和郡見前村別当 教学院 鑄物師

茂平治作 施主郭中 慶長十二丁未歳五月二十三(下線筆者加筆)の銘がある。懸仏銘に見える教学院は、『神社佛閣由緒世代書上帖』によれば第五世教学院巡直である。また第八世教学院巡水は、元禄11(1699)年に自光坊六世秀山の弟子となり南覚坊を名乗り、その後教学院となる。正徳元(1709)年に自光坊秀山から代々縄張りとしてきた見前村・永井村を震場(かすみば・修験道信者をまとめる縄張り)とする証文を受けた。

自光坊は代々同名を襲名し、江戸時代中頃には盛岡・志和・田名部・鹿角に震場を有し、53の末院(未派修験)を擁し、盛岡藩筆頭年行事(頭役)を務めた。元禄2(1689)年からは、藩内の本山派も羽黒派も含めた修験最高責任者の修験惣掾を務め、明治期の神仏分離まで藩内修験道の最高権力者だった。

修験道は自然崇拜・山岳信仰を基盤とし、仏教(密教)などが融合し、平安時代後期に宗教形態になったと言われる。中世末から近世初期にかけて、修験者は村や町に定着し震や檀那場と呼ばれる縄張りをもった。盛岡藩領には千人以上の修験者があり、庶民が有力な信徒だったという。盛岡藩の社堂を網羅した『御領分社堂』(宝暦10(1760)年頃成立)によれば、江戸時代中期の領内社堂の約8割が修験持ちや俗別当(神仏習合から明治維新まで、村の社堂を管理する有力者の別当を、百姓身分で務めた者)持ちである。俗別当の多くは修験者の流れをくみ、堂守となり、祈祷やまじないなどをする庶民に身近な宗教者だった。当時の社会において、修験は相当の影響を持っていたことがうかがえる。

江戸時代の北野神社別当宮崎家は、自光坊配下として永井村と見前村を震場とした地域有力者だった。明治元年の神仏分離、同5年の修験道廃止により神職になった第15世宮崎求馬が、北野神社のほか永井の多賀神社など15ほどの神職を兼職したことからもうかがえる。しかし、『神社佛閣由緒世代書上帖』等資料には、ちょうえんぼうの名は見られない。記録に無い兄弟や関係者、呼び寄せた修験者にちょうえんぼうがいた可能性もあるが、確認できない。

(5) この土地に伝わる「ちょうえんぼう」とは

この土地に伝わるちょうえんぼうには、北野神社別当宮崎家関係も含め、いくつかの可能性が考えられる。

本遺跡から約250m北の水井第24地割地内に、「多賀神社」がある。多賀神社は江戸時代には向中野通永井村に位置し、明治時代から終戦前まで旧飯岡村村社であった。由来ははっきりしないが盛岡藩士阿部兵部左衛門の創祀と伝わり、永井村の産土神として尊信を集めたという。『御領分社堂』によれば、清九郎が代々俗別当を務めた。代々の清九郎に、ちょうえんぼうを名乗る修験者がいたかは不明だ。(後述の葛蒲田家2代清助の四男清九郎が東見前石田に分家している。以降系図は不明で多賀神社との関係性も不明。)

本遺跡から約600m南の西見前第17地割地内に、曹洞宗の「朝前山清水寺」がある。『御領分社堂』に清水寺の寺院持ち社堂として「白山大権現」がみえる。清水寺は別当寺であるため、寺院領内に修験僧坊が存在した可能性がある。寺社領は境内近くだけでなく、離れて所在する場合もある。『清水寺史』によれば、慶応元(1865)年『當宗門改書上帳』の西見前村・東見前村の筆頭に「清水寺 曹洞宗 清助」の名が見える。都南歴史民俗資料館蔵『飯岡村圖面』(明治初期)の「第貳拾五地割 字荒屋」には、第5次調査区や周辺、他図案などの広範囲に「藤川清助」の名が見える。都南歴史民俗資料館の『葛蒲田家系図(写)』によれば、屋号葛蒲田の藤川家は二代から九代まで清助を襲名し、六代は元治元(1864)年没、七代は慶応4(1868)年没、八代は大正3(1914)年没である。藤川家は広い土地を持つ有職者と考えられることから、慶応元(1865)年『當宗門改書上帳』の清助(恐らく七代)と『飯岡村圖面』の藤川清助(恐らく八代)は、代替わりした清助の可能性が高い。五代清助の項には、「南部利敬公…見前ニ今宮神社ヲ建立シ…今宮神社ニハ藤川氏祠官仰付ラレタリ。此ノ時始メテ藤川對馬政廣ト南部利敬公ヨリ拝領セリ」の記載がある。『都南村誌』によれば、今宮神社は東見前にあったが明治3年に北野神社に迎社し、明治35年に北野神社飛地の東見前(現在地)に移転

したとある。今宮神社祠官藤川家と北野神社別当宮崎家の関係の深さがうかがえる。五代清助の項には「清水寺に田を寄進。宮崎頼光院に宅地焼畑一切寄進」の記載も見える。広く土地を持っていた藤川清助が、清水寺や宮崎家に土地を提供したことがわかる。これらのことから、藤川清助が清水寺檀家で力をもち、自分の土地に清水寺白山大権現や祠官である今宮神社、宮崎家関係の修験者を住まわせた可能性がある。

森毅によれば、「俗別当とは、通常は百姓身分の俗人でありながら、自村のみじかな(原スツ)社堂を管理する…社堂の草創に際しては近在の修験者を選官導師を迎えることが多かった。ここに修験者と俗別当との緊密な相互関係が結ばれた素地があり…」(森毅 1989・PP518) とあることからも上記の推測ができる。

また、「浄念坊」という隠し念仏の導師が和賀方面にいたが、西見前や永井には見られない。

以上のことから、本遺跡の「ちょうえんぼう」について、次のようなことが推測できる。

- ・ちょうえんぼう(長円坊)は、近世期の修験関係の一般的な名称のひとつである。
 - ・近世期の見前村と永井村は北野神社別当宮崎家の農場だったため、宮崎家関係の修験者の可能性が高い。
 - ・明治期の地主は屋号菖蒲田の藤川家だった。藤川家は広く土地を持ち、慶応年間の清水寺檀家筆頭だった可能性があり、南部利敬の際には今宮神社の祠官に任じられた。清水寺や宮崎家に土地を寄進している。
 - ・北野神社、清水寺白山大権現、多賀神社、今宮神社、いずれかの修験者が宮崎家と藤川家によって招聘され、藤川家の土地に僧坊を営み、長円坊を名乗っていた、もしくは置かれた僧坊名だった可能性がある。
- 以上のことが伝承として、伝わっていると推察できる。ほかの名では無く長円坊の名前だけが残っていることから、特に人々の記憶に残る修験者だったのかも知れない。具体的な人物像等は不明だが、今後の資料調査により分かることも出てくる可能性がある。

このような小さな地域伝承は、記録が無いことから一度忘れ去られると無かった物と同様になってしまう。ちょうえんぼうの詳細は明らかにすることはできなかったが、本報告書に記録することで、地域の歴史の一端として保存継承できればと願う。

本稿執筆にあたり、菅田慶信氏(盛岡市文化財保護審議会会長、岩手県立大学)、大沼信忠氏(元盛岡市教育委員会)、そして特に都南歴史民俗資料館の藤川里恵氏から多大なる御教示を賜った。末筆ながら記して感謝申し上げる。

(今野公顕)

【参考文献】

- | | |
|--|---|
| 青森県立図書館 1975 『多門院文書』 解題書目第5集 | 菅田慶信 2020 『自光坊の歴史へ一方家所蔵自光坊修験関係資料と自光坊』 盛岡市文化財シリーズ第46集 盛岡市教育委員会 |
| 岩手県立図書館 1973 『岩手史叢第1巻 内史叢(1)』 岩手県文化財愛護協会 | 森毅 1975 『南部藩の修験・山伏-南部藩御支記・堂舎の分布-』 郷土史叢第1集 郷土史叢刊行会 |
| 岸昌一 2001 『御部分社堂』 南部藩宗教関係資料1 (有)岩田書院 | 森毅 1984 『修験道資料史料自光坊文書』 『Artes liberales』 |
| 柴波可 1972 『紫波町史 第1巻』 | 岩手大学人文社会科学部記念要編編集委員会 編 |
| 曹洞宗清水寺 1993 『清水寺史』 開創四百年記念刊行 | 森毅 1989 『修験道認識の史的探究』 名著出版 |
| 高橋梵山 1963 『かくし念仏第一』 巖南堂書店 | 吉田長一郎 1988 調査報告「長岡坊(宮崎家)跡と伝えられる」都南歴史民俗資料館 |
| 都南村 1974 『都南村史』 | 吉田長一郎 1990 『読み下し文 神社佛閣由緒世代書上巻』 都南歴史民俗資料館 |
| 都南歴史民俗資料館 「飯岡村圖面」 | |
| 都南歴史民俗資料館 「神社佛閣由緒世代書上帖 志和郡年行事自光坊同行頼光院」 | |
| 都南歴史民俗資料館 「都南の先人 宮崎求馬」 関連資料 | |



調査区全景 垂直写真（オルソ画像・1/500）



調査区遠景（東上空から）

第8図版 第5次調査区 全景写真（1）



調査区遠景（北上空から）



調査区遠景（北東上空から）



調査区遠景（南上空から）



調査区遠景（南西上空から）



RA04 竪穴建物跡 全景（南から）



RA04 竪穴建物跡 断面（南から）



RA05 竪穴建物跡 全景（南東から）



RA05 竪穴建物跡 土器 No.3 (31 図 8) 出土状況



RA06 竪穴建物跡 全景（南から）



RA07 竪穴建物跡 全景（南から）



RA07 竪穴建物跡 断面（東から）



RA07 竪穴建物跡土器 No. 2・3(33 図 28) 出土状況（南から）



RA08 竪穴建物跡 全景（南から）



RA08 竪穴建物跡 全景（西から）



RA08 竪穴建物跡 断面



RA08 竪穴建物跡 断面



RA08 竪穴建物跡 カマド



RA08 竪穴建物跡 カマド精査（西から）



RA08 竪穴建物跡 カマド精査（上から）



RA08 竪穴建物跡 煙道 土器 (37 図 46) 出土状況



RA08 竪穴建物跡 新カマド完掘 (西から)



RA08 竪穴建物跡 完掘 全景 (東から)



RA08 竪穴建物跡 旧カマド精査



RA08 竪穴建物跡 旧カマド精査



RA09 竪穴建物跡 全景 (南から)



RA09 竪穴建物跡 カマド精査 (東から)



RA09 竪穴建物跡 土器 NO. 1 ~ 6 出土状況
(41 図 72. 42 図 79. 41 図 70. 41 図 74. 41 図 71. 39 図 55)



RA09 竪穴建物跡 土器 NO. 8-9 出土状況
(39 図 53. 39 図 63)



RA09 竪穴建物跡 堆積土断面（南から）



RA09 竪穴建物跡 堆積土断面（東から）



RA09 竪穴建物跡 遺物出土状況（B層上面）



RA09 竪穴建物跡 カマド精査（南から）



RA09 竪穴建物跡 カマド精査（西から）



RA09 竪穴建物跡 カマド精査（東から）



RA10 竪穴建物跡 全景（南から）



RA10 竪穴建物跡 全景（東から）



RA10 竖穴建物跡 カマド (南から)



RA10 竖穴建物跡 遺物出土状況 (土器、土製紡錘車)



RA11 竖穴建物跡 全景 (東から)



RA11 竖穴建物跡 全景 (西から)



RA11 竖穴建物跡 カマド全景 (南から)



RA11 竖穴建物跡 土器 No. 1 出土状況



RA11 竖穴建物跡 カマド構築状況 (西から)



RA11 竖穴建物跡 カマド構築状況 (東から)



RA12 竪穴建物跡 全景（南西から）



RA12 竪穴建物跡 断面（南西から）



RA13 竪穴建物跡 全景（南東から）



RA13 竪穴建物跡・RD16 土坑 断面・遺物出土状況



RE01 竪穴建物跡 全景（南から）



RE01 竪穴建物跡 火山灰検出状況



RE01 竪穴建物跡 断面（西から）



RE02 竪穴建物跡 全景（東から）



RE02 竪穴建物跡 全景 (南から)



RE02 竪穴建物跡 断面 (東から)



RE02 竪穴建物跡 断面



RE02 竪穴建物跡 スロープ部断面



RE02 竪穴建物跡 スロープ部断面



RD06 土坑 (南東から)



RD07 土坑 (南から)



RD08 土坑 (北から)



RD09 土坑 全景 (東から)



RD10 土坑 全景 (南から)



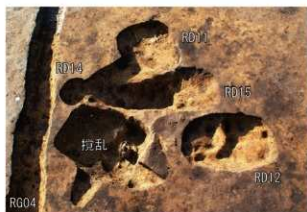
RD11 土坑 全景 (南東から)



RD12 土坑 全景 (南東から)



RD13 土坑 全景 (北から)



RD11・12・14・15 土坑 全景 (南東から)



RG03 a-a' 断面



RG03・04 C-C' 断面



トレンチ部 全景（北から）



トレンチ断面（東から）



表土除去作業風景



作業風景



作業風景



作業風景



作業風景



作業風景 実測作業



作業風景 実測作業



作業風景 実測作業



作業風景



作業風景 遺物取り上げ



現地説明会



現地説明会

第19図版 第5次調査 遺構(9) トレンチ, 作業風景, 現地説明会



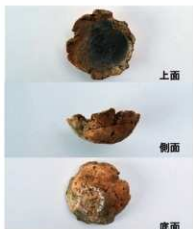
1 土師器 甕 RA04



2 土師器 甕 RA04



3 土師器 甕 RA04



4 土製品 ミニチュア杯 RA04



8 土師器 坏 RA05



10 土師器 坏 RA05



15 石製品 砥石 RA05



16 土製品 不明 RA05



17 土師器 坏 RA06



18 土師器 甕 RA06



19 土師器 甕 RA06



20 土師器 坏 RA06



21 土製品 玉 RA06



22 土製品 勾玉 RA06



23 土師器 坏 RA07



24 土師器 坏 RA07



25 土師器 甕 RA07



27 土師器 甕 RA07



28 土師器 球胴甕 RA07



32 土師器 甕 RA08



33 土師器 甕 RA08



34 土師器 甕 RA08



35 土師器 甕 RA08



36 土師器 甕 RA08



37 土師器 甕 RA08



38 土師器 甕 RA08



40 土師器 甕 RA08



41 土師器 甕 RA08



45 土師器 球胴甕 RA08



46 土製品 ミチノ7片口 RA08



47・48 土製品 土玉 RA08



49 土製品 勾玉 RA08



51 石器 砥石 RA08



52 石器 砥石 RA08



53 土師器 坏 RA09



54 土師器 坏 RA09



侧面 底面

55 土師器 坏 RA09



56 土師器 坏 RA09



57 土師器 坏 RA09



58 土師器 坏 RA09



59 土師器 坏 RA09



60 土師器 坏 RA09



63 土師器 鉢 RA09



64 土師器 鉢 RA09



65 土師器 壺 RA09



66 土師器 壺 RA09



68 土師器 壺 RA09



侧面

69 土師器 甗 RA09



底面



70 土師器 壺 RA09



72 土師器 壺 RA09



73 土師器 壺 RA09



74 土師器 壺 RA09



75 土師器 壺 RA09



76 土師器 壺 RA09



77 土師器 壺 RA09



78 土師器 球胴壺 RA09



80 土製品 不明 RA09



内面



側面



底面



側面~底面

79 土師器 甔 RA09



側面



底面

81 土師器 坏 RA10



82 土師器 坏 RA10



83 土師器 高坏 RA10



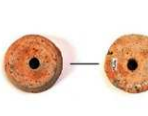
84 土師器 壺 RA10



85 土師器 壺 RA10



86 土師器 坏 RA10



87 土製品 紡錘車 RA10



88 土師器 壺 RA11



89 土師器 壺 RA11



90 土師器 甕 RA11



91 土師器 甕 RA11



92 土師器 甕 RA11



93 土師器 坏 RA12



94 土師器 甕 RA12



95 土師器 坏 RE01



96 土師器 甕 RE01



97 土師器 甕 RE01



98 土師器 坏 RD10



99 石器 石鏃 検出面



200 石材 不明 RA08 C層



201 石材 不明 RA08 C層



29 鉄製品 刀子 RA07 J層



50 鉄製品 刀子 RA08 床面



第3次調査区 全景（北から）



RA01 竪穴建物跡 全景（南から）



RA02 竪穴建物跡 全景（南東から）



RA03 竪穴建物跡 全景（南東から）・断面



100 土師器 坏 RA01



101 土師器 壺 RA01



102 土師器 壺 RA01



104 土師器 ミニフ7坏 RA01



105 土製品 勾玉 RA01



106 土師器 坏 RA02



107 土師器 坏 RA02



109 土師器 壺 RA02



110 土師器 壺 RA02



111 土師器 壺 RA02



114 土師器 球胴壺 RA02



115 土師器 球胴壺 RA02

報告書 抄録

ふりがな	あらやいせきはつくつちようさほうこくしょ							
書名	荒屋遺跡発掘調査報告書							
副書名	第5次調査 宅地造成に伴う発掘調査報告書							
編著者名	今野公顕・佐々木あゆみ							
編集機関	盛岡市教育委員会 盛岡市遺跡の学び館							
所在地	〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋 13 番地 1 電話 019-635-6600							
発行機関	有限会社タイキ・盛岡市教育委員会							
発行年月日	2021年10月15日							
ふりがな 所収遺跡名 (略号)	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あらいせき 荒屋遺跡 (IAR)	いわてけん 岩手県 盛岡市 なまゝい 第25地割 永井 46番1, 47番2	03201	LE 36- 6319	39° 38′ 56″	141° 9′ 20″	第4次調査 2019年10月30～31日 第5次調査 2020年4月23日～ 2020年8月26日	2,690	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項
荒屋遺跡 第5次調査	集落跡	奈良 時代	堅穴建物跡 12棟 土坑 10基 溝跡 2条		奈良～平安時代 土器 土師器 コンテナ 20箱 鉄製品 刀子 2点 土製品 土玉、勾玉 炭化材 等			
要約	<p>荒屋遺跡は、これまでの調査において、奈良時代の堅穴建物跡など古代の集落跡が確認されている。</p> <p>本調査では、奈良時代～平安時代初頭の堅穴建物跡や土坑を確認し、古代の地域様相の一端が解明された。出土土器から8世紀後半～9世紀初頭と考えられる。</p> <p>また、本調査地点周辺では「昔、「ちようえんぼう」という僧侶がいた。」という伝承があり、調査地点は「「ちようえんぼう」の畑」と呼ばれてきた。文献調査の結果、調査地点近隣に近世期の修験僧坊があった可能性が指摘できる。</p>							

荒屋遺跡発掘調査報告書 — 第5次調査 宅地造成に伴う発掘調査報告書 —

令和3年(2021年)10月15日

編集 盛岡市教育委員会 盛岡市遺跡の学び館
〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋 13 番地 1
TEL 019-635-6600 FAX 019-635-6605
E-mail iseki@city.morioka.iwate.jp

発行 有限会社タイキ
〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通1丁目5番24号
TEL 019-652-7597

盛岡市教育委員会
〒020-8532 岩手県盛岡市津志田第14地割37番地2
TEL 019-651-4111

印刷 株式会社阿都印刷
〒020-0873 岩手県盛岡市松尾町2番2号 TEL 019-624-2242